
Tales Of The Abyss ~ Another story ~

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales Of The Abyss
Another story

【Nコード】

N7030U

【作者名】

じーく

【あらすじ】

Another story 第二弾です。

基本的に原作通りに物語が進行します。結構大まかですがWオリジナルキャラはいますが、あくまで原作通り、ルーク、ティアが主人公。 旨く表現できないかと思いますが、温かい目で見守ってください。

#0 始まりを告げる声（前書き）

『ここは…… いたい……俺は…… 誰……だ？』

男は何も思い出せなかった。そう自分の名前以外……
それは生まれた意味を見つける……思い出す……そして知る。

そんなもう1つの物語……The Abyss。

#0 始まりを告げる声

男は何も思い出せない……

唯感じるのは、目の前に広がる無限の闇……

「ここは……どこだ……？ 俺は……いつたい……」

何を考えても分からない……

永遠に続くのか……そう思っていると……

《アル……我が……えるか》

それは闇の中で確かに聞いた。

「だ……誰だ……？」

闇に向かい叫んだ。

《我が名は……主の名は、アル……》

途切れ途切れだが…… 自分の名だろうか？それは聞いた。

「名前が……俺の名はアル……」

名前を聞いてもやはり自分のことを思い出せない……

《まだ…覚醒…では…無い…か…》

再び声が聞えてきた。

《我が…よ… 力の…一部を…授け…》

《生きぬいて… 世界…オールドランド……覚醒…》

またもや途切れ途切れで内容の意味がよく分からない…

「何なんだ？分かる様に言ってくれ！」

俺は闇の中で叫び続けた。

《…目覚めよ！》

次の瞬間…あたりが光で包まれた。

声の主はいつたい…

そして、俺は何者なのか…

そして、俺の意識は光の中へ消えていった。

#0 始まりを告げる声（後書き）

よろしく願いします！

さて…声の主は誰なのか…

これからどうなっていくのか…

それは………

分かりません… 苦笑

アビスが3DSで出たんで… ロザリオと並行して考えてた小説
を思い切って出してみました。
温かい目をお願いしますね！

#1 鉦山の町アクセリユス(前書き)

よろしくお願ひします!!

1 鉦山の町アクセリユス

…

……

……

そこは見慣れぬ一室のベッドの上。

まだ 意識がハッキリしないが……

どうやらオレはベッドで寝かされているようだ。

「……………ここは？」

上半身を起こし辺りを見渡した。

やはりまったく身にも覚えの無い場所……

ここはいつたい……

「あ……………お兄ちゃんおきたみたいだね！」

！！

突然の声に驚いて、

声が出た方を見ると、

「お兄ちゃんだいじょうぶ？ちょっとまっててね。ママたちよんでくる！」

歳は5〜7歳だろうか、

女の子がいた。

「えっと…君は？」

「ママー！！パパー！お兄ちゃんおきたよー！！！」

質問をしたと同時に、女の子は両親を呼びに言った。

「…………えっと…」

女の子の顔を見てもやっぱり身に覚えが無い…

それどころか、自分自身が何者かも分からない。

「…オレは…いつたい……………」

自問自答していると、女の子の両親だと思える人たちが来た。

「大丈夫かな??」

おそらく父親だろう。

オレの方を見て話しかけた。

「あ……あの… …ここは？オレはいつたい…」

「ここは 鉾山の町アクセリユスだよ。君は町のはずれで倒れて
たんだ。」

場所を説明してもらい、自分がどうしてここにいるのかも

一通り教えてもらった。

「そうだったんですか… …どうもありがとうございます。」

なぜ倒れていたのかは分からないが、

命の恩人にはかわりないは為、

お礼を言い立ち上がろうとした。

「くっ………」

「あ！ムリをしちゃダメよ？あなたは5日間も眠っていたんだから。
まずは安静になさい。はい、食事を持ってきたわよ。」

倒れそうになるオレを支え、その上食事まで用意してくれていた。

「本当に何から何まですみません…」

見知らぬ他人であるオレに……

最後の方は口に出来なかった。

「ふふふ、困った時はお互い様。さあまずは体を元に戻しなさいな。サラ！お兄ちゃんの看病をよろしくね。」

「はあーい！」

女の子はすぐ側までやってきて、

ベッドの側のイスに座った。

「お兄ちゃん！わたしがかんびょうしてあげるから！はやくげんきになってね！」

満面の笑みでオレを見つめた。

「ありがとう…」

声を搾り出すように、

自分の今の気持ちを搾り出すように、

今の思いを伝えた。

オレがこの世界に目覚めて最初の1日はこのように始まったのだっ
た。

#1 鉱山の町アクセリユス（後書き）

アビス3DS！いまやっていますね！

なつかしー！

おもしろーい！

久しぶりに楽しめそうなゲームでした！！

ありがとうございますー！

#2 戻らない記憶(前書き)

よろしくお願いします!!

やっぱりアビス面白いですね

9月の新作も必ずかいてます!!

#2 戻らない記憶

オレは、家の近くに有る高台へ来て空を眺めていた。

オレがこの家に来て数週間たち…

体の方は特に問題なく回復したが……

「……やっぱり何も思い出せないな……」

記憶……

それのみがいつまでたっても戻らなかった。

「やあ おはようアル。どうしたんだい？こんなところで」

そこに恩人であるガーランドが高台に来た。

「ああ、ガーランドさん… いや特に理由は無いですよ。ただ空を見ていただけです……」

そついうと少し表情を暗くし、

再び空を見上げた。

「そうか…」

そう言うとガーランドはアルのそばまで来た。

「隣…良いかな？」

アルのすぐ横に立ち聞いた。

「ええ かまいませんよ。」

そう言うと二人並んで座った。

「記憶… まだ戻らないようだね。」

暫く無言だったが

空を見ながらガーランドは静かに話した。

「……ええ」

「君がたまにとてもつらそうな表情かおをすると、サラから聞いてね。心配していたんだ。」

空を見ていたが、

言い終わると同時にアルのほうを向いた。

「私の友人にも記憶障害を持ったものがいてな、何か…すごいシヨックを受けて発祥したらしいんだ。根気いいケアと彼の故郷に連れ

て行ったことで何とか回復してな…それも約2年もかかったんだ。
君が不安なのはわかるよ。あの時の奴を見ているようだからな・
・大丈夫だ。記憶障害は何かのきっかけで起こるもの、いつか必ず無くした心の鍵が見つかり分かるようになるさ。」

いつもの陽気な表情じゃなく、

真剣な表情だった。

「ガーランドさん… 本当にオレはあなた方にお世話になりっぱなしですね…どうもありがとうございます。」

何度目だろうか？

本当に心優しき家族なのだ……

いくらお礼を言っても足りないくらいだった。

「ハハハ！礼は良いって、私も君には感謝しているんだ。いつも鉦山の仕事であまり娘にかまってやれていなかったからな。特にここ数年はいろいろと問題があつてさらに輪をかけて相手に出来なかった… 君のおかげでサラは大分元気になったよ。どうもありがとうな。」

そう言つて手を差し出した。

そして2人は握手を交わした。

「あーやーっとみつけたっ！」

暫く2人で話をしていると…

下から声が聞えた。

「おい。パパ！アルおにいちゃん！ あさごはんのじかんだよ！」

声の主はサラだった。

「おー！わかった！」

「はやくきてねー！」

そう言つと家の方へ走つていった。

食事の手伝いの最中だったのだろう。

「さ！行こうか。」

そう言つてガーランドは立ち上がった。

「あの…ガーランドさん。」

一緒に立ち上がり話しかけた。

「ん？なにかな？」

「オレに何か手伝える事は無いですか？体の方は何とか回復しましたし、このまま何もせずにお世話に成りっぱなしというのも悪いので…」

「そうだな…… 力仕事は他にもあるが…… 人数は揃ってる…… うむ……」

暫く腕を組みながら考えた。

「よし。なら私達が留守の間は私の娘の勉強相手になってくれないか？家庭教師ということかどうか？」

ピント人差し指を突き上げて答えた。

「えええ！ オレ役に立てるかどうか… それにこの世界についてもよく思い出せないし……」

「ハハ！ いいじゃないか、娘とともに勉強してくれ！ 君が勉強する姿を見せればきっと娘も真似をする。娘は君の事がお気に入りだからな。今の君の知識も広がるし娘も勉強する… 一石二鳥じゃないか。」

笑いながら答えた。

「後、もし鉱山の仕事で手を借りたくなったらすぐに貸してくれ！ ……これでどうかな？」

ウインクしながらアルを見た。

「……わかりました！ よろしくお願いします！」

「ああ！ じゃ まず朝飯だな。早くせんとレイとサラに怒られる。」

「あはは そつですね。」

そつ言い自宅へと帰っていった。

#2 戻らない記憶（後書き）

ありがとうございました！！

#3 秘密の場所（前書き）

テイルズおもしろーい！そして最新作も買っぞー

でも やっぱりアビス

文は駄文なんでできとーに付き合ってください！

#3 秘密の場所

サラとの勉強会を実施して数週間・・・

様々な事を学べた。

この世界は・・・

オールドランドと呼ばれるものらしい。

どこかで聞いたことのある名前だった。

オレが・・・初めて心に響いた言葉だった。

ガーランドさんに頼まれた通り、

オレはガーランドさんの娘・サラと共に、家庭教師とは言えないが・
・

共に勉強をした。

この世界・・・

この世界を包み込むように存在する音譜帯・・・

6大音素　そして最近発見されたと言われる第七音素・・・

それぞれには固有の属性を持つらしい。

中でも7番目の音素・ローレイについては存在は公式にはその存在は確認されていないらしい。

歴史上、接触に成功したのはユリア・ジユエのみであるらしいのだ・・・

覚えるのは大変だ。　勉強の難しさが改めて分かる。

しかし・・・

「知識が増える事はとても楽しい事だったんだ・・・」

つい声に出してしまった。

サラはまだ幼い。

世界の成立ちや情勢について学ぶのはあまりにも早い事だった。

基本的な幼少期に学ぶ教本を一通り共に勉強していたのだが、

その中で、世界のことについて記載されている本が見つかったのだ
った。

ガーランドさんに聞いても知らない本だと言っていた。

おそらくこのアクゼリユスへ立ち寄った学者か誰かが落としたもの
らしい。

ここまで、綿密に記載されている教本など見たことが無いからだそ
うだ。

「おにいちゃん すっーごい たのしそうなかおしてる！」

サラが俺の顔を覗き込みながら話しかけてきた。

「ははは・・・そうかい？ うん 楽しいんだ。オレのことは何も
思い出せないけど・・・ いろんなことが知れて・・・ それに
サラ、君と一緒に遊んだり勉強したりするのも凄く楽しい。過去の
事より今って思えたからね。」

そう微笑みかけながら、サラの頭を撫でてあげた。

「えへへへ〜」

サラは撫でられるのが嬉しいのか、

目を細めてニコニコしながら笑っていた。

「わたしも おにいちゃんがんばりになってくれてうれしい！ そーだ！ おにいちゃん おべんきょうもおわったし おそとにあそびにいこう！ わたしのひみつのばしょ、おしえてあげる！」

サラはそう答えた。

「へえー秘密の場所？」

「うん！ みんなにはないしょなんだ！ おともだちにもまだおしえてないよ！ さきに おにいちゃんにおしえようとおもって！！」

サラはそう言うといすからピョンっととびおり、

アルの腕をつかんだ。

「いじりー！」

「ああ、分かった。よろしく頼むよサラ。」

その後、サラの母親・レイさんに一言いいに行く。

「あまり 危ないことしちゃダメよ？ アルもしっかり見ておいてね。」

「任せて下さい」「はい！」

鉦山は子供が遊ぶには危険がある場所だ。

あまり 娘に危ない事をしてもらいたくないのは親なら当然の事だ。だが、父親の仕事の関係で鉱山の町と言うあまりに寂しい場所に生まなくてはならない状況は親に責任がある。

サラは、基本的には凄く寂しがり屋なのだ・・・

だが大変よくできた子でもある。

その事を決して顔には出さないようにしているのだ。

だからこそ、父親が帰ってきた時はコレでもかというほど、甘えている。

しかし、それも中々難しくなっていた。

鉱山の中から障気と呼ばれる原因不明の人体に悪影響を及ぼす気体が微量ながら出てきたらしいのだ。

故に作業は困難を極め、そして時間もかなりかかるようになっていく。

人員に被害が出ないようにする為だ。

そして、家族との時間も激減した。

サラもその事を実感していた・・・

そんな時、サラは倒れているアルを見つけたのだ。

とても親しくしてくれ、一人っ子であるサラが「おにいちゃん」と呼べる人に出会えたのだ。

そして サラは日に日に元気になっていった。

決して顔には出さないようにしていたが、

親には分かる。

それが嬉しくて仕方が無い。

そして、アルと言う男の子（18歳くらい？）

数週間共に生活をしていて信頼できる人だと言う事も分かった。

この子にならサラを任せれる・・・

「いつてらっしゃーい あまり遅くならないでね!!」

「「「いつてきます!」」」

そして家を出た。

#3 秘密の場所（後書き）

ありがとうございました！ちょっとペースをあげたいですね・・・
投稿の・・・

アビスはゆっくりプレイしてます

面白いです！！

#4 大切な思い出(前書き)

よろしく願いします！

こっちの方も頑張って投稿します！

#4 大切な思い出

町を暫く歩き、鉾山の入り口まで来た。

「サラ・・・ その秘密の場所って大丈夫なのかい？ あぶない場所じゃないのかい？」

レイさんにサラの事をまかされている以上、

あまり無茶な事はできない。

少し心配になり聞いてみた。

「だいじょうぶだよ。おにいちゃん！すぐそこに みちがあるでしょ？ちよつととおりにくいけど。ここなんだ！」

そう言っつてサラは坑道にはいる手前の所に指をさした。

「こつち！とおりにくいからからきをつけてね。」

四つんばいになりながら、穴の中へ入っていく。

結構長い道だった。20〜30mはあるだろうか。

それを超えると広い場所に着いた。

「ふう、今度は広い場所に着いたね。　　ここがそうかい？」

「ちがうよー　ほらこんどはあっち、　ひかりがみえるところ！」

サラが今度指をさしたところは　少し傾斜になってる道で、奥を見ると光が見えた。

外に繋がっているのだろうか・・・

「よし！サラ！ちょっと疲れただろ？おんぶしてあげようか？」

子供には　少しばかりしんどくなりそうだと考えた為、提案した。

サラは初めは渋っていたが、

やはりしっかりしていても甘えたい盛り。

「ありがとう！ー！おにいちゃん！ー！」

そう言って、背中にピョンッと飛び乗った。

「よし、行くぞー！」

「うん！ー！」

おにいちゃんのせなか・・・　あつたかい・・・

サラは幸せ間でいっぱいだった。

寝てしまいそうになるのを必死に我慢しながら・・・

まるで包み込んでくれているような感覚を感じていた。

サラにとっては少し名残惜しかったが、

目的地へ到着した。

「ここだよ！」

サラから声がする前にオレも確信していた。

そこは、鉾山の町を少し高い位置から見渡せる絶景ポイントだった。

夜になれば 星空を見あげる事ができるだろう。

朝、太陽が昇る瞬間も時間によつたら見られるかもしれない。

「すごいね・・・ この町にこんな場所があるなんて。」

素直にびっくりしていた。

「えへへ！すごいでしょ！おひさまがちょうどあたるから、よこに

なるとポカポカしてきもちいいよ!」

そう言っつてサラは横になった。

「そうだね・・・ うん! 気持ちいいな。」

アルも一緒に横になる。

「ここ! おにいちゃんにおしえたのがさいしょだからね!」

笑顔でサラは言った。

「オレが最初でよかったのかい?」

頭を撫でながら聞くと、

「うん! おにいちゃんここにきてみたかったの・・・ いろいろとおしえてくれたし、そのおれいだよ。」

そして、サラは少し顔を赤くし、

「それに・・・ だいすきなひとといっしょにきたかったから・・・」

答えた。

その言葉に少し照れくさかったが、

アルは笑顔を作り、

「ありがとうな・・・サラ、この景色・・・今日の事、オレは絶対忘れない。大切にするよ・・・」

サラの頭を胸に抱きながら答えた。

「うん・・・もうちょっとここで おやすみしよう！」

そのまま 2人で暫く景色を楽しんでいた。

#4 大切な思い出(後書き)

ありがとうございました!!

#5 静寂を破る絶望(前書き)

よろしくお願いします!!--

#5 静寂を破る絶望

「きゃあああ！」

1〜2時間後だろうか、

突然 静寂な時が打ち破られた。

それは 悲鳴が聞えたからだ。

「なっ なんだ！サラ起きろ！」

「ん〜・・・」

まだ 眠たそうにしていたが、続けて悲鳴が聞えてきた為すぐに目が覚めたようだ。

「な・・・なにおにいちゃん・・・ みんなのこえが・・・」

「町へ戻ろう！」

そのままサラを抱えて来た道を引き返していった。

少し開けた場所で・・・ 悲鳴が起きた理由が分かった・・・

「モツ モンスター!!」

それは、オレの体ほどある泥人形・・・ゴーレム数匹と狼のような獣数匹がいたのだ。

「おにいちゃん・・・こわいよ・・・」

サラは震えていた。

「サラ・・・ オレの後ろにいる。」

サラを後ろにやり、モンスター魔物から遠ざけた。

ガールルル・・・

今にも飛び出してきそうな感じがした。

この感じがモンスター魔物の臨戦態勢なんだろう。

(迂闊だった・・・ 坑道の中にモンスター魔物はいると聞いていたが、町ま

でてくるなんて・・・)

魔物モンスターがいるのは坑道の奥の方・・・

町にまででてくることはこれまでに一度も無かったと聞いていたのに・・・

(嘆いていても始まらない！サラは絶対に護らないと・・・ だけど丸腰のオレに何ができる？ 隙を見て逃げ出すか？ しかし 敵の数が多し・・・ 何か無いか??)

あたりを見渡す・・・

しかし 武器になるような物は無かった。

次の瞬間！

ガアアアアア！！

一斉に魔物モンスターが飛び掛ってきた。

「くそ！！ これでも食らえ！！」

蹴りを放つ。

ギャン！！

やぶれかぶれだが、一匹にはカウンター気味に当たり、蹴り飛ばす

ことに成功した。

しかし・・・

ガッルアアアア！！

後の数匹の攻撃はかわせず、爪・牙の連撃を受けてしまった。

「がつ！！！」

膝をつき痛みを堪えようとするが、

グオオオオオ！！

次は移動速度の遅いゴーレムがその豪腕を振り上げそのまま放った。

ドガアアアア！！

「がはああつ！！！」

洞窟の壁に激突した。

「く・・・くそっ・・・」

アルは体がバラバラになりそうな感覚に襲われていた。

サラはその場から動けず、涙を流しながら、

「おっ おにいちゃん!!!!」

サラは力いっぱい叫んだ。

その叫びに魔物達モンスターが反応し、

標的を動けないアルでは無く、サラに変えた。

「くそお！サラ!!!!に にげろー!!!!」

叫ぶ・・・

しかし ショックが大きいのかサラはその場で震えているだけだった。

もう 数秒もせずに 魔物達モンスターは襲い掛かるだろう。

「頼む！逃げてくれ！サラー！！!!」

動けない体にムチを打ち、立ち上がるうとするが体が言う事を利かない。

絶望がすぐそこまで迫っていると言つのに・・・

その時、

ガアアアア!!

モンスター
絶望達が一斉に飛び掛った・・・

サラに届くか届かないかの刹那の瞬間

目の空間が・・・いや・・・

「世界」が止まった・・・

#5 静寂を破る絶望（後書き）

やっとモンスター出てきました

テイルズですしね

読んでくれた方ありがとうございます！！

#6 覚醒した得体の知れぬ力（前書き）

よろしくお願ひします！

《おちつけ・・・ 我が・・・ よ・・・》

やはり途切れ途切れの内容だ。

肝心の所が聞えない。

《今こそ・・・力を・・・に解放しろ・・・》

「な・・・なに？」

《我が声に・・・その身を委ねろ》

声が・・・ハッキリ聞こえだした。

「どういうことだ！ 何なんだお前は！」

《早くせぬと・・・その娘が死ぬぞ？》

「つつ！！！」

その「声」に鼓動が高鳴る・・・

「頼む・・・ あの子は助けさせてくれ・・・ お願いだ。お願い
します！」

今の思いの全てをその「声」にぶつけた。

《我が声・・・身を委ねろ 主なら出来る・・・ 自身を解放し
ろ！》

その声が終わると同時に、

「世界」が再び動き出した。

「いやああああ！」

サラの叫び声だ……

「っ!!！」

気付いたら……

モンスター
魔物達とサラの間に入っていた。

「おにいちゃん！」

「遅くなった、ゴメンな。」

体中から力が……不思議だ。力が湧くような感覚だった。

単なる力じゃない……

これは……譜術の……？

一瞬考えをめぐらしたが……あまり考えている時間は今は無い！

「我らを護れ聖なる盾・・・ 干戈を和らぐ障壁かへとなれ」
掌を突き出す。

「ミスティック・シールド！」

バキイイイン！

2人を包み込むような壁が現れた。

ドカアアアッ！

ギャンー！！

モンスター
魔物達は壁に正面衝突した。

突進の勢いそのままに來たため結構なダメージになったようだ。

「サラ・・・ この中にいれば大丈夫だ。これが俺たちを護ってくれる。ここから出るんじゃないぞ。」

まだ震えの止まらないサラだったが、アルの声を聞き少し震えが収まった。

「おにいちゃん・・・ は？」

どうするつもりかと聞く・・・

「あいつらがいるとここから出れないだろ？」

そう言つて魔物モンスターの方を向く。

「あ あぶないよー！」

サラは目に涙を溜め 腕にしがみついていた。

そんなサラの頭の上に手をおき、

「大丈夫・・・ サラのおかげで少し思い出した事があつたんだ・・・
記憶・・・ オレの戦いの記憶をな・・・」

記憶を取り戻したのは嘘だ。

思い出したわけではない。

これは・・・ この力はオレのものではない。

まるで体に馴染まないのだ。

昔から使っていたのならば、少しは馴染むはずなのだが・・・

借りている力・・・その表現が一番しっくり来る。

しかし 今、サラを護れるならなんだって良い！

そして軽くウインクしながらサラの頭を撫でる。

「あ……」

サラは落ち着きを取り戻し笑顔になった。

大好きな人に撫でられているからだ……

「すぐに終わらせるよ。 町の皆もみんなも心配だしね。」

そう言うとまだ結界の周りで警戒している魔物達モンスターの方へ振り向き結界の外へ出た。

「さて…… 派手にこの得体の知れない「力」を使うとこの坑道が崩れるかもしれないからな…… 魔物モンスターには魔物モンスターを……だ……サラを襲おうとしたお前達をオレは絶対に許さない……」

アルは魔物達モンスターを睨みつけると共に、詠唱にはいる……

「熱く滾りし獄炎…… 聖なる龍の姿となりて…… 我が敵を喰らい尽くせ」

アルの腕が炎で包まれるとその炎の形が変わっていく……

「ドラゴ・フレイム！」

ドゴオオオオッ！！

それはまるで意思を持っている炎龍サラマンダー・・・

サラマンダー・モンスター
炎龍が魔物達に襲い掛かった。

ギヤアアアッ！

グオオオオアッ！！

瞬く間に、モンスター達は炎の龍に捕らわれ、焼かれながら逃げ
いった。

#6 覚醒した得体の知れぬ力（後書き）

詠唱に関してはチヨコチヨコ言葉を変えた テイルズで出てくる詠
唱分ですw

どこから取ったか分かる人にはわかるかと・・・ 苦笑

ありがとうございますー！

#7 助けられた命（前書き）

ティルズ エクシリアはちょっと物足りなかったですね・・・

賛否両論ですが！オレは物足りなかったものの楽しめました。

これからもいい作品を生み出してもらいたいものです！！

#7 助けられた命

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう よかった。逃げてくれたか・・・」

安堵のため息をしながら、腰を落とした。

「おにいちゃん!!!」

背後に軽い衝撃を感じた。

サラだ・・・

「おっ おにいちゃん・・・へーき???ケガしてないっ!?!」

泣きながらすがりつく・・・

大声で泣いていた為多少耳に響いたが、それが心地よく感じるのはサラが無事だったからだろう。

「ああ、大丈夫だよ・・・ サラも・・・無事でよかった・・・」

サラの手を握り抱きしめ返した。

「ははは・・・ 本当に・・・本当に・・・良かったな・・・」

「うああああん!おにいちゃああん!」

暫くの間サラは泣き続け・・・

そして泣き声が聞えなくなつた。

眠つたのだ。

「すー・・・すー・・・すー・・・」

無理もない、

つき先刻まで襲われかけていたのだ。

小さいサラにとって、凄まじいストレスだったのだろう。

アルに抱かれている時、安心しきり、眠ってしまったのだろう。

「よしっ・・・」

サラを抱きかかえ町の方へ向かつた。

町の方では・・・

被害こそ少なかったが、まだ少々モンスター達はいた。

坑道の入り口付近に男達が集まり抗っていたのだ。

何体かは町に入った形跡はあったが、全て撃退していた。

まだ予断を許されないが、少なくとも事態は收拾に向かっていていると感じた。

「ガーランドさん!!」

坑道の入り口より少し離れた場所で、怪我人を運んでいるガーランドを見つけた。

「あ…… おお!!アル!サラ!!無事だったか!!心配したぞ!!」

すぐさま駆け寄り、寝ているサラにお構いなく2人を抱きしめた。

「う……ううん……」

サラは苦しそうな声を上げたが、表情はとても穏やかだった。

「はい……ガーランドさんも良かったです…… 魔物に襲われた時はみんなどうなっているかと心配でした……」

「お前達も襲われたのか!!それでよく無事だった…… サラの事も…… 本当にありがとう……」

抱きしめる力が強まる。

「ははは……オレも良かったです…… さあ まずはサラを安全な場所へ。」

そう言うとガーランドはアルとサラを開放した。

「そうだな。ハグは後でゆっくりとするとしよう。こっちだ、レイが町の皆を手当てしている。」

そういうと集会場へ向かった。

「サラ！！！！」

ガーランドにおぶられている、サラを見たレイは、涙を流しながら駆けつけた。

「サラ！！ぶっ 無事なの！！！」

「ああ！アルが連れ帰ってきてくれたよ。」

ガーランドはアルのほうを指差した。

「ありがとう・・・本当にありがとう・・・アル・・・」

涙を流しながらアルに礼を言った。

「いえ・・・良いんですよ・・・ オレも良かったです・・・ みんな・・・皆無事で・・・」

アルもまた目に涙を溜めた。

その時、

力が抜けたのか、背中・腕に鈍い痛みが走った・・・

「ぐっ・・・」

その場にアルは膝をついた。

「「アル!!」」

2人はアルを抱え傷を確認した。

「こいつぁ・・・ひどい・・・ お前ここのまでの傷をおって・・・」

「アル・・・」

傷を見てサラとガーランドは悟った。

おそらくは、サラを庇ったのだらうと、

サラには 傷ひとつない、所々汚れた箇所や、服が破れていたりしたが、

それは遊びに行く時は、大抵つけるので日常茶飯事の事だ。

レイは、アルを抱きしめた・・・

そしてガーランドもまた、レイとアルを包み込むように抱きしめた。

「こんなになるまで・・・ サラを護ってくれたんだな・・・アル・・・」

「ありがとう・・・ありがとう・・・ありがとう・・・とう・・・」

レイは涙を流しながら・・・ガーランドは声を振り絞りながら言った。

「ははは・・・安いものです・・・サラの命に比べればこのくらいの傷・・・本当に皆無事でよかったです・・・」

アルもまた、2人を抱きしめた。

傷の痛みはまだあったが・・・

とても・・・とても心地よかった。

「アル・・・痛まない？」

暫く抱きしめられていたが・・・

まだまだすることがある！とガーランドは再び町を護る為外に出て行った。

アルも行くこととしたが、レイとガーランドに止められた。

まずは傷の手当てをしろ！って凄い剣幕で・・・

「はい！大丈夫ですよ・・・レイさん。それに・・・オレにはこれがあります。」

すつと立ち上がると、

他の怪我人の所へ行き、しゃがみこみ怪我人に手を当てた。

すると・・・みるみるうちに傷が治っていった。

「！！そつ・・・それは治癒の譜術・・・セランスフォニム第七音素？アル・・・
あなた第七音譜術士だったの・・・？という事は・・・ひよつとして記憶が！？」

治癒の力に驚きアルに聞くが。

「いえ・・・なんて言えばいいんですかね・・・洞窟で魔物に襲われたシヨックで・・・何か思い出したんです。オレが使える力のことだけです・・・ね。」

頭に「声」が聞こえたことは説明を省いた。

上手く説明する自信がなかったからだ。

「なので、自分の事は大丈夫です。怪我人の治療を手伝います！」

レイにそう言い運ばれてきている怪我人の治療に当たった。

「ふふふ・・・あなたが来てくれて本当に良かったわ・・・」

少し驚いた表情をしていたが直ぐに穏やかな顔になり

小さな声で・・・呟いた。

「え？何か言いました？？」

治療に当たりながらレイの方を見た。

「いーえ！ありがとうございます！って言ったただだよ！」

レイは笑顔を作り、アルと共に看護に当たった。

#7 助けられた命(後書き)

ありがとうございました!!

8 絶望からの刺客(前書き)

よろしくお願ひします!..!

#8 絶望からの刺客

暫くして・・・

主に重症患者を優先し、治療に当たっていた。

見た目ほどは皆酷くはないようだ。

「ふう・・・ これで大丈夫でしょう・・・ 後は皆暫く安静にしていれば・・・」

汗を拭い一息ついた。

「ええ ほんとお疲れ様・・・ありがとうございます・・・」

レイはタオルを出し、アルに被せた。

「ははは・・・ お礼はいいです。オレだってあなた達がいてくれなかつたら野垂れ死んでいたんですから・・・ その恩があります・・・ そのことに比べたら大したことはないです。」

笑いながら呟いた。そして、

「これでおあいこってことでどうでしょうっか?」

レイの方を見て言った。

レイは涙を拭い、笑顔を作り、

「そうね・・・あなたがしてくれたことの方が大きいと思うけど・・・
・ そういつても納得してくれそうにないわね？」

答えた。

「あははは！そうですね。」

2人ともいい笑顔だ・・・

しかし その笑顔は直ぐに・・・

ドゴオオオオオオオオオオ！！！！

轟音と共に消えるのだった。

「なっ なんだ！！！」

凄まじい音だ・・・

「そっ・・・ 外から・・・ まさか・・・」

レイは嫌な予感が頭の中に走り、

外に飛び出していった。

「レイさん!! 待って!!」

アルもその後引き続き集会所を飛び出した。

そこで2人が見た物・・・

「化け物・・・・・・・・」

レイは腰が抜けてしまいその場に足から崩れ落ちてしまった。

「あれは・・・いったい・・・」

目の前の化け物・・・ そう、坑道の入り口は集会場から大体50メートルほど離れている。

なのに、外に出ると直ぐに分かってしまった。

恐らくはリーダー格のゴーレム・・・

先ほど遭遇した魔物と同じ種類の類だろう・・・

だが、1つだけ・・・

圧倒的に違うところがあった・・・

体格サイズの違いだ。

縦はどれくらいになるのか・・・遠目から見ても規格外のデカさだ

とを感じる。

その上アルとレイは・・・

1人の男性がゴーレムの右手に鷲づかみされ投げ飛ばしている衝撃^シ場面を見てしまった。

ただの人間では抗えない事が瞬時に理解できた。

少^レなくともレイは・・・ そう感じた。

先ほどまで襲ってきていた魔物とはワケが違う・・・

「も・・・もう・・・」

レイは足が・・・体全体が震えていた。

ダメだ・・・っと言うその前に。

「レイさん!!!」

アルがレイの両肩を掴み強く揺さぶった。

「ア・・・アル・・・?」

まだ気を保ててないようだ。

「しっかりとしてください!早く怪我人を町の外へ連れて行ってください!少なくともここよりは安全だ!皆まだ万全じゃあないですが、動く事は問題ないハズです!早く!!!」

いつものアルの顔じゃない……

鬼気迫るかのような表情だった。

そのおかげで、レイは気を取り戻す事が出来た。

「わ……わかったわ……」

震える体に一括し 答えた。

「お願いします!」

そしてアルは坑道の方を向いた。

「アル!あなた……どうするつもり!?!?」

それに気付いたレイは大声で叫ぶ。

「あれを止めます。」

振り向かずそう答える。

あまり時間を掛けるわけにはいかないのだ。

「そ……そんなのムリよ!!! 行っちゃダメ! 今度こそ死んでしまう!」

レイが叫ぶ。

その叫び声のせいか・・・周りの轟音のせいか・・・

目を覚まし外へ出てきた人がいた・・・

「おっ・・・おにいちゃん!!」

サラだった。

「大丈夫！やりようはあります！こうやって話している間も被害が増えていく・・・オレを信じてください!!」

アルはそういうと、付けていた治療器具を全て外した。

その時、背中に軽い衝撃が走った。

「おにいちゃああん・・・いかないで！だめだよ・・・しんじやうよ・・・」

サラだ・・・

ぼろぼろと涙を流しながらアルにしがみ付いた。

確かに時間が惜しかったが、振りほどくわけにはいかない。

サラの方を向きなおし、

「サラ・・・オレを信じてくれ。」

笑顔で話しかけた。

「で……でも！でも！！」

サラはまだ泣いていた。

いつもの笑顔は消えうせ、

大切な人が死んでしまう…… 会えなくなってしまう……

そんな不安感でいっぱいだったのだ。

「サラ。大丈夫だ。おにいちゃん！強いのが知っているだろう？知ったのは今日だけだな。」

笑いながら話し続ける。

「あそこで、一生懸命戦ってくれている人たちを助けなきゃ！サラやレイさんの大切なガーランドさん…… パパもあそこにいる…… 必ず連れて帰ってくるから。」

サラは涙を拭いながら……

「ほ……ほんとうに？？ おにいちゃんも…… パパも…… サラのところにかえってきてくれる？？ ぜったい？？」

アルを見ながら…… 何度も出てくる涙を拭いながら…… サラは言った。

「ああ！約束だ！！オレは約束は破らない…… そうだろう？」

「う……うん！」

サラは必死に涙で汚れ放題の顔で笑顔を作った。

そしてサラの頭を撫で、レイのほうを向き。

「レイさん、サラを早く！」

口早にレイに伝えた。

レイは最初こそは強く反対していたのだが。

サラとアルのやり取りを見ていて・・・ 反対するのをやめた・・・

「わかった・・・あなたを信じる、アル。あの人を・・・お願いします。」

サラを抱き寄せ、アルに言った。

「はい。 任せてください。」

アルは駆け出した。

まだ暴れまわる巨大ゴーレムの方へと！

#8 絶望からの刺客（後書き）

人を手づかみで投げ飛ばす化け物にどうたいこうすんのさー！って
自分で思っちゃいましたw

がんばれー！アル！

#9 負けられない戦い(前書き)

やぁーっと 原作キャラでいきます

よろしくお願いしますー！

#9 負けられない戦い

町の住民は必死に抵抗を続けていた。

ここが破られれば・・・

背後にいる自分たちの家族が・・・

その思いだけが彼らを突き動かしていた。

しかし、状況は変わらない。

1人・・・また1人と動けなくなっていく・・・

「くそお！！　こんな化け物どうすりゃ良いんだよ！！」

一通りの銃火器・刀類で巨大生物の攻めのセオリーである足を攻撃していたのだが。

化け物ゴレムはそれをもともせず、攻撃を繰り返していた。

鉱山の男たちの仕事は戦う事ではない・・・

鉱山の力仕事で体力はあっても戦いにはまるで素人なのだ・・・

その上ここアクセリユスは領土問題もあり、マルクト帝国に所属す

るのだが、その問題もあつて軍隊も迂闊には動いてくれない。

ガーランドは町一番の力持ちであり、軍隊にいた経験もある為戦いなれていたが、

ここまでの敵とやり合った事は無かった。

ついに、皆の頼みの綱であつたガーランドも、

ゴーレムの譜術「ロックブレイク」を脚に直撃してしまい。

動けなくなつてしまった。

その他の皆も満身創痍だ・・・

「く・・・そあ・・・ここまで・・・なか・・・オレの後ろには・・・あいつらが!!」

力を振り絞るが・・・

体が言う事を聞いてくれない・・・

ガーランドは、ゴーレムがデカい腕を振り上げるのを見て、覚悟を決めた。

グオオオオ!!

(アル・・・頼む・・・俺の家族を・・・)

目を閉じた・・・そして無情にもゴーレムは腕を振り下ろした。

誰もが絶望していたその時！

「我らを護れ聖なる盾・・・ 干戈を和らぐ障壁かべとなれ」

「ミスティック・シールド！」

ガキイイイン！！！！！！

凄まじい激突音が響いた。

(なんだ・・・ 今の・・・ まだオレあ・・・死んで無いな・・・
今は・・・)

ガーランドは目を開ける・・・

そこに見えたのは、

「ガーランドさん！！しっかりしてくれ！！！！」

アルだった。

アルは壁の様な物で化け物の攻撃を受け止めていた。

「ア・・・ル・・・？」

ガーランドは突然の事で混乱していた。

そのガーランドを担いだ者がいた。

??? side

「ガーランド！逃げるぞ！！」

ガーランドの仕事仲間の1人、ファンだ。

「ファ……ン……こいつぁいったい……」

ガーランドは朦朧となりながらもファンに聞く。

「オレも聞きてえよ！ あの化け物がおめえに攻撃してくる時、アルがおれのそばに来て 「アイツを止めるからその隙にガーランドさんを頼む」 って言ったんだよ！ 無茶だつて言おうとしたんだがな！ 言ったと同時に駆け出しやがった。あんな小僧が命張つていったんだ！オレもいつまでもおねんねしてるワケにゃいけねえだろっ？」

「アル……が……？ あいつ……くそ！ あいつ……を1人で戦わせるわけには……」

ガーランドは目に生氣が戻り体に力を入れた。

「動くな！じつとしてる！！悔しいが俺たちにゃアレはどうにもなんねえんだよ！ アルに……掛けるしかなんねえんだ！」

ファンも納得したわけじゃなかった……

あんな・・・子供に・・・任せるなんて・・・

だがあの場にとどまりやあ今のボロボロの俺たちじゃ何も出来ない・
・寧ろ足手まといになる事も理解できていた。

「ファン・・・!」

理屈は分かる・・・だが、

ガーランドも納得できなかった。

「ああ!最低だ!!一人で戦わせるなんてよ! なさけねえよ!
!だがな・・・ アイツがやられたら次は俺が真っ先に死ぬ!!死
んでも 家族には指一本触れさせねえ!!」

ファンの強い決意が・・・感じられた。

「おい・・・ オレも一杯つき合わせろや・・・」

ガーランドは、にやけ顔をつくり・・・

答えた。

「ああ・・・わかってるよ!!」

そして、ファンはガーランドを戦闘範囲から離れたところまで運ぶ
と、ガーランドを地面に座らせ、他の仲間たちを運ぶため、再び戻
っていった。

side out

グオオオオオオオオ！！！！

ドゴオオオオオオオオン！！

何度も何度もその巨大な拳をぶつけてくる・・・

「ぐうううう・・・」

なんて威力だ・・・

先ほどのゴーレムたちに比べればまさに大人と子供の差だ・・・

腕に鈍い痛みが再び走る。

「くそっ！！」

腕を放したその時、

パキヤアアン！！

シールドが・・・破られた。

破られる瞬間、後ろに下がった為、

何とか直撃は避けられた。

「堅牢なる守護の力・・・来い！」

「バリア！」

自身防御強化の譜術。先ほどとは違い自らの防御力を上げる譜術だ。

焼け石に水かもしれないが・・・

ゴーレムは体の一部を散弾銃のように飛ばす攻撃もしてきている。

あるのと無いのでは全然違う！そして。

「天を切り裂く力！ 雷撃の剣となり我が敵に降り落ちろ！！」

「サンダー・ソード！！」

雷を帯びた巨大な紫色の剣がゴーレムの足に突き刺さる！雷撃の有る斬撃だ。

バリバリバリッ！！ズツシャアアン！！

グルオオオオオ！！

初めてのゴーレムの叫びがあたりに響いた。

「うおおお！！」「す……すごい！！」「頑張れ！！！」

倒れていた人たちもアルに気付き、力の限り声を上げる。

アルは逃げて欲しかったが……彼らは足を負傷し動けない。

だからと言って、運び出そうとすれば格好の的だ。

……鉱山の男達は決して仲間1人だけ残して逃げるという選択
肢は持ってなかったのだ。

皆ファンやガーランドのように……

「アルが倒れたら次は俺だ……」と皆、そう考えていたのだ。

その決意は嫌でも感じる。

そして責任重大になる……

（オレが倒れるわけにはいかない！）

まだ暴れているゴーレムに向きなおし身構えた。

??? side

「これは・・・何事ですか？」

ここはマルクト帝国の軍艦タルタロス。

あれは・・・アクゼリユスですか・・・

戦塵が見える・・・

場所は鉱山の町アクゼリユス。

確かにマルクトの領土になっても国境に位置するせいか、両国の小競り合いも少なくない。

だが、あまりにも巨大な戦塵だった。

「大佐！」

使いを出した部下が帰ってきた。

無闇に、軍艦で近づく事は出来ないのだ 小競り合いならば混乱をさらに増す可能性が有る。

「何か分かりましたか？」

大佐と呼ばれる長身・長髪の男が尋ねる。

「はっ！！ 確認に向かったところ！ 鉾山奥より大量のモンスターが出現したとの事！ それらは撃退したそうなのですが、その後、巨大なモンスターが現れ、町で暴れている模様です。」

敬礼しながら町の現状を伝えた。

「巨大なモンスター・・・ ジェイド・・・ 時間がないのは分かりますが」

大佐に比べると少し背丈の小さい中性的な顔立ちの男が不安そうに伝える。

「・・・分かりました。問題はありませんが、町の住人を救う為です。そういうことならば問題はないでしょう。ただし、少数精鋭でいきます。軍艦がそのまま行きますと混乱が有るでしょうから。」

大佐・・・ジェイドはそういうと出発の準備を شدした。

「もー！イオン様は！！ここに残ってくださいよ！！」

続いて出てきたのは・・・ 小さな女の子だ・・・

歳は10代前半だろうか？

にしても軍艦に乗るには少し場違いな気がするような子である。

「いいえ アニス。僕も行きます。町の住民の人はきつと傷ついてしまっている人達もいるはずですよ。ならば僕の力が役に立ちます。」

イオンと呼ばれている中性的な顔立ちの男性（男の子かな？）。

行くなと言われていたが 行く気満々のようだ。

「もーイオン様は一度言うつと聞かないんだから・・・ はあゝ
じゃあわたしも行きますよ！」

アニスと呼ばれている女性。（女の子かな？）

この会話を聞くと彼女はこの男性の護衛なのかもしれない。

「じゃっ 話はまとまりましたね！さっ 早速行きますよ。」

「もー 大佐もあっさりしすぎ了！少しは止めてくださいよ！！」

「はっはっはー イオン様は言ったくらいでは止まらないでしょっ？」

「すみません。ジェイド、アニス。」

「もー わかりました！ってば！！ 早く行ってちゃっっちゃと解決しちゃうしましよっ！！！」

「「はい！」「はい。」

そうやって、3名+警備隊数名の少数精鋭は艦を降りアクセリユスへ向かった。

s
i
d
e

o
u
t

#9 負けられない戦い（後書き）

出てきました、タルタロス!!

そして・・・出てきました。例の師団長&腹黒ちゃん&天然君!

さて・・・どうなるのやら・・・

ありがとうございました!!

#10 共闘・・・そして決着（前書き）

ちよつと短いですー！
すみませんー！苦笑

#10 共闘・・・そして決着

アル side

雷撃の剣をゴーレムの足に突き刺してからは、
敵の動きが鈍くなっていた。

「よし!」

すぐさま次の詠唱に入ろうとするが、

カツ!!

ゴーレムの目の部分が光ったと思ったその瞬間!!

ロックブレイクが発動!

ドゴオオオン!!

「くそっ!」

直撃さえは避けられたものの、相手の譜術による攻撃のスピードは中々の速さだった。

「詠唱しながら・・・回避しながら・・・攻撃はきついなせめて奴に隙が出来れば・・・」

譜術が基本的に最大の攻撃手段、

これほどの相手には接近戦はきつい、陣形で言えば後衛が望ましい。だが・・・ここにはもう戦える人間はアル1人しかいない・・・

厳しい状況だった。

だが決まるのであれば、決め手はある・・・とりあえず頭に浮んでいる譜術の中では随一の力だ。

まだ力の底は見えない・・・が、とりあえず奴を倒すには十分だと思われる。

だが・・・

「使う隙が中々出来ない・・・な それに、こいつの攻撃はいちいち周りを巻き込む。このままじゃ被害が拡大してしまう！」

舌打ちをしながらゴーレムを睨みつけていると・・・

「炸裂する力よ・・・」

「エナジー・ブラスト!!」

後ろから声が聞えた・・・

キュイイイン・・・ ドガアアアン

その次の瞬間 爆発のような衝撃がゴーレムを襲う。

グオオ!!

突然の衝撃に驚いたのか、予想以上に呻き声を上げた。

振り向くと・・・男が立っていた。

「あ・・・ あなたは？」

「今は自己紹介をしている暇はありません。アレを早く仕留めましょう。」

男はそういうと何処からか槍を取り出し、構えた。

「そうですね・・・ 何にしてもありがたいです!これで・・・仕留めれる。」

2人になった事で術を使用する隙が圧倒的に多くなった。

「瞬迅槍！！」

男はそのままゴーレムの足に槍を突き刺す！

かなりの威力なのだろう、ゴーレムの足がぐらついた。

そこですかさず追撃を入れる・・・

「唸れ烈風！大気の刃よ、切り刻め！」

「タービュランス！」

巨大な竜巻が出現し・・・ゴーレムを切り刻んでいく・・・

巨体のためか浮き上がる事はなかったが、動きを封じ込んでいた。

絶好のチャンスだ！

アルはその瞬間、頭に浮んでいる術式を書き・・・

「・・・ 3つの裁き・・・ 来れ黄泉の門！ この場に集いて
門を開け三幻神！！」

異常な・・・力が集束していた。

ジエイドもそれに気付く。

「つつ！（何ですか……！これは……！）」

あの男から迸る凄まじいエネルギー……

これは……まずい……！

「おい！その場から離れろ……！」

アルは男に叫ぶ！

ジエイドはその言葉の前に既に回避行動を取り離れていた。

「これで最後…… インディグナイト・デストラクション……！」

キイイイイーン……！！

三本の……光の柱がゴーレムを囲む…… 正三角の形に……

グルオオオ！？

ゴーレムは何が起こるか悟ったのか？

その場から離れようとするがもはや手遅れ。

三本の光の柱が上空で1つになり……

そのまま、巨大なゴーレムの頭上に落ちる！

#10 共闘・・・そして決着（後書き）

ありがとうございました！！

遅くなりましたちょっと説明！オリジナル譜術！！作者都合上w

【ミスティック・シールド】

聖なる障壁が現れ、対象者を包み込むように守る防護魔法。

耐性は如何なる属性の攻撃も防ぐが、耐久値は勿論あり、限度を超えると破壊される。

彼・・・アルが守りたいと言う気持ちから生まれた力だそうだ・・・

アル曰くw

【ドラゴ・フレイム】

炎が龍の形となり、敵に襲い掛かる火炎系の譜術。

火玉を飛ばすファイアーボールとは違い、炎そのものが意思を持っており、術者とリンクしている。

即ち悪しき者が使用すれば、いつまでも対象者を執拗に攻撃を加え滅する事が出来る。

だが、アルはそこまで残虐な事はしたくないと考えているため、逃げたなら直ぐに解除するようにしている。

術使用の際は全くの無防備な為、接近戦には脆い面も勿論ある。術を使用するのをやめれば動けるが、その瞬間に炎龍は姿を消す。

【インディグネイト・デストラクション】

これは光の属性を持つ純粹物理破壊攻撃。

詠唱の通り 3つの裁き・・・ 三幻神

即ち・オルフェウス

ゼウス

イシユタム

この3つの裁きが1つとなりて、敵を滅する。

原子レベルまで分解するかのような、無数の超高密度の光の礫が対象者を細かく分解していき、如何に強力な防護壁を使用したとしても、食らえば唯では済まされない。

難点は 詠唱する際 三幻神を呼び出す為の膨大な力を有する為、使用者の魔力は根こそぎ持っていかれる。

この力は広範囲ではない為使用する際には十分に注意しなければならぬ。

はい・・・ 適当に作りました！！

テイルズに実際にある魔術・譜術・・・ e t cをもじったもの
です・

テキストにながして下さいー！

1 1 薄れゆく意識（前書き）

よろしくお願いします！！

11 薄れゆく意識

ゴーレムも倒した……

町も無事だった……

「ふう……お……おわった……」

体中の力が一気に抜ける……

「……彼は……一体……」

あれ程の譜術は見たことがなかった。

自身も軍人として数多の戦場を駆け巡ってきた経験がある。

その中で最も危険と判断した攻撃を天秤に掛けてもコレに比べたら小さい……

世の中にはこれ程の術を操る者がいるのかと、

暫くジエイドは立ち尽くしていた。

「うおおお！！」「アル！！！！」「っ！！！！」

砂埃が風に舞いながら消え、あるの姿を視認した住人は一目散にア
ルの方へ駆け出した。

その中にはファンやガーランドもいる。

「ありがとな！お前すげえフォニマー譜術士だったんだな！！つか！記憶戻ったのか？」

ガーランドとファンが集まりもみくちやにする。

「ははは……… っ いや 記憶の方はまだ…… 力だけ思い出したみたいで……」

もみくちやにされかなり疲労感があったが、大した事ではない。

皆無事だった……

喜びの方が大きい。

「それより……礼はあちらの方に」

そう言うとアルは共に戦ってくれた男の方を向く。

「貴方の助太刀がなければ、倒しきれなかった…… どうもありがとうございます。」

そして頭を下げた。

「いえ、軍人として当然のことをしてだけです。礼には及びません。」

笑顔になり、そう伝えた。

しかし頭の中では、

（彼の力は・・・まるで見たことのない・・・私が使える譜術に似ていますが中身は別物のようだ・・・大変脅威ですね・・・彼の素性・・・力・・・全て調べた方が良いでしょう。今は大事な任務がありますが・・・理想は我がマルクト軍に入ってもらう事ですが・・・ムリに連れて行くとかかなり反感を買いそうですね・・・さて、どうしたものか・・・）

アルをスカウトする事を考えていた。

当然だ。

これほどの譜術・・・彼は見たことがない。

敵国キムラスカの方が彼に気づき、そちら側に行くのはかなり危険・・・

軍人ならばそう考えるだろう。

頭の中でどうするか策略をしていると。

「アルおにいちゃん！！！！」

「うおっ！！！」

またまた背後から声と衝撃が・・・

もちろん！

サラだ。

「おにいちゃん！おにいちゃん！！！！ よかった・・・ほんと
うに！よかったよおー！！」

そのまま、アルにしがみ付いた。

「ああ！ もうこれで大丈夫だ！本当に終わったよ。・・・サラ
も無事でよかった・・・ レイさん・・・ガーランドさん・・・そ
れにみんなも・・・」

アルはサラを抱きしめながら涙を浮べ周囲を見渡した。

皆アルとサラを微笑ましそつに見ていた。

ガーランドとレイもまた抱き合い。

そしてアル達に近付き・・・

また抱きしめた。

「・・・よかった・・・ 本当に・・・ 今日は ご馳走を作るわ・・・
貴方も・・・ どうかうちに寄ってくださいね！」

レイはジェイドの方を見ながら言った。

「御心遣いありがとうございます・・・」

任務を優先したいところなのだが・・・

ジエイドは彼の事を優先させた方がいいと判断した。

「さあ・・・ みんな！とりあえず町の大掃除はまた明日だ！ 今日！みんなで騒ごう！！この町を守ってくれたアルを囲ってな！！」

ガーランドは高らかに宣言した。

皆それに乗り、雄たけびのような歓声を上げる・・・

「ははは・・・ これじゃ・・・ ゆっくり寝れないかもな・・・
・ サラ、又あの秘密基地に行こうな！」

サラに笑いかける。

「うん！！」

サラも満面の笑顔で答えた。

「「ジエイド！」大佐あ！！」

2人がジエイドの方へ駆けつけた。

「終わったんですね・・・ 良かった。」

「ええ・・・ しかし 気になる事があります・・・」

「ええ！何かあったんですか！？大佐がそんな風に言うなんて！」

「！」

アニスは露骨に驚いていた。

「アニス……」

「はっはっはー まあこういつこともあるんですよ！ 気になるのは彼の事です。」

視線を送る……

「???あの男性ですか?」

「ええ……」

ジエイドが又難しい表情を作る。

「彼を……」

ジエイドが彼について調べたいという事を伝えるその次の瞬間。

「ッつー!」

アルがサラと繋いでいた手を離し、頭を抑えながら膝をついた。

「お……おにいちゃん……?」

次に胸を押さえる……

「ぐっ…… だっ…… だいじょうぶだっ…… 心配は……」

い……………よっ……………」

そのまま地面に倒れこむ……

「お……に……ちゃん……？おにいちゃん！！　だっ　だれか！おにいちゃんをたすけてええ！！！」

サラの叫び声で皆が集まってきた。

「『『『アル！！』『』『』」

なんだ……これ……

あれ？？……………なんでサラ……泣いてるの…………？

あれ？？……………皆も……………なんでそんな表情かおを…………？

あれ？？……………体がうご……………かない……………

《まだ……早すぎたか……………？》

あれ……………この声は……………

あの時の……声……

《時が来るまで……休むがいい……………運命の歯車は動き出した……》

運……命……？

#11 薄れゆく意識（後書き）

ありがとうございました……！

#12 マルクト軍艦タルタロス(前書き)

よろしくお願ひします!!

#12 マルクト軍艦タルタロス

3週間後……

ここはマルクト軍の軍艦タルタロス。

「ん……あ……あれ？……ここは？」

見上げると……そこは知らない所の天井だった。

「は……はは……オレこんなの多いな……目が覚めたらどこか……わかんないって言うの……」

苦笑しながら 上半身を起こした。

「とりあえず……生きてる……な。妙な声が又聞えてきたけど……でも、何だろうここ……あれ……窓の外が動いてるし……乗り物の中……かな？」

あたりを見渡すと誰一人おらず……そこは清潔感がある医療器具らしき器具が沢山ある部屋だった。

おそらく・・・というか 100%医療室か何かだろう・・・

「状況が・・・あまり掴めないけど・・・ とりあえず人は探そう・・・ 何とか体は動けるみたいだし。」

そう言い、立ち上がろうとすると、

ガチャッ・・・

ドアが開いた。

「あー!」「」

そこには髪が緑色でちよつと中性的な顔立ちの男の子(?)と人形を背負った女の子がいた・・・

(あれ・・・ 見たことある・・・な・・・)

って考えていると。

「おーーきたーー!」

女の子の方が突然大声を上げた。

キーーーーーン!!

「うわぁ!! 耳があぁぁ!!!!」

横にいた男の子の方は笑顔で、耳を塞いでいた。

「ははは・・・ どうもすみません。目が覚めてくれてよかったです。体は・・・大丈夫ですか?」

男の子が笑いながら話しかけてきた。

「あ・・・ははは・・・ 耳以外は・・・何とか・・・」

苦笑しながら答える。

「ははは、そうですね。アニス!! 突然そんな大声を上げちゃダメじゃないですか。」

「だーっってーっ やっと目が覚めてくれたんですもん! イオン様も気持ちわかるでしょ?」

どうやら2人は 女の子のほうがアニスで 男の子の方がイオンと言っている。

楽しそうに言い合いをしていた。

「あははは・・・お楽しみのところ申し訳ありませんが・・・ここはいつたい・・・それにオレ・・・どうなったんですか？」

聞くとやっとな返事が返ってきた。

「ああ・・・すみません・・・ 貴方はアクセリユスで魔物を討伐した後、倒れてしまったんです。 とりあえず町では十分な医療を受けられないのでセントビナーまで貴方を運びました。 といつても運んだのは僕じゃありませんが・・・」

苦笑しながらさらに続けた。

「とりあえず、命には別状はなかったのですが、意識が戻らない原因がつかめないらしく・・・ これ以上何も出来ないといわれましてね。 で、それならばタルタロスの医療器具で十分と言うわけで、ここで治療の方を続けていました。」

説明が終わり・・・

えーっと。

「・・・なんで船の上の医療室で？ そのまま病院の方が良かったのでは？？」

患者を移動させながら治療するよりは大きな病院で安静の方がいいのは当たり前・・・常識だと思う・・・

この部屋は比較的静かで振動はないのだが・・・

乗り物の上なのはかなり不安・・・

まあもう起きたからいけど・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

いいの???

「あははは・・・ 僕もそういつたんですけど・・・」

また苦笑していた。

「大佐があなたにどーしても話を聴きたいって言うて聞かなくなつてさ！ 町ではあらかた聞いたみたいだね。タルタロスの設備は並じゃないから安心してよ。ってか無事だったしい！」

アニスがケロリンつっとしながら話す。

「あ・・・いやっ・・・もう・・・いいや・・・ それで。」

この子に何言つても多分ケロツつと回避されそうだったからとりあえず何も突っ込まないようにした。

間違いないのは命の恩人には変わりないし。

「ああ！！そつだ！アクゼリユスのみんな・・・」

「大丈夫です。」

最後まで言う前にイオンが話した。

「町ならば大丈夫です。魔物はあの後も現れましたが、マルクト軍の方たちが、撃退し以前の静かさに戻っているという報告もあったそうです。」

そう聞いて……とりあえずほっとした。

「じゃあ……皆大丈夫……なんだな……？」

「はい……ただ……」

そこでイオンの顔が曇る。

「障気が……坑道より出てくる量が増えたらしく……完全に安全とは言い切れません。」

「え……そんな！じゃあ町の皆は……？」

あわてて起き上がりイオンの肩を掴む。

「あー！ちよつと……！」

アニスが割って入ろうとするが、

「アニス！良いんです。アクセリユスはマルクト・キムラスカの両国の国境にあります……現在……マルクト帝国の領土となっています、しかし町への街道が障気の影響で進むことが出来ないのです。それによりマルクト側から手は出せません。」

イオンが続ける。

「なので・・・これからキムラスカに行き、ピオニー陛下の和平新書をお届けなのです。これが出来れば、キムラスカ側へ救援を求め、る事も出来ます。」

一通りを説明してもらった。

両国が険悪な状況に有るのはサラとの勉強会の時、調べたばかりだった為、割と早く理解できた。

だが・・・

「なるほど・・・しかし・・・ 両国の睨みあいがそう簡単に・・・ 終結するでしょうか・・・？」

不安の顔を隠せず・・・呟いた。

「大丈夫！だってイオン様がいるから！」

アニスが高らかに宣言！

「????？」

そう言われても・・・と言う表情をすると。

「あつ・・・ アンタ！イオン様の事・・・知らないの!!！」

こいつ・・・頭大丈夫か!!??って感じの表情で言われた。

「うづう…… うん…… そう言えば君達の名前しか知らないし。」

そう言うとアニスがあきれたように話す、

「導師イオンの名前くらい知ってるでしょー!!」

アニスが突っかかるように言ってくるが……

「アニス！」

それはイオンにより阻止された。

「すみません…… アニスの非礼をお詫びします。町の人たちに聞きました。貴方は記憶が無いのでしょうか？ わたしの事を知らないのは当然なんですよアニス。」

イオンはアルとアニスを見ながら話した。

「あ……そーだったんだ。ごめん……」

アニスは素直に謝った。

が…… アルから返ってきた言葉は意外な言葉だった。

「いえ……イ……オン……？ ローレイ教団の……
トップ 導師イオン！…… 貴方がそうだったのですか？」

「「え！」」

2人は驚いた。

記憶が無いと言っていたのに……

「もしかして……記憶が戻ってたのですか？」

イオンが尋ねた。

「いえ……アクセリユスに滞在してた時。勉強しましたからいろいろと、だから……完璧……とまではいきませんが、ある程度はわかります。さすがに容姿まで知らなかったの……」

苦笑しながら頭を掻く。

「へえ……貴方は凄い人ですね……」

イオンが尊敬するような眼差しで見る。

「凄い……ですか？オレが」

「ええ……自分が誰かもわからないという、苦悩……孤独感
は尋常じゃなかったと思います。それでも 貴方は前を向き行動
しているように感じます。それは並大抵の事じゃ出来ない事ですよ。」

イオンはそう続けた。

さすがにここまでストレートに言われたら照れる。

「いえ・・・ オレが目を覚ましたところが良かったからだと思いますがね。あの町の人たちと一緒にだったからこそ 頑張れたんだと思います。辛くなかったといえましょうになりますが、あの町で生活を共にして、オレは一人じゃないって思えたんです。」

少し照れながら・・・ 笑顔で話した。

アニスもイオンも感心しっぱなしといった感じだ。

記憶が無いという事はそれほど大変なのだろう。

当事者なのに実感が湧かないのは、孤独など感じない・・・ 満たされていた環境だったからと思いたい。

・・・いや、そのはず・・・だな。

#12 マルクト軍艦タルタロス（後書き）

そろりそろりと原作へ入って行っていきます〜!!
ありがとうございます！

#13 漆黒の翼を追いかけて（前書き）

出てきました漆黒の翼〜 と言っても殆ど名前だけですが・・・
苦笑

分かる方は分かりますね〜
アビス主人公さん達にそろそろ会えます！

原作突入だあーい！

よろしく願います！！

13 漆黒の翼を追いかけて

暫く3人でいろいろ話していると・・・

ガチャ・・・

男が入ってきた。

「やあ 目が覚めたんですか。それは良かったですね。」

「あ・・・ 貴方は確か・・・」

顔には見覚えがある。

確か、あの魔物ゴレムと戦ってる時、加勢してくれた人だ。

「ああ、自己紹介がまだでしたね。申し送れました。私はマルクト帝国軍第三師団所属ジェイド・カーティス大佐です。」

「あの時・・・オレを助けてくれた人ですね。あの時はどうもありがとございました。オレはアル・・・と言います。性の方はまだ・・・わからなくて・・・」

ジェイドもアルに記憶が無い事は先ほどの会話を聞いてわかっ

ていたようだ。

・・・盗み聞きとは感心しないな。

顔に若干出てたらしいのでアニスに察っしられ　あまり気にすると
きりがないと諭された。

「まあ　立ち話もなんですから、ブリッジの方へ行きましょう。本
来なら、客室に・・・とも思いましたが、貴方の事も早めに聞いて
置きたい事がありますし、それに漆黒の翼が出たついで先ほど報告
がありましたので」

漆黒の翼が何なのかは知らないが、

仕事を優先した方がいいんじゃないかな？

まあ特に断る理由は無いので、ブリッジの方へ付いていった。

無関係者がブリッジに入ってもいいのかなあ・・・

「漆黒の翼はどうなってますか？」

ブリッジに入り、この軍艦を操縦してるであろう団員に声を掛けて
いた。

「はっ！視認は出来ました。奴らはローテルロー橋の方角へ逃走中
です。」

「なるほど・・・キムラスカ王国へ逃げるつもりですか。それは少々厄介です。できれば、その前に捕らえたいものですね。」
メガネを指で上げながら呟く。

何やらとんでもないところに来てしまったようだ・・・

ブリッジに入る前から、この軍艦がかなり揺れていたため、その漆黒の翼とやらを追いかけているのは想像できた。

で、その漆黒の翼はこの辺りでは有名な盗賊らしい・・・

つい数週間前まではのほほんと・・・ほのぼのと生活してたのに・・・

魔物に襲われてからなんか方向性が・・・

ちょっと悲観的になっちゃったが、アクゼリユスを救うには、中立であるローレイ教団のイオンの力がどうしても必要だろう。

それくらいならわかる。

例え争いが続いたとしても・・・

一時休戦になる可能性が高い。

そうなれば、アクゼリユスを救えるかもしれない・・・

ならば、できる事は何でもしよう。

何やらこの師団長殿は自分を気に入ってるらしい（迷惑だが・・・苦笑）。

何故なのかはわからないが、この幸運を活かすようにしよう。

そう考えていた。

考えモードから、戻ってくると・・・

タルタロスの進路上に辻馬車がいた・・・

見えた！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・轢かれる！！！！

「その辻馬車道を空けなさい！！巻き込まれますよ！！」

ジェイドのお陰でどうにか 道端の潰れた蛙的な事にならなくてすんだ・・・

ほっとしていたのもつかの間・・・

「ジェイド師団長！！敵は橋を渡り終え爆薬を放出しています！！」

一人の団員が叫ぶ・・・

「ええええ！！」

さっきからずっと頭の中で考えていたのだが、さすがに声が出てしまった……ビビった……のだ。

「大丈夫ですから 落ち着いて…… しかしまあ 橋を落とす
て逃げるつもりですか。」

ジェイドがそういったと同時にそれは来た。

「フオンスロットの起動が確認できました!! 敵、フィフスフォニム第五音素による
譜術を発動しています。」

……たしか第五つて……火の音素だけ…… 火薬に火……

「爆発する!!」

また叫んでしまった……

「はい。そうです。よく勉強していたみたいですね まあそれはともかく
タルタロスを緊急停止! 譜術障壁起動!」

「了解!! タルタロス緊急停止! 譜術障壁起動!! 橋が爆発します!
す!」

ズガアアアアン!!!!

大爆発が起きた。

そして橋は無残にも崩れ落ちてしまった。

もうあちらにはこの橋を使ってでは行けないだろう……

あんな爆発が起きたというのに……ジエイドは淡白にこなしていた。

「はあ……これが軍人か…… 凄いですね……」

手腕……冷静さなどその他もろもろを見て実際に感じた事が声に出た。

「アルー 大佐はね……ちょーっと他の人と違うから。あんまほめても意味無いと思うよー！」

横にいたアニスが、意地悪そうな顔をしながら笑う。

「え……そうなんだ……」

驚きながら言つと。

「いやぁ アニスには言われたくありませんねー」

「ふふふ……」

ジエイドがすかさず反論 イオンも笑っていた。

「えー なんてー！ イオン様も笑いすぎー！」

「ははは・・・」

オレもつられて苦笑してしまった。

ジエイドとアニス・・・

この2人は直ぐには掴みにくい性格だな・・・

アニスの方は裏表が激しそうだ・・・

正直な感想です・・・

「また逃がしてしまいましたね・・・ おまけに陸路でキムラスカへ行くのは難しくなりました・・・ まあとりあえず ひとまず撤退しましょう。」

そう言うと一行はエンゲーブへ行くことになった。

エンゲーブってどんなところだろう・・・

アクセリユスしか知らない身とすれば・・・

少し楽しみでもあった。

13 漆黒の翼を追いかけて（後書き）

ありがとうございました！！

#14 食料の村 エンゲープ(前書き)

・・・いきなり店先の食料に手を出していたのはさすがにどうかと
思いましたね・・・ 苦笑

よろしくお願いします!!

#14 食料の村 エンゲープ

エンゲープに付くと、ジェイドは何やら村長さんと話があるようで、そちらの方へ向かった。

「イオン・・・様も行くんですか？」

一緒に来ていたイオンに話しかけた。

あれ？アニスいない・・・

「イオンでいいですよ。私もアルと呼びますから。私は少し気になる事があるので食料庫を調べに行こうと思ってます。」

「ああ・・・どうもありがとうイオン！ 食料庫・・・ああさつき町の人達が話していた食料泥棒のことですか・・・ オレも付いていきますよ。いいですか？」

呼び捨てを許してくれたイオンに感謝した。

教団のトップってちょっと頭が固いのかと思ったけど・・・

イオンはそんな感じが全然しない。

だからこそ、人望があるのだろう。

「手伝ってくれるのですか？ありがとうございます。アルは優しいですね。」

満面の笑みだ・・・

「アニスがいないみたいですし、護衛は・・・こんなのかな場所じゃ要らないとは思いますが、万が一もありますし・・・」

テレを隠しながら話す。

イオンも察してくれたようだ。

笑っていた。

後聞くとところによると・・・アニスとはしょっちゅう離れるらしい・・・

故意なのか天然なのか・・・

恐らくは後者だろうな・・・

そんな風に考えていた。

村の食料子に来てみると・・・

「あああ・・・こりゃ酷い・・・相当な空腹だったのかね・・・」

「

見たのは、見事に荒されていた食料庫だった。

まあ・・・殆ど残ってないや・・・根こそぎ盗られている。

この村の主力製品は食料。

何よりも価値のあるものだということだ。

何やら村が殺気立っているのはそのせいだろう・・・

「これは・・・・・・・・・・」

イオンは食料庫の中で何かを見つけたらしく。

その場にしゃがみこんだ。

「何かあったの？」

「・・・・・・・・ええ　これで犯人がハッキリしました。」

そう言うと、イオンは何か動物の体毛のような物を見せた。

「・・・・・・・・んつと・・・　さすがにわからないか・・・　もうちつと
勉強したらよかった・・・　生き物系も・・・」

頭を捻りながら考えるがわからない・・・

「あああ！ごめんなさい。アル！これはですね聖獣　チーグルの抜け毛です。」

イオンは説明してくれた。

「謝らなくてもいいですよ。事実ですから、変に気を使わせるのもちよっと申し訳ありませんし、」

笑いながら話す。

イオンもわるそうにしていたが・・・最後は笑っていた。

「そういえば・・・チーグルってあの・・・えーっと ユリアと並んで教団の象徴になってる草食獣・・・でしたよね？」

確認するように尋ねた。

「はい。その通りです!」

「ん・・・ 何で草食獣の彼らが・・・ うーむ・・・」

腕を組みながら考える・・・

わかんないけど・・・

「とりあえず、村長さんの所に報告しに行きましょう。」

「そうですね。」

そういって、村長の屋敷の方へ向かった。

.....

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

着いたのはいいけど・・・

「何やら騒がしくないかな・・・？」

「そうですね・・・穏やかではありません・・・」

それはそうだ、

建物の中から「大人しくしろっ！！ この泥棒め！」やら「こいつ
漆黒の翼なんじゃね？」とか聞えてくる・・・その後は「ち
げー！ーよ！！何でオレがんなことすんだよ！！！！」・・・
とメチャ大声で、

「早く言って誤解を解いてあげましょう！」

イオンはそう言うが・・・

「ん・・・ 店先での泥棒だったら 庇えないですよ？」

オレたちがわかってるのは食糧庫の犯人だし・・・

「まあそうですが・・・ とりあえず入りましょう。」

「はぁ・・・そうですね。」

このドンちゃん騒ぎの中に入るのは気が引けるけど仕方ない。

扉を開けようとする．．．

「ティアさんが．．． 彼らは漆黒の翼じゃ．．． 先ほど．．． 逃走．．． 私が保証します．．．」

ジェイドの声が聞えてきた。

それに 騒ぎも静かになっていた。

「丁度良かった．．．今のうちに入りましょう。アル！」

「そうだね。」

扉を開ける．．．

「それに 食料泥棒じゃなさそうですね」

皆がこちらを注目した。

「アル、イオン様。」

イオンはそのまま村長の方へ行き、先ほど見つけたチーグルの抜け毛を渡した。

「少し気になったので、彼と調べていたら部屋の隅で見つけました。」

「これは．．．チーグルの抜け毛だねえ！」

それを見た村長も犯人を確定したようだ。

イオンはそれを確信し、

「ええ・・・恐らくはチーグルが犯人でしょう・・・」

「何か解せない点もありますが・・・ね」

イオンとアルで話を繋げた。

その時、

「ほら見る！！ だから言ったじゃねーか！！！！」

赤毛の長髪の男が騒ぎ出した。

どうやら彼が犯人扱いされていたのであろう。

村の人たちは謝罪していた。

「ふう、一件落着のようですね。」

ジェイドは笑いながら言っていた。

「根本的な解決にはなっていないと思うが・・・」

アルはジェイドに突っ込む。

「おやおや 貴方は優しいですね。いろいろとしなければならぬ

事があるんですが……」

「まあ…… オレが連れてきてもらった理由もアバウトだし、ア
クゼリユスを助けるためには貴方方といた方が良いんですが……
やっぱり見過ごせないというか……」

少し暗い顔をしながら言った。

「ありがとうございます。アル。」

イオンが礼を言った。

イオンもチーグルと村について心配していたみたいだ。

イオンも言おうとしたが、アルが先に言ったのだ。

「ええつと…… 何の礼です？」

アルはそんな事はわからない為疑問を言ったが。

ジエイドは分かっているみたいだ。

やれやれといった感じで苦笑していた。

イオンもにこやかに笑っていた。

「はあ……」

わかんないよ……

ため息をつくしかなかった。

「まあそれはさておき、とりあえず用事の方は終わりました。本日は遅いですし・・・この村で1泊させてもらいましょう。・・・貴方にも聞きたい事がありますし。」

そう言うと、村長さんに案内された。

どうやら宿屋じゃなく唯で部屋を使わせてくれるらしい。

そこにアニスも乱入してきた。

またまたイオンと楽しそうにもめていた・・・

それにしても・・・見ていて飽きない・・・な・・・

そんな風を感じていた。

#14 食料の村 エンゲープ（後書き）

ありがとうございました！

#15 ジェイドの疑念(前書き)

短いです・・・
切れなかったのー・・・

#15 ジェイドの疑念

その日の夜・・・

「単刀直入に聞きましょう。貴方は記憶が無いと聞いていましたが、ならばあの譜術は一体何なのですか？」

ジェイドは昼間の時と違い若干目を鋭くさせ聞いてきた。

「ええ・・・っと・・・何！って言われてもオレには記憶が・・・」

突然雰囲気が変わったため ちょっと引きながら言うが・・・

「おかしいですね・・・ あれ程の譜術が記載されている教本はありません。なのに貴方は完全に使いこなしていましたよ？ 単に勉強だけでは到底身に付けられません。数週間の期間となれば尚更です。」

疑いの眼差しで見られながら言う・・・

イオンも少し庇ってくれてるみたいだけど・・・

（正直に言うか・・・ 信じてくれるかどうかはわかんないけど・・・）

これまでの事を、2人に話した。(アニスは女性なんで別部屋です！)

頭に響く「声」の存在・・・

そして、力を与えたのはその「声」のせいだという事を・・・

2人は暫く黙っていたが・・・

「俄かには信じがたい話ですが・・・嘘を言っているようにも思えません。貴方についてはいろいろと調べては見ましたが・・・やはり何も分かりませんでした。」

「そうですね・・・僕も彼は・・・アルは嘘をついているようには見えません・・・」

よかった・・・

2人とも信じてくれた・・・

普通なら信じられないような事なのにな・・・

オレは心の中からほっとしていた。

ジェイドは・・・

「過去が無い・・・まさかとは思いますが・・・
同位体複写技

フォミクリ

術・・・？あれは、生物に対しては禁止されてる禁忌の術のはずです！いえ・・・まだ決め付けるわけには、彼と瓜二つの人物でもいたら・・・その線もありますか・・・)

難しそうな顔をして考え込んでいた。

「ん・・・？何か不満だったか？ ジェイド。」

少し不安になったため聞いてみたが。

「いえ、少し考え事をしていただけです。貴方の事は町の・・・アクゼリユスの人たちに頼まりましたからね・・・しっかりと面倒を見ないと。」

笑いながら・・・言われた・・・

面倒って・・・子供じゃないんだけどな・・・

まあ 知識は殆ど無いに等しいけど・・・

いや・・・結構覚えてると思うんだけどなあ・・・

実際に見た事無い物もたくさんあるけど・・・

「それに僕は貴方の言う「声」が気になりますね・・・ 聖なる焰・・・そして解放・・・」

なにやら難しい表情をしてイオンは考え込んでいた。

「ひょっとして・・・意味がわかるのか？」

イオンの表情からそう思い聞いてみたが。

「いえ…… ちょっと確信がもてないんです…… すみません……」

話しちゃ不味い事なのかな……？

とりあえず、

「確信がもてれば…… よろしく頼むよ。」

イオンはアルの表情から、気を遣わさせると感じた。

「すみません…… わかりました。」

「うん。期待してるから。」

そしてジエイドから、

「まあ、確信がもてない事を無闇に話しても混乱するだけの可能性
がありますからね。 その方がいいですよアル。」

はっはっはーって感じた……

こいつは…… 何か知ってるみたいだな……

まあ ジトーっと見てたけど

かるーくいなされた。

その日の話しはそこまですで・・・終了した。

#15 ジェイドの疑念(後書き)

ありがとうございました！

#16 チーゲルの森（前書き）

よろしく願いします!!

はい！原作に突入してからの戦闘です！

・ ・ ・ ・ ・ イオンはどうやって1人で森にきたんですかね ・ ・ ・
・ 1人で行かす分けなと思うんですが ・ ・ ・ とりあえず抜
け出た！ツてことにしました!!

駄文ですがよろしくです！

#16 チーグルの森

次の日・・・

何やらイオンがいない・・・

ジェイドも朝早くに何処かへと行ってしまった。

とりあえずは村を出ないように、と言われて。

イオンがいなくなった事は 知らないみたいだ。

と言つかアニスもないし・・・

「まあ・・・ 大体どこにいったかは想像がつくけど・・・」

オレは、部屋を出ると村長さんを探した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほど・・・ この村から北の森林地帯がチーグルの森なんで

すね・・・ ありがとうございます。」

村長は明るい笑顔で「よいーよと言ってくれた。」

この村・・・最初は騒がしいイメージだったが・・・（まあ事情が事情だし・・・ 苦笑）

村のトップ・・・すなわち村長さんがとても暖かい感じの人だ・・・

それだけでもいいところだなあと感じた。

そして、オレは少し準備をし、チーグルの森へと向かった。

イオンは十中八九そこに言ったと思われる。

なぜなら ずっとチーグルの窃盗事件に納得がいていなかったからだ。

チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい・・・人の食べ物を盗むなんておかしいと・・・

「ふう・・・・・・・・ 一言いってくれば良かったのに・・・」

アニスの苦勞が少しわかったような気がした・・・

「とりあえず・・・ 出発の前に一通り準備していくか・・・」

アルはそう呟くと、村の道具屋まで行き・・・

とりあえず、アップル、オレンジグミ・・・などのサバイバル用品

?を購入し森へと向かった。

場所は変わり・・・

ここはエンゲーブより北部に位置する森。

【チーグルの森】

まあ第一声は・・・

「すっごいデカイ森だな・・・ これじゃあ探すのかなり骨が折れ
そうだ・・・」

森の大きさに驚きながら・・・

時折襲ってくる魔物を退けながら、奥の方を探索した。

探索していると・・・

声が聞えてきた。

女の人と男の人の声・・・

3人の声だ。中には聞き覚えのある声・・・と言っかイオンの声だった！

アルは声ができるほうへと向かった。

イオン side

イオンは魔物を退ける事に成功したが・・・

足元がふらついていた為、ティアがイオンを支えた。

「大丈夫です・・・ 少し ダアト式譜術を使いすぎただけで・・・
あなた方は 確か昨日エンゲーブにいらした？」

イオンは少し立ち眩みをしながら、話した。

「オレはルークだ」

「私は神託オラケルの盾騎士団 大詠師モース旗下 情報部 第一小隊所属・
・・・ ティア・グランツ響長であります イオン様。」

それぞれが挨拶をした。

中でもイオンはティアの事は知っていたらしい、

「ああ！あなたがヴァンの妹ですね！噂には聞いていました。お会いするのは初めてですね。」

話していると突然ルークが騒ぎ出した、

「ハア！！！？お前が師匠せんせいの妹？？ それに神託オラクルの盾の人間？？
じゃああなんで師匠せんせいの命を狙うんだよ！？」

ティアに掴みかかりながら問い詰めていた、

「命を……？？」

穏やかな話ではない。

イオンは 心配そうにティアの方を見た。

その視線を感じたティアは、

「いえ…… こちらの話しで……」

話しくそうに口を閉じた。

だが ルークはまだ納得できず暫く騒いでいた。

そのためか……

背後から近付く魔物に気がつかなかった。

ガアアアアアアツ!!!

「しまった!!」

ティアが真っ先に気付いたが、それでも遅すぎた。

もう魔物はイオンの側まで来ていた。

イオンは突然の事に、目を瞑ってしまった。

「イオン様!!」

その時、

ガキイイイイイン!!

イオンの周辺に障壁のようなものが現れ、彼を守った。

s i d e o u t

「危ない……間一髪……だ。良かった……」

イオンを守ったもの・・・

それはアルが放った防護障壁だった。

そばまで行ってみると、またまた彼らは騒いでいた。

村で見たときと同様に・・・

その後ろで、ウルフが近付いているのが見えた。

3人は気付いてない様子だった。

撃退するには距離がまだかなりあったので、防護の力の譜術を使用したのだ。

まだ、状況が分かってなかったイオンの側まできて、

「だいじょうぶ？」

肩に手を置きながら言う。

イオンは驚いていたが、それがアルと分かると表情を和らげ、

「アル！ありがとうございます。」

礼を言った。

「言いたい事はあるけど・・・とりあえずは、こいつらを片付けてからだ。」

魔物に向きなおす。

「君達も・・・戦力として考えていいのか？」

側にいた2人に言った。

「・・・ええ！ もちろん！」

「ツたりめーだ！こいつらよくもビビらせやがって！..！」

「よし、OK！」

ルークが前衛、ティアが後衛、そしてアルは前衛後衛どこでもいける、

アルが使用するのは、己の拳、

そこに譜術によって、威力を高めたり 属性を付与したりする・・・

ルークが剣、そしてティアがナイフ、術様の杖、

陣形としては理想的だ。

3人で、魔物の群れを撃退する事に成功した。

アル side

……うん。

何人がいてくれるととても戦闘が楽になるな……

詠唱に専念できるし…… 隙を突いて接近戦もしやすくなる

この女の人は治癒の力も使えるみたいだし……

男の人の方は荒削りな感じはするけど、剣術の心得は持っているみたいだし……

こんな整ったパーティーは初めてだなあ……

そう考えていた。

side out

#16 チーゲルの森（後書き）

ありがとうございました！

#17 チーゲルの森・遭遇（前書き）

よろしくーです！

#17 チーグルの森・遭遇

戦闘も終わり・・・

ウルフ達を一掃し イオンのそばまで来た。

「イオン！危ないじゃないか・・・ 行くならせめて、オレに声を掛けてくれればよかったのに。」

「すみません・・・ どうしても早く真実を知りたかったので・・・」

やれやれ・・・

やっぱり 思った通り・・・

イオンの性格ならそうなるは・・・

「おいおい、あんま ネチネチと苛めるなよ。 無事だったんだから許してやれよ。」

「ちょっと！ルーク！！無事だったのは彼が助けてくれたおかげでしょう！！！！」

ああ・・・横から見ると苛めているように感じたのか・・・

それにしてもこの2人はしょっちゅう言い争ってるような・・・

喧嘩するほど仲がいいってことかな？

「あはは・・・ 苛めてたわけじゃないんだけどな。まあいいさ、君の言うとおり無事だったんだし、」

とりあえず 表情を緩めた、

「そーいやあ イオンはこんなとこに何しに来たんだ？ 後お前も、」

暫く森を歩いて・・・

ルークが聞いた。

「あ・・・はい 実は盗難事件が気になって・・・ チーグルが人間の食べ物を盗むなんておかしいんです・・・それで、」

「やっぱり・・・予想的中。オレはイオンを追いかけてね。後オレの名前はアルっていうんだ。よろしく。」

一通り自己紹介とここに来た理由を説明した。

彼も自己紹介をしてくれた。

夫婦かな？つて聞いたらすッゴい勢いで拒否。

なんか・・・絡み具合が面白いな。

いつか夫婦になったりして・・・な・・・

で、話は変わり。

「フーン だったら目的は一緒ってワケか」

「えっ・・・ ではお2人も？」

イオンは少し驚きながら話した。

そして ルークは・・・

「しかたねーな おまえらもついてこいや。」

一緒に行く事を示唆した。

しかし・・・ティアは反対した。

「何を言うの！イオン様を危険なところへお連れするなんて！！
あなたもそう思うでしょう？」

そこでオレに振るか・・・

「えーっ？帰したってコイツまたのこのこと森に来るだろ　こんな青白い力オでぶっ倒れそんなヤツほっとくわけにもいかねーじゃんか」

（・・・口は悪いけど、彼・・・根は優しい感じがするな・・・）

オレはそう思いながら、

「そうだよな・・・　そもそも黙ってここに来るぐらいだから、このまま帰ってって言っても頑なに拒むと思う・・・　真相を明らかにしないとね・・・　何よりチーグルだし・・・　ティアさんが言うのも分かるけど、こう言う人なんだイオンって・・・　たった数日の付き合いだけど大体理解したよ。」

苦笑しながら話す。

「・・・　たった数日・・・？　え？貴方はフォンマスターガードイオン導師守護役じゃなかったのね・・・」

ティアは驚きながら話していた。

まあ・・・　昨日はイオンに付きっ切りだったからそうとられても仕方ないか。

「えっとそれは確か・・・　女の子の方ですね。オレは違いますよ。あー後・・・」

イオンのほうに向きなおした。

「ムリをしたらダメだ。イオンは体はよくないらしいじゃないか。

彼ら・・・協力してくれるみたいだし、ここは任せて・・・な。」
とりあえず、誤解を解き、イオンに伝えた。

そしていろいろ話しているとイオンが喜びながら。

「あ・・・ありがとうございます！ アル！ それにルーク殿は優しい方なんですわね！！」

満面の笑みでそう答えた。

「「は？」

・・・？

「え？なんでそこで？」が出るの？お礼を言われてるのにさ・・・？」

突っ込むと、

「だ　だ　誰が優しいだア！！　アホな事言っでないで大人しく着いてくりゃいいんだよ！！！！」

またまた騒ぎ出した・・・

これが所謂ツンデレだな。

その上ルークはイオンはムリすると言ったら、

更に感激されて　またまたテレ騒ぎしていた。

「面白い人なんだね・・・ ルークって・・・」

ティアに話しかける。

「彼・・・真正銘の箱入りだったらしくてね、こんな風に言われる事あまり無かったんじゃないかしら？」

「箱入り・・・？ 彼は貴族の人だったのか・・・」

ふーんとマジマジとルークを見た。

まだ、メチャクチャ照れていたなあ。 笑

「さ・・・ さあ・・・ 私は詳しくは知らないから・・・」

???

あからさまだな・・・ 態度が。

「話したくなければかまいませんよ。オレはマルクト軍じゃないので、報告したりーとかはしないので。」

何か事情がありそうなんだけど、追求はしない。

興味ないことは無いけどさ。

「ありがとう・・・」

ティアは礼をいい腑と前を見てみると・・・

「あー!!」

「ん??」

みゅっ!!

何かの影が見えた。

「チーグルです!!」

「何イ!？」

イオンが叫ぶと同時にルークも反応、

「逃げたあー!!」

まあ・・・そりゃ逃げるわな・・・

いきなりあんな大声を出す。

「えーい!!畜生!!とりあえず追っぞ!!」

だー!!

っと叫びながら ルークはチーグルの後を追いかけていった。

「ヴァンのこと・・・聞かないほうがいいですか？」

イオンが心配そうにティアを見ながら聞いた。

確か・・・命を狙ってるとか何とか・・・

ルークが騒いでいたので内容は大体把握している・・・

「すみません・・・私の故郷に関わる事です・・・ルークやアル・・・イオン様を巻き込みたくは・・・」

話を・・・聞いていた・・・深い事情があるのだろう・・・

だけど・・・

「ティアさん・・・事情については追求はしないけど・・・血縁者同士で争うなんて・・・悲しい事だと思っよ・・・オレ・・・記憶が無いけど・・・それ位は分かる・・・よ。」

少し表情を暗くし、ティアに言った。

「・・・ありがたく受け取っておくわ・・・だけど、これだけは・・・譲れない思いがあるから・・・それよりも貴方も記憶が無いの？」

ティアは自分の決意の強さをだしたが・・・最終的には一応受け取ってくれたようだ・・・それより・・・

・・・貴方も？

「ん・・・？ ひよっとして彼も？」

この場にいるメンバーで記憶が無いそぶりを見せている人はいない。記憶があることに明確なのは、イオンはもちろん、ティアも自身の故郷の事も言っていたしな、
なら、消去法で行くと・・・
ルークだけになる。

「ええ・・・そうらしいの・・・」

「へえ・・・記憶障害者同士、仲良くできたらいいけどなー」

と言ってアルは笑った。

ティア side

ティアは一瞬余計な事を聞いたと思いつたがこれまた笑いながら「気にしなくていい」と言われた。

イオン様いわく、彼はとても強い心を持つてるとのこと、

記憶が無いというハンデを背負いながらも前を向いて歩いていると・・・

そういう風に言うと 彼はあからさまに照れていた。

早くルークを追いかけよう！と話題をそらしながら・・・ 微笑

イオン様もとてもまっすぐな方だ。

思った事は直ぐ口にする。

もちろん相手を罵るような事ではなく、良い所しか言わない。

これは 良い事なのか・・・ 相手によると思うが悪いことではない・・・

ルークにとつたら おそらく初めて屋敷の外で褒めてくれた人だし。

でも・・・

同じ記憶が無いもの同士でも・・・

ルークは少しアルを見習って欲しい・・・

ティアはそう感じていた

side out

#17 チーゲルの森・遭遇（後書き）

ありがとうございました！！

#18 チーグルの森・接触と真相（前書き）

よろしくお願ひします!!

やっとこちら更新です

中々難しいですね・・・

何はともあれよろしくです!

#18 チーグルの森・接触と真相

チーグルを追いかけたどり着いたのは・・・

巨大な木がある少し開けた場所だった。

「こん中に入って行ったぞ？」

「チーグルは木の幹を住処としていますから。」

木を見ながらイオンは言う。

「というかそれ以前に、

「へえ・・・ よく見たらこの辺りにこの森では無い果物が落ちて
る・・・何か印？見たいなのもあるし、これで間違いないよな？」

「そう・・・ 食い散らかしてる感じ？」

「ちょこちょこ落ちてた。」

「ぱっと見、食い散らかしてるーっぽい感じだけど・・・何か違う・・・

「ひょっとして・・・ 食べるのが目的じゃなかったりしたりするかの・・・」

アルは呟く・・・

「ええ・・・ そうですねアル。 とりあえずチーグルに聞いてみましょう。」

チーグルに聞く？

魔物と？

さすがにそんなことが出来る事は知らなかった為。

若干ポカーンとしていた・・・ 苦笑

まあ入ってみれば分かるか・・・

そしてチーグルの住処と思われる木へ入っていった。

「おまえたち・・・ ユリア・ジュエの縁者か？」

声・・・ が聞えてきた。

そして大量のチーグルも一緒に・・・

「うわ・・・ めちゃくちゃいるな・・・ それに人の言葉を話せるん

だ……」

声に出してしまう……

「なんだア こいつら!? ウジャウジャ出てきやがって……魔物の癖に人間の言葉をしゃべってんぞ!? どうなってんだ?」

ルークも同様のようだった。

そこハイオンが、

「大丈夫ですよ アル、ルークあれはソーサラーリングの力でしよう。」

説明してくれた。

「へえ……あれがユリアとの契約で与えられたって言う……」

マジマジと見ていると……

リングを持っているもチーグルが話した。

「左様。このリングはユリア・ジュエとの契約によって与えられたものだ。」

肯定してくれた。

「僕はローレイ教団導師イオンと申します チーグル族の長とお見受けしますが?」

「いかにも・・・」

イオンが長と話していると・・・

「おい魔物！！お前らエンゲーブで食い物盗んだんだろ！」

ルークが割ってはいる。

すると突然の事にみんなが慌てだした・・・

「ルーク、まあ十中八九チーグルたちが犯人だとは思っけどさ、もうちょっと穏便にしようよ。みんな怯えてるよ？」

とりあえずアルがルークをなだめる。

なだめれないと思ったけどね。

「だー！こいつらのせいでオレが泥棒扱いされたんだぞ！！」

やっぱり・・・

「まーまー、とりあえず訳を聞こうよ。幸いな事に言葉は通じるんだしさ。」

「彼の言うとおりよ。ルーク。(…………カワイイノノ)」

ティアは賛同してくれた。

何やらチラチラとチーグルたちを見てたみたいだけど。

「？」

ティアはアルの視線に気付いたようだ

「！！なんでもないわ！！」

そう言っつてソツポ向いていた・・・苦笑

「チーグルは草食ですよ？ 何故人間の食べ物？ この森は緑が豊かなようですし・・・」

あーだこーだ言っつてる3人を置いて・・・

イオンが話を進めた。

チーグルの長はその言葉に言葉を詰まらせる・・・

「・・・我らの仲間が・・・北の地で火事を起こしてしまつた・・・その結果 北の1帯を住処としていた「ライガ」がこの森へ移動してきたのだ・・・我らをエサとするために！！」

長老の表情は苦痛でいっぱいだった・・・

「では 村の食料を奪つたのは仲間がライガに食べられない為・・・？」

「そうだ・・・定期的に食料を届けぬとヤツらは我らの仲間をさらって喰う・・・」

・・・言葉が見つからなかった。

「それは・・・酷いな・・・いくらなんでも」

アルは暫く言葉が出てこなかったが、出てきた言葉が「酷い」だ。

本来・・・

獣は生きる為に・・・そして家族の為に獲物を狩る。

それが自然な事だ。

だが・・・脅し・・・食料を届けさせる・・・

人であれば奴隷も同じ・・・

「そう・・・ですね・・・」

イオンも同様だった。

だけど、

「弱いもんが喰われるのは当たり前前だろ？ 大体自業自得じゃねーか。」

ルークが言っている事は確かに正しいが・・・

「オレは・・・そればかりは賛成できないなルーク。」

これまで、なだめたり・・・ てきとうに受け流したり・・・ していたアルだったが、

今回は真っ向から反対した。

「あん？なんでだよ！」

「生き物は生き残る為に獲物を狩るそれが自然。だが、ライガと言う魔物は定期的に食料を要求している。それも脅して・・・。そんな人間同士であらわせばそれは奴隷と同じだろう・・・？ オレはそんなのは納得できない。」

アルはキツパリとそう言い切った。

「アル・・・ はい。そうですね・・・ アルの言う事もよく分かります。それにこれが本来の食物連鎖ではありません。」

イオンはアルの意見に賛成のようだ。

ルークはやはり渋っていた。

そこへティアが・・・

「ルーク・・・ 犯人はチーグルと判明したけど この後どうするつもり？」

ルークに聞いた。

「そりゃ 村に突き出して・・・」

「そうしたら今度はエサを求めてライガが村を襲うでしょうね。」

そう・・・なるな。

「えええ！？ あんな村どうなるうと知ったこっちゃねーよ！」

それはいくらなんでもあんまりじゃないか・・・

そう思っただけで言おうとしたが、イオンに止められた。

「エンゲーブは食料の町。そしてその食料は世界中に出荷されています。それでは大変な規模の食糧問題となってしまう。」

イオンは・・・反論できない且つ・・・不快感をルークに与えないように言った。

(イオンありがとな。オレ強く言いそうだったよ。)

小声でイオンに礼を言う。

イオンは軽く頷き笑っていた。

「でもよー じゃあどうすんだ？」

ルークがそう言う。

「ライガと交渉しましょう。」

イオンが言った。

「ライガっていう魔物も話せるんだ……」

アルがそう呟くと。

「いいえ、僕らだけじゃ無理ですが チーグル族の誰かに訳してもらえば……」

「ああ、なるほど……」

納得した。

食料を要求している以上……

チーグルとライガはちゃんと言葉が通じてはいるようだ。

納得していると……

「では通訳の者にわしのソーサリーリングを貸し与えよう……」

長がそう言うと、1匹のチーグルを呼び出した。

ちよこんー!!

っと出てきた子どものチーグル。

「この子どもが北の地で火事を起こした同胞だ。これを連れて行ってくれ」

そう言つと長の持つていたリングを渡す・・・

すると・・・

「ボクはミュウですの よろしくお願いするですの!」

急に喋りだした!!

リングが合わないのか、動きずらそうにしている・・・

ぼてっ・・・」あう・・・」

転んだ。

「おい!!なんかむかつくぞ!!」イツ!」

「!」めんなさいですの!」めんなさいですの!」

何か分からんがルークがイラついている・・・

「まーまー・・・」

アルがいつもどおり なだめようとし・・・

イオンは微笑みながら見ていた。

んで、ティアは……

「かわいい……………」

またまた顔を赤面させていた。

何はともあれ新しい仲間？と共に

ライガがいると言う祠へと向かった。

#18 チーグルの森・接触と真相（後書き）

ライガのところは・・・ちょっと考えさせられた内容でしたね・・・

一番はミュウが森を焼いたのが原因なんですけどね 苦笑。

でも要求はちょっと・・・ 苦笑

#19 チーグルの森・2人の共通点（前書き）

よろしく願いします!!

こちらはかなり不定期です。

オマケにべつ小説でも書いてますが・・・

リアル（現実）がヤバ忙しいんです・・・

逃避したい・・・なあ・・・宝くじに願いを・・・

では！

#19 チーグルの森・2人の共通点

ライガと交渉する為に森の奥へと向かっていた。

「ルーク!!後ろ!!」

その場所が近付いたのか

複数のライガが姿を現した。

「うおおっ!!」

「みゅううう!!」

ミュウは大慌て!

おまけにルークも 苦笑

「落ち着いて対処なさい!」

ティアが激を飛ばし譜術にはいろつとするが・・・

ガアアアッ!!

複数のうちの二匹が襲い掛かる！

「くっ……素早いわね!!」

杖で何とか攻撃は防いでいた。

「任せて!! 我が元へと集え 邪の化身・ブラッディ・レイ
ド!!」

アルが放つ暗黒波動でライガ達の動きを封じた。

「うおおお!! 双牙斬!!」

ザシュ!!

その内の一匹をルークが、

「ノクターナルライト!!」

ザシュシュ!!

投げナイフでティアが攻撃し、

「よっしゃ! 来い! 光の眷属、ルナディ・ストリーク!!」

闇の波動を一気に反転さし光の攻撃で一掃する。

闇の攻撃で耐性が付く可能性があるため、こついった反転譜術はより効果的になるらしい。

つと、何かの教科書に書いてました！！ 苦笑

ライガ達をとりあえず戦闘不能に。

「ふう・・・助かったわ アル。」

「けっ！俺だけで十分だったの。」

「ちよつとルーク！！」

「まあまあ・・・」

勝利の掛け声？

相変わらずだったね・・・

「それにしても・・・貴方の使う譜術は見たこともないものね・・・記憶が無いとっていたけどいったいどうやって身につけたの？」

更に森の奥へ進んでいるとティアがその話題に触れてきた。

「ん・・・難しい質問だね。これは習ったりしたんじゃないんだ。」

「はあ？ 譜術ってのは指南を受けずに修めれるもんなのか？」

ルークも目を開かせて言う。

彼も師匠の元で剣術の指南を受け続けていたからこそ、今の剣術が使えるのだ。

それなのにアルの話からすると 明らかに違和感を感じたのだろう。

「ええつと…… ううーん……」

腕を組み考える……

「あ！言いたくなければ無理して言う必要ないわ。ごめんなさい。」

ティアがそう言う。

そんなつもりじゃなかったんだけどね……

イオンは何に悩んでいたのか分かっていたみたいだ。

「アル、彼らは信頼できると思いますし、貴方のの言う事も信じてくれると思いますよ。」

そう見つめながら諭してくれた。

そうなのだ。

頭の中で声が聞えて……それが力になって……

なーんて 夢物語を信じてくれる人なんてそうはいないだろう。

ジエイドのように、裏を調べ 確信がもてないのならまだしも・・・

「え？ それってどういっ・・・？」

ティアもキョトンとした表情でこちらを見ていた。

「僕も気になるのです！！ アルさんの譜術！とってもカッコいい
ですのー！！」

ミユウはピョンピョン飛び跳ねる！

そうやってると・・・

「うるせー ブタザル！！」

ドカン！

みゅー・・・！！

ほら・・・

「ま・・・まーまー！ルーク落ち着いて・・・ はあ・・・ そう
だね。信じてくれるかどうかはとりあえずわかんないからおいとい
て・・・あのね。」

.....

.....

.....

とりあえず 以前ジエイドとイオンに話したこと全てそのままルークとティアにも伝えた。

頭に響く「声」の事・・・

魔物との接触の刹那、それが再び聞こえ出して、力を貸してくれたという事・・・

まあ・・・期待はあまりしてなかったんだけど・・・

驚いたことにルークがこの話しに凄い勢いで聞いてきた。

「お前も！？幻聴が！？それに記憶喪失だって！！」

お前も・・・？

驚いたことに、ルークとは共通点が2つもあつたみたいだ。

特殊な事例なのにそれが2つも・・・

偶然・・・なのか？

「えっと・・・お前もつてことは・・・？」

そうルークに聞くと。

「ああ、俺もたまにな、七年前からだ俺のは、記憶を失ってからっ

てことか？ 夢ん中だったり突然頭の中だったり・・・」

やれやれといった感じで話していた。

「・・・・・・2人に共通点があり その共通点とは特殊なものです。ただの偶然とは・・・」

イオンも思っていないようだ。

「そうですね・・・私もそう思います。ルークはその事をお医者様には？」

ティアが聞くと。

「そんなもんあたりめーだろ？んで 全員原因不明！記憶が飛んだときのショックが原因とおもわれる！ばっかだしよ！ ちっとも治ってねーし。」

ルークは不満だらけ。

ブツブツ言いながら歩いてた、

「あははは・・・ だよな。 こればかりは中々簡単にはいかな
いと思うな、何せ、人体の中でも一番の難解な場所って言われてい
るところだし、」

脳という器官はまだまだ未知数のところが多い。

血中の音素フォニムがどのように作用しているか・・・等まだまだはっきり
と分かっていないようだ、

名高い教授・研究員が調べている段階らしい。

「ああ？そーなんだ。なんでそんなこと知ってただよ？お前は。」

「本の知識！」

サラッと言った。

「……ルークも少しは見習ったらいと思うわよ？ 彼の方はつい最近から記憶が無いのに知識で大分遅れているじゃない……」

ティアは、はあ……。つとため息をつきながら……。そう言った。

なんで火に油を注ぐような事を……

「うるせーな！！余計な世話だ！！」

「ま……。まあーまあー！」

こうなるんだから……

「ケンカしないで下さいですの！！」

もちろん、ミュウの仲介も火に油……

「だまつてろ！ブタザル！！」

ドガッ！！

「うみゆつううう・・・」

ほらさあ・・・

段々疲れてきた。

「アル？笑ってますよ？」

イオンが側まで来ていて、そう言った。

そうなんだよなあ・・・

「俺は・・・俺にとっては全てが新鮮な事なんだな。つかれたあつて思ったりしてるけど、こういう賑やかなのもいいかもしれないな。アクゼリユスも賑やかだったけどそれ以上だな。こりゃ。」

「あはははは！そうですね。」

暫くイオンと笑いながら、最初の話題を忘れ言い合いになっている2人と1匹を見ていた。

・・・言い合いというか、ルークが一方的に言い、それをティアがサラツとかわす、んでミュウがやってきて・・・ルークが苛めて、ティアが助けて・・・って感じだね。

「はい！賑やかですね。」

「だね！」

笑ってたんだけど・・・

ここに来た理由も頭に残しておいてよ？ 2人とも・・・ 苦笑

#19 チーゲルの森・2人の共通点(後書き)

ありがとうございました！

#20 チーゲルの森・vs ライガ・クイーン(前書き)

よろしくお願ひします!!

#20 チーゲルの森・vs ライガ・クイーン

その後、何度かライガたちに囲まれたり・・・

他のモンスターに襲われたりしてたけど、

何とか、ミュウの案内に従って、ライガ・クイーンが住処としている祠へと到着した。

「んで、この祠の一番奥にライガのボスがいるんだな？」

「はいですよ！ライガ・クイーンですよ！」

ルークが先頭で入っていく。

「ん？クイーン？」

ルークは分からなかったのか、アルのほうを見るけど・・・

「魔物に関する知識はさっぱり・・・」

お手上げ！っといわんばかりに手を上げる・・・すると。

「ライガはね、強大なメスを中心に郡をなす女王社会なのよ。」

ティアが説明をしてくれた。

「なるほど・・・ なら女王の側近にはかならず無数のライガがいそくだ・・・ 気を引き締めないと・・・」

ぐつと拳を握る。

ティアも無言で頷いた。

「へっ！何でもきやがれってんだ！」

ルークは相変わらずです。

ティアもため息を出していた。

「ミュウ、通訳よろしくお願いしますね？」

イオンが肩に乗っているミュウにそう言うと・・・

頼られるのが嬉しいのか満面の笑みで。

「はいですの！...この奥ですの！...」

と言った。ティアじゃないけどちょっとかわいっておもちゃったな（癒）

でも・・・

「えーとですの…… 卵が孵化するところだから来るなど言っているですの……」

「なるほど…… 母親なら当然の反応だな。」

「ってか ライガって卵生なのか？」

やり取りをしているとイオンが慌てて、

「まずいです…… 卵が孵れば生まれた仔たちは街を襲います!!」

「へ?」「!!」

アルとルークは驚いていた。

「ライガの仔どもは人を好むのよ!」

「何イ!？」

ガアアアアア!!!

ライガが再び雄たけびを上げた。

それを聞いた途端…… ミュウが怯えだし……

「そ…… その前に ボクたちを殺して仔どものエサにするって言うてるですの!!」

ガアアアアアア!!

「……………」

威圧感がビリビリと伝わってくる。

どうやら本当に自分たちを獲物と見定めたようだ。

「危険だわ……町の近くに住むライガは繁殖期前に狩りつくす決まりよ!」

「みゆううう……ボクがライガさんのおうちをかじにしちゃったからいけないです……」

ライガ・クイーンが雄たけびを上げる……

すると、何匹かライガたちも集まってきた。

「まずいな……仲間……というか兵隊を呼んだか。」

「ど……どーすんだよ!??」

「ミュウ彼らにこの土地から立ち去るように言ってくれませんか?」

イオンがミュウにそう頼む。

「は……はいですの」

ミュウは怖気づきもしたが、勇気を出し、ライガの方へ歩み寄り交渉を始めたが……

グルアアアアア!!!!!!

「みゆ!!!!!!」

ライガの咆哮で

すっ飛ばされてしまった。

それをルークがキャッチする!

「みゆ みゆ~~~~~ ありがとうございますのおお」

涙をポロポロ流しながらお礼をいい。

やっぱりそう言うことになれていないルークはテレながら、

「カ……カンチガイすんなよ! たまたまだよ!!」

そう言った。 苦笑

ライガ・クイーンはゆらりと立ち上がり……身構える。

他のライガたちも同様だ。

「交渉は……」「決裂のようね。」

アルとティアは頷きあう。

「我が成すは、堅牢たる絶対領域…… 侵すことの出来ない聖域
よ来れ！」

「ミスティック・フィールド！」

パキイイイン……

少し後ろに、光の領域を作り出す。

「イオンとミュウはその中へ！ 絶対に出たらダメだぞ！」

「は……はい！」

そう言うと、ライガ達を見直す。

「ありがとう、アルこれならイオン様たちは大丈夫ね。」

「礼はまだ早いさ。俺がやられたらあの障壁も消えるんだし、まずはアレを何とかしよう。」

「お……おい ここで戦ったら卵が割れちまうんじゃない……」

ルークはまだ迷っていた。

「残酷なようだけど その方が好都合よ。」

「このまま ここで餌になるわけにはいかない 俺にはまだやらなきゃならない事があるから、」

「・・・!」

ガアアアア!!

「来るッ!!!」

「ちつくしょ!!!やってやらあ!!!」

ライガ・クイーンはその巨体から考えられないようなスピードで襲い掛かってきた!

#20 チーグルの森・vs ライガ・クイーン（後書き）

おまけ スキットコナ

？ミュウ大好き！と大嫌い！ そして仲裁・・・

「っってお前！さっきからピヨンピヨン みゅっみゅっ っぜーんだよー！」

「ごめんなさいですのー！ごめんなさいですのー！」

「ちょっと！ルーク ミュウがかわいそうじゃない！」

「ま・・・まーまー！2人とも！ ルークもミュウをいじめないの・・・」

「だー！こいつがウザいんだって！」

「（こんなにかわいいのに・・・／＼／＼）」

「ティアさん？」

「！・・・ なんでもないわー！」

「みゅっっっ・・・」

「（泣いている姿もかわいい・・・）」

「（あれで誤魔化してるつもりなのかなあ・・・？）」

? 2人の違い・・・

「アルの譜術・・・やっぱり見事ですね。」

「わたしもそう思うわ。」

「ボクもですよ!!!」

「いやいや・・・そこまで面向かって言われると・・・かなり照れるんだけど・・・/ / /」

「けっ・・・いきなもんだな!」

「ルークの剣術も凄いと思うよ? ねえ イオン。」

「はい! ルーク殿には助けられています!」

「ボクも助けられて感激したですよ!!!」

「まっ 最初はどうなるかと思ってたけどね、」

「うっ・・・うるせーな!! どーでもいいじゃんかよ!!! そんなの!!!!!」

「(2人共通点はあるのに ココまで違う反応だと面白いわね)」

「ははは・・・」

「「?」」

以上

もっと面白いスキットできないかな・・・

小説の流れに沿って出来たらいいですね・・・ 何かアドバイスあればよろしくお願いします!! 苦笑
では!

#21 チーゲルの森・決着（前書き）

けっこうライガ・クイーンは強かった思い出がありますね
ジェイドの乱入で一気に逆転しましたが・・・
当時はバランスブレーカーだ！！って思っちゃいました！苦笑
では！

#21 チーグルの森・決着

「深遠へといざなう旋律・・・」

「うおおおおー！！！！」

「ナイトメア！」「双牙斬！！！！」

ルークとティアが譜術と剣術を同時に入れるが・・・

「！！ ルーク はなれる！！」

アルが叫ぶ。

すると砂埃からライガ・クイーンの巨大な腕が出てき、ルークを弾き飛ばした。

ドガアアアアア！

「ルーク!!」

ティアはルークに駆け寄る。

「ティアさんはルークを頼む! . . . 熱く滾りし獄炎 . . . 聖なる龍の姿となりて . . . 我が敵をを喰らい尽くせ」

アルの周囲が赤く染まっていき . . .

「ドラゴ・フレイム!!」

その次の瞬間、サラマンダー炎龍が飛び出しライガ・クイーンを襲つ。

!!ガアアアアア!!

ライガ・クイーンはそれに気付き、炎龍をはらおうとするが、そう簡単には消えない。

が . . .

ガアアアアア!

クイーンが雄たけびを上げたその時、

無数のライガたちが一斉にアルに飛び掛ってきた。

「しまっ!!--」

ドガアアア!!

「がはっ!!--」

連撃を受けアルもまた吹き飛ぶ。

「アル!!--」

ティアも駆け寄って、治療術を使用した。

「あッ ありがとう・・・ くそ・・・ あの炎龍は俺に攻撃したら消えるってわかったのか? かなり賢いんだな・・・ アイツは。」
傷を拭きながらライガ達をにらみつけた。

「かなりの強さよ・・・! 援護は任せて、近接戦闘は頼んだわ
ルーク! アルは周りのライガをお願い!」

「お・・・おう!!--」

「わかった。あいつらがいたら クイーンに集中できないからな、
兵隊は任せてくれ、直ぐにそっちに行くから。」

そう言い合つと、

ルーク達は一気に飛び出す。

「さあ、お前らの相手は俺だけだ、さっきは不意打ちだったが今回はそうは行かないぞ！」

無数のライガ達はアルのみを標的としていた。

恐らくは女王の指示だろう、それだけ先ほどの譜術を脅威と思ったようだ。

「……好都合ッ」

仲間達はこれでクイーンのみ集中できる。

そして それぞれの第2ラウンドが始まった。

ルークは苦戦をしながら、あることを思い出していた。

屋敷にいたときのことだ。

《相手がどんな奴でも やられる前にやっちまえばいいじゃんか》

今は……かなり押されている……

《では 私にも？それが通用するといふのか？》

師匠の言葉が頭をよぎる・・・

(今の俺じゃかなわない・・・ 師匠せんせい・・・！)

その時、

「やれやれ、見ていられませんね・・・ 助けてあげましょう。」

声が聞えてきた。

「「！！？」」

「あっ！」

アルも粗方ライガ達を倒した為、ルーク達の助太刀に行こうとした直前だった為 直ぐに確認する事が出来た。

「ロックブレイク！！」

そう声の主が叫ぶと、ライガ・クイーンの足元が一気に変化！

石の槍となり、襲い掛かった。

「ジエイド！」

アルが駆け寄る。

「今は話しは後にしましょう。あの時と似たような状況でしょう?」

ジエイドがそう言うと、アルも頷いた。

「だね。・・・けりをつけよう。」

ジエイドが詠唱に入る。

「「天光を満ところに我はあり・・・黄泉の門・・・開くと」
るに汝あり・・・いでよ!神の雷!!」

アルもジエイドと同時に詠唱に入っていた。

(ふっ やはりこれも使えますか・・・)

ジエイドは横目でアルを見るとうつつすらと笑っていた。

「ティアさん!ルーク!そこをはなれる!!」

そう叫ぶと、ティアはルークを掴み離れるように促して、その場を離れた。

「よし!」「ええ!」

アルとジエイドが頷きあう。

「これで終わりです!」「最後!」

「「インディグネーション!!」」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン　バリバリバリバリバリ

特大の雷が2本合わさり更に強大となりライガ・クイーンに降り注いだ！

グ・・・グオ・・・オオ・・・

ズズン・・・

ライガ・クイーンはゆっくりと倒れ、動かなくなった。

・・・
・・・

ルークはそのままその場に座り込んだ。

割れた卵やライガたちの骸を見ながら・・・

「なんか・・・後味悪いな。」

そう呟いた。

それを横で聞いていたティアは、

「・・・優しいのね、それとも甘いのかしら」

切なそうな寂しそうな・・・そんな表情だった。

だが今のルークにとっては・・・

「・・・冷血女・・・！」

そう思うしかなかったのだ。

「ルーク・・・仕方ないさ。やらなきゃこっちがやられていたんだ。割り切れないのは良く分かる・・・」

アルもそばに来てそう言う。

「ふん・・・」

ルークはただ黙っていた。

「ジェイド・・・すみません勝手なことをしてしまいました。」

3人からちよつとはなれた場所ではイオンがジェイドに謝罪をしていた。

「貴方らしくもありませんね、イオン様」

「チーグルは始祖ユリアとともにローレイ教団の礎です。彼らの

不悉はボクが責任を負わないと・・・」

・・・イオンはそう言った。

ジェイドはイオンの状態に直ぐ気がついていて、

「・・・そのために能力を使いましたね？医者から止められていたでしょう？しかも民間人を巻き込んで・・・」

「すみません・・・」

イオンは再び謝罪をする。

すると、戻ってきたルークが、

「おいオッサン 謝ってんだろそいつ、ネチネチ言ってるねえで許してやれよ。」

そう言っただけで離れていった・・・

「おやおや、意外ですね 街で貴方を見てましたが・・・ こういう性格だったのですかね？てつきり愚痴ると思っていたのですが。」

「ルークはイオンの事が好きなんじゃないかな？」

側に来たあるがそう言う。

「え？」

イオンはきょとんとしていた。

「俺もそうだったけど、何にもわからない状態で・・・自分すら何者か分からないような状態で・・・そんな時、自分に構ってくれたり、頼りにされたりしていると・・・自分の存在を肯定してくれえているかのような感じがするんだ。そう言う風に接していただける？イオンはルークに。」

そう言うと、イオンは笑っていた。

「彼は優しい性格なんですよ。それを表に出すやり方がわからないだけで。」

「ふふふ。」

アルも笑っていた。

「いやはや、こうやって聞いているとアル、貴方が記憶喪失だなんて信じられませんよ。嘘なんじゃないですか？」

苦笑しながらそう言うのはジェイド。

「・・・そうだったらいんだけどね。」

苦笑でアルも返す。

この表情を見ただけでアルは真実を言っていると容易に信じられる事が出来る。

目が凄く澄んでいるのだ・・・

嘘をつくような目には見えない、

イオンはそう感じていた。

「ってなわけでき、イオン！ルークのどこにいつてあげてくれないかな？結構ショックがあると思うんだ。」

「そうですね。分かりました、」

イオンはルークの方へ行くと、先ほど庇ってくれた事のお礼ともう少し付き合っただけいいことを伝えた。

ルークはやはり少しショックだったのか元気が無い返事を返した。

そして一行はチーグルの長老へ報告をするために住処へと戻っていた。

#21 チーゲルの森・決着（後書き）

ありがとうございました！

#22 タルタロスへ強制連行（前書き）

よろしく願いします！

ですよね〜

いきなりこんな超強力キャラが仲間になんかなるわけ無いですよね・

・・苦笑

では！！

#22 タルタロスへ強制連行

【チーグルの住処】

「話しはミュウから聞いた ずいぶん危険な目に遭われたようだな・
・ 2000年をへて・ ・ なお約束を果たしてくれた事 感
謝している。」

長老は一族を代表して頭を下げる。

「いいえ・ ・ ・ !チーグルに助力する事はユリアの遺言ですから。」
イオンは笑顔だった。

「しかし・ ・ ・ もとはミュウがライガの住処を燃やしてしまったこ
とが原因・ ・ ・ ミュウには償いをしてもらわねばならん!」

「みゆう・ ・ ・ .」

ミュウはしょぼん・ ・ ・ っとしていた。

しかし次の長老の言葉で!

「したがって ミュウの処遇はルーク殿にお任せする!」

一気に元気になる!

ルークは。

「はあ!?!」

何言ってるんのお前? 的な表情で長老を見ていた。

「聞けばミュウはルーク殿に命を救われたとか・・・季節が一巡りするまでの間ミュウはルーク殿にお仕えする」

そう言い終わるとミュウがルークに飛びついた。

「みゅみゅみゅー」みゅのみゅーみゅー

「だー! 頭に乗るな! オ・・・オレはペットなんかいらねーっての・・・!」

楽しそうに騒いでいる。

「連れて行ってあげれば?」

「そうだよルーク。チーグルって聖獣って言われているから、家の人もびつくりするんじゃないかな?」

「その通りですね。きっとご自宅では可愛がられますよ!」

みんなは賛成派のようだ。

ミュウは目を輝かせながらルークを見つめていた。

「う……うーん　なら　ガイたちへの土産ってことにでもすっか
ア……」

結局折れたのはルーク。

こうしてミュウはルークのペットとなりました

「報告はすんだようですね。行きますか」

そこへやってきたのはジェイド、

皆ジェイドのほうへついていった。

ルークは不満そうだったけど……　苦笑

暫く　歩いて、森の入り口に差し掛かった時。

「イオン様！！アル……！！大佐……！！」

声が森の入り口の方から聞えてきた。

「お？あの子お前の護衛役じゃないか？」

「はい　アニスです。」

「あ、ほんとだ。　護衛役なのに離れちゃまずいって思うのは俺だ
けかな？」

そう苦笑すると・・・

「イオン様は気がついたらどっかいったらいいですよー！ー！ー！」

反論！！

って・・・

「聞えてたの・・・？」

「もつちろーん！！もう！！アルってば！！私そんなに無能じゃないわよ！」

ご立腹のようだ。

だけど・・・

「改めて・・・お帰りなさい？」

すーぐに元に戻る。

相変わらずだなあ・・・ 苦笑

おまけに地獄耳・・・

「ご苦労様でした アニス タルタロスは？」

「ちゃんと森の前に来てますよう！大佐が大急ぎでって言うから特急で頑張っちゃいましたあ！」

そう言つと一気に軍隊がやってきて、ルークとティアを包囲していた。

「え？何だこれ！！どーなんてんだよ??」

「さ・・・さあ・・・俺は聞かされてなかったからなんとも・・・
つてか俺もかな？」

ルークは騒ぎ出し、流石にアルも予想外だったのかちよつと動揺していた。

「いえ セブンスフォニム アル貴方は関係ありませんよ。彼らは・・・正体不明の第七音素を放出していた疑いがあるのです。・・・よつてあなた方を拘束します。」

そう言つと軍隊のメンバーが取り押さえに入った。

「ジェイド!? 2人に乱暴な事は・・・」

「そ、そーだよ！ルーク達はイオンを助けてくれた人たちだ。そんな・・・」

「2人とも落ち着いて・・・何も殺そうというわけじゃありませんよ。・・・2人が抵抗しなければ出すけどね。」

そう言つと・・・

軍隊のメンバーに。

「連行せよ！」

一言命令。

そのまま戦艦タルタロスへ強制連行となった。

【タルタロス内部】

「2日前に起きた第七音素セブンスフォニムの超振動はキムラスカ王国王と方面から発生 マルクト帝国領土タル溪谷付近にて収束・・・ 長振動を起こしたのが貴方達ならば、不正に国境を越え マルクト帝国領内に侵入したことになりますね・・・」

ジエイドによる尋問が始まっていた。

ティアは元々身分はイオンが分かっていた為すんなり素性は分かっていたが・・・

問題はルークだった。

「ティアが神託オラクルの盾騎士団の人間だということはわかりました ではルーク。 貴方のフルネームは？」

少し間を空けて・・・ルークは話した。

「ルーク・フォン・ファブレ お前らが誘拐に失敗したルーク様だよ」

！！

「ファブレってたしか……」

これは……覚えてる…… 世界情勢でかかれてた……な……

「ふっ 貴方の勉強熱心振りには本当に驚かされますね。そう キムラスカ王室と姻戚関係にあるファブレ公爵のご子息ってことですね。」

そう言うとアルは納得し、アニスは目を輝かせた！

「公爵！？ステキ？」

「ルーク……」

イオンとアルは心配そうな表情で見ていた。

「……敵国の王室関係と神託オラクルの盾騎士団の人間が共謀しての不正入国…… いよいよただの物見遊山とは思えませんね……それに誘拐とは？穏やかではありませんが……」

ジェイドは問い詰めるようにそう言うと、ティアが。

「ジェイド大佐！今回の件は偶然発生した超振動で私たち2人が飛ばされてきてしまっただけです！ファブレ公爵家のマルクトへの敵対行動ではありません もちろん神託オラクルの盾騎士団も無関係です！」

ティアが訴えた。

(・・・あの冷静なティアさんがこんなに・・・ひょっとして超振動ってやつのかきつけを彼女が・・・?)

アルは考え込んでいた。

「ジェイド・・・ティアのいうとおりでしょう、彼らにそのような類の敵意は感じられません。」

イオンが助長する。

「賛成、そもそも敵国に単身(2人)乗り込んでくるなんて・・・ちよつと考えにくいし、隠密行動の目的なら、エンゲープで泥棒するの・・・ちよつと異常だと・・・メチャクチャ目だつてたし・・・」

アルもイオンに賛成。

「だー！アレは俺じゃねーっのー!!」

「はぁ・・・店先の食べ物勝手に食べたでしょ?」

ティアが暴れるルークを落ち着かせ・・・っというか一言くぎさした。

このやり取りを見ていたジェイドは・・・

ため息を零し・・・

「・・・まあ そうでしようね。とくに子息の方は温室育ちで世界情勢には疎いようですし?」

「悪かったな！大きなお世話だ！！」

・・・ジエイドも火に油を注ぐのが好きなようだね・・・

アニスはまだアニスでまだ悶えてるし・・・ 苦笑

すると今度はイオンが・・・

「ここはむしろルークたちに協力をお願いしませんか？皆さんご存知のように昨今・・・局地的な小競り合いが頻発しています。ホド戦争が休戦してからまだたったの15年 このままでは再び本格的な全面戦争へと発展するのも時間の問題です。そこでマルクと王国ピオニー九世閣下は和平条約を提案した親書を送る事にしました。僕はローレイ教団最高指導者という中立の立場から協力を要請されました。我々は今和平の支社として戦争を止めるためにキムラスカ王国へ向かっています。」

「戦争を・・・止める・・・ てかそんなにヤバかったのか？キムラスカとマルクトって・・・」

ルークも啞然としていた。

世界情勢を全く知らないのであれば仕方無いことだろう。

「とはいえ・・・我々は敵国の使者です。すんなり国境を越えられるとは思えません」

イオンがそう言うのと、変わってジエイドが繋げた。

「・・・そこで1つお願いがあります。ルーク、貴方の力・・・いえその地位は今の我々にとって非常に好都合その権力をお貸しいただきたい」

いや・・・その頼み方はちょっと・・・

アルは若干引いていた。

(高圧的だね・・・敵国だから仕方ないといったら仕方ないんだけど・・・ルークにそんなのいつたら・・・)

「・・・おいおいおっさん その言い方はねーだろ！大体人にモノを頼む時は頭下げんのが礼儀じゃねーの？」

ルークは立ち上がり言い放つ、思ったとおりに・・・

「ルークよしなさい！あなただって戦争が起こるのはいやでしょう！」

ティアが宥めようとするが・・・止まらない。

(このままじゃ・・・アクセリユスが・・・)

「ルーク。」

アルが話しだした。

「んだよ！」

「俺からも・・・頼んじゃダメ・・・かな？このマルクトには・・・

俺の命の恩人が・・・ 恩人の町があるんだ・・・そこは今大変な事態に落ちている・・・君の助けが必要なんだ・・・」

顔を俯かせながら・・・続ける・・・

「助けてくれ・・・お願いします・・・」

そう言つて頭を下げた。

「・・・ッ」

ルークも突然の事に困惑しているようだ。

「アル・・・」

イオンもアルを見つめていた。

ジェイドはまたため息を出し。

「アルに先を越されましたね・・・」

ジェイドも跪いた。

「どうかお力をお貸しください・・・ ルーク様」

回りも流石にジェイドの行動には驚いたようだ。

アルの時以上にざわついていた。

「・・・わかつたよ。国王に取りなおせばいいんだろ？」

ルークは頭を掻きながらそう言う。

ジエイドはそれを確認するとスクツッと立ち上がり。

「助かります！そうと決まれば急ぎましよう！」

「・・・いい性格してんなアンタ・・・」

ルークは不満顔だった。

「ルーク。ありがとう」

そこへアルがやってきた。

「べっ・・・別になんでもねーよ！んなこと！！」

あからさまに照れてはいた 苦笑

(アルにも色々あったのね・・・)

ティアはその2人を眺めながらそう思っていた。

「さあ ぐずぐずはしてられませんよ。大詠師派の邪魔が入りかねません。」

ジエイドがそう言うのと、

「大詠師派って？」

ルークが首をかしげた。

そしてアルのほうを見るが・・・

「ごめん・・・ちよつとまだ勉強不足だったみたいで・・・」

つと頭を掻きながら苦笑していた。

「ボクから説明します。お恥ずかしい話ですが ローレイ教団では派閥抗争が起きているんです。ボク 導師イオンを中心とする改革的な導師派 そして大詠師派モースを中心とする保守的な大詠師派・・・ ボクはマルクト軍の力を借りてモースの軟禁から逃げ出してきました。モースは戦争が起こるのを望んでいるんです!! ヴァンがボクを探しているというのも恐らくはモースの指示・・・」

「何かの間違いです! 導師イオン!!」

ティアが血相を変え、叫んだ。

「モース様は予言の成就だけを祈っておられます。戦争を望んでいるはずが!!」

(なるほど・・・ 大体分かってきたけど・・・)

「ティアさんはそのモースって人派なんだね。」

そこまでかばつということとはそれほど信頼しているということだろう。

そう言つとアニスが。

「えー ショックですう〜・・・」

じとーつとティアを見ていた。苦笑

「い いえっ 私は中立よ！^{スコア}予言は大切だけどイオン様の意向も・・・」

「おーい、さつぱり話が見えねーんだけどー」

ルークだけ取り残されたって感じた。

「えつとね 簡単に言つと・・・ イオンともう1人のお偉いさんがいて・・・ どっちが上かで揉めてる。つというか ケンカしてて・・・ そしてティアさんはもう1人の方を信頼している・・・ って感じかな？」

簡潔すぎるだろ！つてつっこまれても気にしない！

「お！なるほど・・・」

うん 納得してくれたみたいだし良かった。

「だっ・・・ だから違つたのよ！私は中立つて・・・」

ティアが慌てながらそう言つたいたその時！

《びーびーびーびー！！！！》

突然ブザーが鳴り出した。

#22 タルタロスへ強制連行（後書き）

ありがとうございました！

アルさん・・・勉強熱心ってレベルじゃないですね・・・
ちなみに作者ことじーくは社会と言う科目・・・だーいつきらいな
んで・・・
覚えられません！

テスト前に丸暗記して終わったら頭から抜けます！・・・はあ・・・

アルさんの頭脳が欲しいよー 苦笑

#23 強襲・神託の盾騎士団（前書き）

よろしくお願ひします!!

黒くてでっかい人が出てきます!

あいつのせいでジェイドのレベルがぐって思ってたりました!
苦笑

では!

#23 強襲・神託の盾騎士団

とてつもなく大きな音だ！

意味が判って無くても嫌な予感しかしない！

「^{ブリッジ}艦橋どうしたー！！」

伝声管を使いジェイドが連絡を取る。

《師団長！！敵襲です！ 前方上空にグリフィンの大集団です！！
総数は・・・総数は不明！！ 全体連絡！！総員！第一戦闘配備に
つけ！繰り返す！！総員！第一戦闘配備につけ！！》

グ オ オ オ オ オ オ オ オ !!!!!!

上空全てを覆い尽くすかのような数の魔物が押し寄せてきた！

《グリフィンから 多数のライガが降下！！応戦間に合いません！
！ 船体に張り付き攻撃を・・・ ?ドガアアアン? ぐわあッ
!!!》

その連絡が艦橋ブリッジとの最後の通話だった……

戦艦が一気に揺れる！

「きゃー！ー！ルーク様 アニスこわーい？」

揺れを利用したハグ！！

「うわわ！？」

ルークは揺れに戸惑っていてそれどころではなかった。苦笑

「魔物たちが連携行動を……！？どういうこと！？」

「艦橋ブリッジ！応答せよ！艦橋ブリッジ！！」

ジエイドが連絡を取ろうとするが返事が帰ってくる事は無かった。

暫く揺れと、怒号が続いていたが……

「と……止まった……！？ イオン様 大丈夫ですか？」

ティアが膝をついているイオンに手を差し伸べる。

「はい、ボクは大丈夫です。」

「何とか……とりあえずは止まったね…… まだ安心は出来ないけど……」

そう言つと・・・

「じょー 冗談じゃねえ！こんなアブネー陸艦ふね俺は降りる！！」

ルークは直ぐに立ち上がると、ドアに向かって駆け出した！

「ルーク！！外には敵がいるかもしれない！今は・・・」

つて言い終える前にルークは飛び出してしまった。

その時！！

「そのとおりだ！」

ドガアッ！！

通路で待ち伏せしていたのか・・・大男がいた。

強大な鎌のような武器がルークの首近くまで振り下ろされ壁に突き刺さる。

「迂闊に動くなよ この坊主の首が飛ぶぞ？ さあ 大人しく導師イオンを渡してもらおうか」

男の名は・・・

オラクル
神託の盾騎士団 六神将 黒獅子ラルゴ

通路で全員集まったが、ルークを人質に取られている以上 迂闊には動けないようだった。

「戦乱のたび骸を漁るお前の噂・・・ 世界にあまねく轟いているようだな 死霊使いジェイド。」

「 貴方ほどではありませんよ。神託の盾騎士団 六神将 黒獅子ラルゴ ……あなた1人で私を倒せるとでも？」

一触即発の状態だ・・・

と言つかルークを忘れていた物言いだな、ジェイド・・・

（死霊使い？まさか・・・）

ティアは死霊使いの名に驚いているようだ。

でも・・・ それどころではない。

ルークを助ける事が先決だ。そしてイオンも・・・

アルはティアの後ろで・・・

（ティアさん・・・暫く動かないで・・・オレをそのまま隠してて！）

控えていた。

そして 術式を見えない死角の位置に刻む……

「!?(わかつたわ……)」

一瞬ティアは驚いていたが、振り向かず直ぐに理解してその場で身構えた。

これにより完全にラルゴからはアルが見えなくなる。

「ふん……確かに死霊使いネクロマンサー殿を相手にするのは聊か骨が折れそうだが、これを使えば別だ。ふん！」

「!?!」

そう言つと小さな箱のようなものを投げつけた。

その箱はジェイドの真上で分解すると……

バリバリバリ!!!

まるで雷のようなものがジェイドに降り注いだ!

「アインザフォンスロゼット封印術!!!」

ティアが叫ぶ！

「し！しまった！！」

ジェイドはその場に疼くってしまった。

「これは本来導師の譜術を封じる予定の物だったがまあいい！……これで貴様は譜術が使えぬ！！」

そう言い！一気にジェイドに攻め寄った！

「くっ！！」

ジェイドは槍を出し撃退の体制をとる。

「アニス！！イオン様を！！」

アニスは返事をする前にイオンを引連れて走り出す！

「させぬ！！！」

ラルゴは鎌を構えなおした！

「ジェイド！！そいつから離れる！！！」

「！？？」

「何！」

「！！！」

後ろからアルの声が聞えた為、ジエイドは接近し攻撃せず ルークを連れはなれた。

「・・・足元注意だ！！ 唸れ！吼えろ！沈黙を破りし 神成る雷！
シャイニング・レイ！！」

カツ！！

急にラルゴの足元が光りだす！

「バカな！いつの間に！」

その次の瞬間！足元から頭上まで雷撃が迸る！

バリバリバリ！！！！ズガガガガ！！！！

「がはああッ！！！！おっ おのれええ！！！！」

！！

「つつ・・・！普通アレを直撃したら気絶するんだけどな！！」

ラルゴは気絶するどころか立っていた。

「いえ！でもチャンスです！！！」

ドスンッ！！

ジェイドの槍がラルゴの体を貫いた・・・

「！！！！刺ッ」

その場面^{シーン}を目の前で見ってしまったルークは一瞬気を失うような感覚に襲われてしまっていた・・・

ジェイドは体を抑えながら、槍を消した。

「大佐！おケガは？」

ティアも駆けつける。

「大丈夫です。助かりましたよアル。」

そう言うと槍を何処かへとしまい、こちらを向いた。

「どういたしました・・・とりあえず 何とかなったね。」

アルはそのままジェイドのほうに手を上げた。

「このまま艦橋^{ブリッジ}を奪還しましょう。イオン様はアニスが無事合流先へ逃がしてくれたはずです。」

「大丈夫なの？さっきのアンチ・・・何とかってやつは？」

アルがそう言う・・・

「大丈夫・・・つと言えればいいんですが、封印術を完全に解くには数ヶ月かかってしまいます。ですがティアの譜歌　ルークの剣術、そしてアルの譜術があればタルタロスの奪還は十分可能です。・・・協力していただけますか？」

「俺は勿論。早く親書を渡して欲しいし、イオンやアニスも心配だからね。」

「私もです。行きましょう　ルーク」

「・・・あ　ああ・・・」

ルークはとりあえずは返事をしていたが・・・頭の中は先ほどの突き刺す場面から離れなかった。

（人を・・・刺した・・・）

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

#23 強襲・神託の盾騎士団（後書き）

ありがとうございました！

#24 六神将・鮮血のアッシュ（前書き）

そっくりさんが出てきます！ルーク達は見れてないけど、ジエイド達はばっちり見れてるからこれがファースト・コンタクトですね

よろしくお願いします！！

#24 六神将・鮮血のアッシュ

「ティアの譜歌で艦橋付近にいた兵士は全て眠りにつき、無力化していった為比較的簡単に目的地へと到着していた。」

「ティアさんすごいですの！！キレイですの！」

「そうだね。・・・綺麗な歌声だね。」

アルは目を瞑り歌を聞き入っていた。

思ったことをそのまま伝えただけなのにティアは焦っていた。というか照れて？

「もう！2人とも何を言ってるの・・・」

「いや・・・戦闘中も聞いていたけどやっぱり綺麗な声だっと思ったから。」

「みゆうみゆう」

ミュウも同様だった。

ルークにうるせえ！って言われてたけど・・・苦笑

とりあえずティアは必死に照れ隠してました

「さて、^{ブリッジ}艦橋を取り戻します。ティアは私を手伝ってください。アルは後衛を・・・出入り口の確保をお願いします。」

そう言つと、ティアと共に中へ。

つて・・・

「俺は？」

ルーク忘れてるよ？

「ルークはアルと一緒にそこで見張りをお願いします！」

そう言い今度こそ中へ。

「んだよ・・・俺の剣術は見張りくらいにしか役にたたねーってことか？ 頼るよ な事言つといて」

ルークは不満だった用だ。

「まーまー 出入り口を確保するのも重要なことだしさ！」

いつもどおりアルがフォローを！

こんな感じですね。変わってないな・・・

「そーいや・・・お前・・・俺と同じで記憶喪失なのに・・・あーいうこと見て・・・なんとも思わないの・・・か？」

最後の方の声が小さくなつていく・・・

(そうか・・・そうだよな、ルークは公爵の息子って言うてたし・・・俺はアクゼリユスの件があつたから・・・)

「さっきの事・・・だね。」

ルークは返事をせずただ顔を背けた。

「俺は・・・俺の恩人の住んでいる町がモンスターに襲われた時にちよつとあつてな・・・幸い死者は出てなかつたけど・・・重傷者は何人も出てたから、それであまり動じなくなつたのかもしれないかな？・・・でも俺も人が人を刺すところなんて見たのは初めてだよ。ルーク。」

「ならなんで 平気な顔してんだよ！アルといいティアといい！！」
ルークは続けた。

「人を・・・刺したんだぞ・・・ 魔物じゃない・・・ 人なんだ・・・」

「・・・ 彼らだつて・・・好きで人を殺しているわけじゃないと思う・・・ そうしないと これからもつと人の命が失われるんだから・・・ 俺は目の前で見た。ただ・・・ 鉱山で仕事をしてい

るだけの人たちを・・・蹂躪するかのよう襲う魔物たちを・・・アレだつて、人と魔物の戦争みたいなものだ。・・・戦争が起これば 人が人を殺す、もつと悪化すれば・・・ 戦士じゃない平和に暮らしていた街が戦場になるかもしれない・・・んだ。」

そう・・・それは国境付近の町 アクゼリユスでも起こりえる・・・寧ろ国境だからこそ その可能性は大だろう。

「俺は・・・そんなのは嫌なんだ・・・」

アルは俯いていた。

「・・・」

ルークもただ黙つてあるの話を聞いていた。

そんな時・・・

「う・・・うう・・・」

声が聞えてきた。

消え入りそうな・・・呻き声が聞えてきた・・・

「!!向こうだ!」

アルがいち早く気付き、駆け出す。

「おい待てよ!!」

ルークも同様に走りだした。

少しはなれたところに……1人の兵士が倒れていた、

兵装から見ると……この軍の兵士だろう。

全身に満遍なく裂傷、貫通…… 見ているだけで激痛が走りそうな状態だった。

「ツツ!! だっ 大丈夫か!？」

僅かだが……息はある。

「しっかりしろ! ファースト・エイド。」

治癒の譜術を使用した。

この人の傷ははっきり言って重症を通り越して致命傷に近い……
より高度な治癒術を掛ける為の詠唱時間ですら惜しいほどに……

ルークはそんなアルを見ていて、

「お前……そんなことも出来るのか。」

と驚いていた。

「ああ、攻撃の譜術よりは苦手なんだけど、無いよりはマシだしね。そうだ！ルークは入り口のところへ戻っててくれ。」

「んあ？」

「この人・・・傷が酷い。ティアさんが戻ってきたら呼んでほしいんだ彼女の力もいるから！」

そう言うと再び怪我人の治療に当たった。

「お・・・おお！分かった。」

そう言うとルークは元の持ち場へと戻っていった。

「しつかりしろ・・・死ぬんじゃないぞ！」

僅かだが・・・息をしている・・・

そして・・・

「ぐっ・・・があ・・・」

意識が戻ってきた。

「!!! 大丈夫ですか!？」

「うぐ……す すまない……」

痛々しい姿だったが、アルは意識が戻ったことに喜びをあらわにしていた。

「もうちよつとだ！がんばって！うおおお！！」っ！！！！」

突然の怒号に驚いて振り返ると、ルークが戦っていた！

「そんな……譜歌で眠っていたはずなのに！！」

拳に力が入る……

（まだ予断を許されない状態だ、このままこの人を見殺しに何てできるわけが……）

「おぬしは……アル……だな？ 俺に構うな……少年のところへ……行け！」

そんな時兵士から置いていけといわれた。

「馬鹿をいうな！ こんな状態なんだぞ？ たったアレだけの譜術で快復なんてしない！ 死んでしまっぞ！」

そう言うとその兵士は腕を掴んだ。

「あの……少年は…… 任務を遂行する上での……最も重要な人物だ！！ 失うわけには……いかない！！ 俺は兵士だ…… 任務の遂行が第一…… そして覚悟なら既に出来ている！ 行ってくれ！頼む！」

掴まれている腕から痛いほど感じてくる。

不甲斐無い自分に構わず行ってくれと。

そしてそれを無視すればそれこそこの兵士の覚悟に対する侮辱なのだろうと……

ならば……取れる行動は1つしかなかった……

「……ッ！ 直ぐに戻る！！頼むから持ちこたえてくれ！！」

「……ああ、行ってくれ。」

仮面をかぶっていて分からなかったが、表情は笑っているように見えた。

そしてアルはルークの元へと急いだ。

「死ねエエエエエエエエ！！！！」

神託オラクルの盾兵がルークを切り裂こうとした！

「あ……死……あ！！く……くるなア！！！！」

ルークは無我夢中で剣を突き出す！

そして……

ドスン……

「が……はあ……」

腹部に突き刺さり……壊れた人形のように倒れ……動かなくな
った。

「ひっ……う……うわあああああ！」

倒れ逝く兵士を見てルークは狂いそうになる……

「さ 刺した……人を……俺が……俺が 殺し……」

その時！

ヒュッ！！

衝撃波のよなものがルークを襲う……

ドガアアア！！

「ぐあっ！！！」

「ご主人様！！！」

そして、その先を見ると・・・男が立っていた。剣を突き出して・・・

「人を殺すことが怖いなら剣なんて棄てちまいな！！この出来損ないが！！！」

そう吐き捨てた！

「ルーク！！！」

そこにアルも駆けつける！

「ああ！！誰だ！？テメエは！！！」

その男は明らかに不快感をあらわにした。

「それはこっちのセリフだ！」

ルークの前まで行き、庇うように身構える。

その時！

「ルーク！アル！！」「どうしました！！！」

2人が戻ってきた。

しかし、その声に一瞬だが気を緩めてしまい・・・

「隙ありだ！！！」

ドガア！！！！

「くっ！！」

「うわあ！！」

ルークとティアが攻撃を受けてしまった。

アルは何とか攻撃をかわしていた。

「クソ！ 来い！連激の焰！ フレア・ボム！！」

拳大の大きさの炎を出し連続で放つ！

ドガアアア！！

「ちっ！やるな・・・ お前！」

その炎を剣で切り落としアルを見なおした。

「早い・・・」

アルの詠唱は攻撃力の高いものほど詠唱時間がかかる、その為現時点で使える術で最速の攻撃を使ったのだが、威力不足のせいか、相手の服を少し焦がした程度で終わってしまっていた。

その上・・・

「う・・・これは・・・」「アツシユ様・・・」

眠りについていた兵士達が次々と目を覚ましていった。

そしてルーク、ティアも戦闘不能の上、敵の方で倒れている・・・

「最悪な状況だ・・・」

「アツシユ　　六神将　鮮血のアツシユ!!」

ジェイドがそう叫ぶ。

(ジェイドが無事でよかったのだが・・・この状況を打破できるか・・・?あの男・・・かなりの使い手だ・・・??ただどあの顔・・・ルークと・・・)

「さすがは死霊使い殿ネクロマンサー・・・しぶとくていらっしやる・・・」

笑いながらジェイドの方を見ていた。

そこへ攻撃を入れようと集中していたその時、

「アツシユ!そのへんにしておけ!　閣下のご命令を忘れたか?」

もう1人・・・後ろから、いや頭上・・・上から現れた!

「リグレットか・・・?」

「く!!」

両腕に集中したその時!

ドオン!! ガキイン!!

「妙な真似はやめておけ小僧。」

銃弾が頬を掠めるようにして地面に激突した。

わざとそう狙ったのだろう、・・・かなりの腕のようだ・・・

「ちっ 捕らえてそいつらを閉じ込めておけ!」

ジャマされたのに腹が立ったのか アツシュはそのまま命令し、後ろを向いた。

「報告します! 導師イオンをタルタロス広報の森林地帯にて拘束しました!」

「アツシュ 私が行こう」

リグレットと呼ばれている女がそう言つと、

「ああ・・・任せる。」

アツシュはそれだけ言い、離れていった。

そしてルーク・ティア・ジェイド・アルの4名は・・・拘束された。

そう・・・4名だけだった・・・

あの兵士は・・・息を引き取っていたらしい・・・

連行される前に、あっちにいる兵士も頼むと頼み込んだのだが・・・

隠れられていても厄介だと判断した兵士が確認に行ったところ・・・

もう冷たくなっていたそうだ・・・

.....

.....

.....

#24 六神将・鮮血のアッシュ (後書き)

ありがとうございました・・・

助けられなかったみたいです・・・

どうしようもない襲撃だったから仕方ないかと・・・

原作では全滅っていつてましたし・・・

頑張れ！アルくん！

#25 作戦名 骸狩り(前書き)

よろしく願います！

こちら不定期ですが…ガンバリマス！

25 作戦名 骸狩り

【タルタロス・船室】

「……………」

牢屋で暫く表情をくらめていた。

「仕方ありませんよ。アルどうしようもないことはあります。」

ジェイドはそう言う。

「そうだとしても……なかなか割り切れないものですね……人の死は……」

「……………」しかし 私の部下を看取ってくれたことには礼を言います。彼は最後まで任務を全うしたんですね。ありがとございます。アル」

そう言っって頭を下げた。

「……………」いや、大した事は……………」

そう言ってもらえただけでも……少し心が軽くなっていた。

「そうだ……塞ぎ込んでられないよ。ティアさんとルークを手当てしないと……………」

そう言うと、牢屋で寝かされている2人の方へ行き、治療術を使う。

「……もうあなたが何をしても驚かないと決めていたのですが、少しまた驚きましたね、第七音素セランスフォニムまで使いこなしますか……」

関心を通り越してあきれているような……

「まあ……得体の知れない力だけど…… 便利だからね、皆を治したりできるし。」

ティアの治療をとりあえず終わらせる。

次はルークだ。

「それに……傷つける譜術だけじゃなく、誰かを救える力も持つてるってこと……それが何か嬉しくてね。 得体の知れないのが玉に瑕だけど……」

苦笑する。

「やれやれ……貴方のようなタイプの人には初めて会いましたよ。お人よしで……その上戦える力があり……」

しみじみ答える……

「……気のせいかな？何かかるーく馬鹿にされているような気がするんだけど？」

「はっはっはー！気のせいですよ。」

うん。笑って誤魔化したな・・・

「はぁ・・・俺もまあ貴方みたいなタイプの人に初めて会いましたよ・・・まあ数週間分の記憶しかないけど・・・」

互いに苦笑しあっていた。

そのうちに・・・

ティアが目を覚ました。

「ん・・・ここは・・・」

「おはよう。タルタロスの船室らしいよ。」

そう言うと慌てて起きる。

「私どれだけ気絶したのかしら？」

「ほんの数十分かな？ねえジエイド？」

「はい。それくらいですね。」

ティアは不甲斐無さを謝罪してたけど・・・

あれ不意打ちだし・・・

「あの六神将って連中は明らかに周りの兵士達とは核が違う雰囲気というかオーラというか・・・大変な相手だってことは一目で分

かったから仕方が無いと思うよ?」

「そうですね。少なくとも六神将3人確認できましたし、あの程度で済んで良かったと考えるのもいいと思いますよ。」

ジェイドもそう言う。

「……でも これからは気をつけるわ。」

律儀な性格だね…… 苦笑

「そういえば…… 雰囲気です勝手に言っちゃったけど、六神将って何なのかな?」

ティアはちよつとガクツとしていた。

ジェイドはそんなティアを見て笑っている。

「そういえば…… 貴方は記憶喪失だったわね…… 全然そんな心配させないから忘れかけていたわ。」

そして苦笑する。

「たははは……」

ルークに手を当てながら苦笑する。

その間、一通りの説明を聞きました!

結構……つと言うよりかなりまずい相手みたいだね……

あの程度で本当に良かったよ。

はい・・・ ティアが目を覚めてからずっとルークの治癒に当たってるけど・・・

目を中々覚まさないんだよね・・・

傷は癒えているはずなんだけど・・・

「貴方も第七音素セブンスフォニムを使用できるのね・・・ あの戦闘といい やっぱり凄いわ。」

ルークを治療しているのに気付いたティアは改めてそう感じていたようだ。

「あ・・・あのー さっきもジェイドに言われたんだけど・・・ あんまり面面向かってそう言うこと言わないで欲しいかな・・・？ 照れるから・・・」

そう言って笑っていた。

「ふふふ・・・」

ティアは笑っていた。

ルークの夢 side

《……ルーク……ルーク……》

声が聞える……

(……ああ……いつもの夢 俺……どうしたんだっけ……
？ 何か凄く怖い思いをしたんだ…… 目覚めたくない……)

再び声が響いてくる……

《我が声に答えよ！ルーク！》

(嫌だ……このまま……)

side out

「ルーク!!」

ティアが心配そうにルークの顔を覗き込む。

ルークが目を……覚ました。

「良かったよ、うなされてたし、治癒かけても効果なさそうだったから。」

そこへアルの顔も割り込む。

「ココ……は?」

「タルタロスの船室ですよ……と言っより牢屋……ですね。」

我々は神託オリクルの盾騎士団の大詠師派に捕まっ たんですよ。」

ルークは・・・暫く考え込んでいた・・・

一通りジエイドが説明したところで本題へと入った。

「さて、ルークも目覚めたところですし、そろそろこんなところは脱出してイオン様を助けに行きますか」

さおうジエイドは告げた。

脱出方法があるのなら最初から言って欲しかったけどね・・・

派手に暴れてもいいと思うけど、この戦艦頑丈そうだし、何より一発で包囲されそうだから・・・

「この牢屋どうやって開けるんですか？それにイオン様の居場所も・・・」

ティアモアルと同じ感じだった。

「このタルタロスは私の戦艦ふいねですよ？ご心配なく。」

「というか・・・もうちょっと早くに言って欲しかったけどね・・・」

やれやれ・・・と 苦笑する。

「はっはっはー！まだ全員目覚めていなかったですからねえ。」

そう言っただけで笑っていた。まあいつもの通りに・・・苦笑

「先ほど彼らの会話を漏れ聞きましたがいオン様はタルタロスへ連れ戻されるようです。」

「そっか・・・いちいち歩いていくよりはこっちの方が遥かに効率がいいから・・・」

「ええ、そう言うことでしょう。ですからその時にイオン様を救出しましょう。」

ジェイドがそう言った途端！

考え込んでいたルークが急に叫んだ。

「ま・・・までよ！！」

「どうしたの？ルーク？」

「そんなことしたらまた戦いになるぞ！？」

ルークが考えていた事はそれだ・・・

「・・・？それが？」

ティアは普通に返す。

「また人を殺しちゃうかもしれないっつてんだよ！！」

そう・・・先ほどの戦いで奪ってしまった命の事・・・それが彼の

心に深く傷ついたようだ。

「・・・それも仕方ないわ。殺らなきゃ殺られるんだもの。」

ティアは再び普通に返した。

「な・・・！？何言ってるんだよ！？人の命をなんだと思って・・・」

「

最後まで言う前に・・・

ティアとアルが近付いていた。ティアが言おう

「ルークの気持ちは俺は痛いほどわかる・・・つもりだ。ジエイドが刺した相手だって元は俺の譜術からなんだから・・・間接的にだけど。」

そう言う・・・ルークも少し黙った。

「前に言った事・・・覚えているかな？前って言ってもちよつと前だけど。俺は・・・戦争が起こるなんて嫌なんだ。街を・・・救えなくなる。でもそれは人殺しを助長しているわけじゃない・・・話し合いで決着がつくのならそれが一番だ・・・だけど、それぞれの信念を持って戦っている以上、それも無理なんだよな・・・だから今を精一杯戦う、って決めたんだよ、俺は。戦える力を持つてるのに使わないなんて意味ないから。」

そう言いが・・・やっぱりルークは納得してないようだ。

「お・・・お前は・・・直接殺してないから・・・そんな事が言え

るんだ！俺・・・俺は・・・」

やはり・・・殺してしまったことのショックは大きいようだ。

無理も無い事だろう・・・

アルも・・・どうなるか分からないと思っているから、

見かねたティアが一步前へ出た。

「ルーク！今私たちが何もしなければ戦争が始まる。そうしたら数え切れないくらいの人が死ぬ。それくらいは分かるでしょう？。そしてアルはそれが嫌だから・・・持てる力を使おうと前を向いている、そしてココは戦場。戦場に正義も悪も無い。生か死かそれだけよ。」

もう一步近付く。

「普通に暮らしていても魔物や盗賊に襲われることもある。だから力の無い人々は傭兵を雇ったり身を寄せ合って辻馬車で移動する。戦う力を持っているなら子どもだって戦う事がある・・・そうしないと生きられないから。」

ルークは・・・まだ納得できない。

「し 仕方ねえだろ！？俺はずっと屋敷の中にいてガキの頃の記憶もねえんだ！だからそんなこと知らない！俺は好きでここに来たわけじゃない！！」

ティアは一瞬悲しそうな顔をする。

「ティアさん・・・仕方ないよ、俺・・・多分だけど、ルークみたいにかつこういう感覚になるのが普通じゃないんじゃないかなって思うんだ。」

ルークに何か更に言おうとしたティアを止めるように言う。

「え？」

「人を・・・手にかける・・・戦争・・・戦い・・・軍人ならともかく、普通の人なら・・・そんなの恐れるし、したくない。頭では理解できるのに・・・割り切れている俺がおかしいんだよ。だからあまりルークをせめないでやってくれ。俺がその分戦うから。」

「・・・」

ルークもティアも黙り込んだ・・・

「ふむ・・・それがいいですね、ティアと私、そしてアル3人で行けるでしょう。」

ジェイドはそう言った。

「そう・・・ね。でもアルだけに負担をかけるわけにはいかないわ。こんなことになった責任は私にあるし、必ず家まで送り届ける・・・って決めているから。そのかわり足だけは引つ張らないで戦う気が無いのなら貴方は足手まといになるから。」

「・・・なた・・・戦わないとはいってない！人を傷つけたく

ないだけだ……」

そう言う……

「今は同じことよ 大人しく後ろに隠れていて」

「無理しちゃダメだ。」

とりあえず足手まといと言う発言は逆撫でするだけだと思っけど、間違いなくその方が安全だから。

「な……なるべく戦わないようにしようって言うてるだけだ！俺だって死にたくねえし……」

そう言う……ティアは顔を背け。

「……私だって 好きで戦ってるわけじゃない……」

歯軋りをしながら答える。

「……」

その姿にルークは何も言えずにいた。

「……で？結局戦うんですね？ルーク 戦力に数えますよ？」

「ルーク……」

「おう！お……俺も！戦う！」

ルークはもう覚悟を決めたようだ。

「結構。現在このタルタロスには140名ほどの兵が乗船していますが 助けは期待できないと考えてください 今の我々に出来る事は1つ イオン様を奪還しタルタロスから逃げる！」

そう言うと牢屋の入り口付近まで歩いていった。

「でもどうやって……?」

ルークはジェイドに聞く。

「非常事態は想定済みですよ」

そう言うと床の一部を蹴り上げ中から伝声管を取り出す。

「1つ言う時の為の伝声管です。」

そう言うと……ジェイドは伝声管に向かって!

「死ネクロマンサー使いの名によって命じる! 作戦名「骸狩り」 始動せよ!」

そう言うと……戦艦が震えるかのような感覚に見舞われた。

#25 作戦名 骸狩り(後書き)

ありがとうございました！

#26 ティアの負傷とルークを理解者(前書き)

よろしくお願ひします！

#26 ティアの負傷とルークの理解者

オラクル
神託の盾 side

突然全ての機能が停止し、扉も全て閉じその上灯りまで落ちた。

「いったい・・・何が起きているの？」

ライガに乗っている少女がそう聞くが・・・

兵士達も分からない、

「わっ わかりません！何故か全ての機能が 停止してしまいました。」

コンピュータを操作するが・・・

復帰のめどが全く立たない・・・

「・・・どうしよう・・・閉じ込められちゃった・・・」

俯き落ち込んでいた・・・

その時

グルルルル・・・

乗っているライガが、少女の方を見ながら唸る。

「・・・えっ？ 助けてくれるの？」

そう言うと、ライガがすつと立ち上がり・・・隔壁まで移動した。

side out

「一体何が??」

「タルタロスの非情停止機構を発動させました。左舷昇降機へ!! 非情停止するとあそこ以外は開かなくなります!!」

そう言うと、牢屋の扉を開け、飛び出した。

そして・・・

全ての扉をロックしたおかげもあってか、敵にも会わず・・・
外へ。

ここはタルタロスの外。

イオンを捕らえた神託オラクルの盾のメンバーが、タルタロスからの出迎えを待っていた。

「妙だな・・・静か過ぎる出迎えの兵もいないとは・・・タルタロス内部との連絡も途絶えたままか？」

そう部下の一人に聞く。

「はっ 申し訳ありませんリグレット様」

この女は・・・

六神将 魔弾のリグレット

「・・・・・・・・フッ」

リグレットは何かを感じ取ったのか薄く笑うと、

「いいだろう 非常昇降口を開け！」

そう言った、

そして昇降口を開けると・・・

「ふん！」

リグレットが銃を構えたその時！

ガキイイイン！

ジェイドの槍がリグレットの銃を弾き飛ばした。

「さすが ジェイド・カーティス 譜術は封じたと聞いていたが――
筋縄ではいかないようだ。」

「！ どうやらラルゴは生きていたようですね」

封じられた事を知っているのは……仲間たちともう一人……あの黒獅子ラルゴしかない。

そう結論するのは難しくなかった。

「なあ？ ティア・グランツ！」

そう告げると……ティアが驚いていた。

「あ……貴女はリ……リグレット教官??」

動揺しているのが良く分かる……

その背後から巨大な影が……

あれは・・・

「いけない！！ティアさん！そこから離れる！！」

そう言ったその瞬間、巨大な影から攻撃が飛ぶ。

ドガガガアアア！！

コイツは・・・

「ライガ！？」

何故ここに・・・っと思っていたら、ライガの背に乗っている人物がいたのに気がついた。

「やっと出られた・・・」

乗っていたのは・・・

「女の□？？」

そう・・・アニスと変わらないくらいの背格好の幼い少女だった。

「アリエッタ！」

「おっと・・・動くと危ないですよ？」

この少女は・・・

《六神将 妖獣のアリエッタ》

その少女は、

「この仔が隔壁を切り裂いてくれて何とかここまでこられたの・・・
イオン様・・・」

そう呟きながらじつとイオンを見つめていた。

「結構多いな・・・」

そう思いながらも・・・

「ここを突破しないと逃げられない！」

そう言い力を込めた。

倒した数は増えていつているのだが・・・

数が・・・多い。

アルはそれでも、気をぬかず・・・確実に倒していった。

「アイツ・・・只者じゃないな・・・」

リグレットはあの男を・・・見てそう呟いた。

「おや？彼に興味があるのですか？ 見かけによらず年下がタイプなんですね。」

ジェイドはいつもどおり軽口？ジョーク？つ的なことを言う。

・・・が まあさすがに六神将そう言ったことは全く通用しないよ
うだ。

「ふっ 何か秘密がありそうだ。」

ジェイドの言葉を一笑し、観察をしていた。

捕まっていると言うのに精神力が凄い・・・

そんな時・・・

「ルーク！！下がって！！あなたじゃ人は切れない！」

そんな声が聞えてきた。

「！！！！」

ルークが戦っているのが見える。

「危ない！今のルークじゃ！！！！」

ルークの方へいこうとするが・・・

「死ねエエ!!!」

兵が数人、取り囲むように切りかかってきた。

「クソ!こいつら!!!」

そう言うと、詠唱に入る!

「気をつける!こいつの譜術は強力だ!詠唱の隙を与えるな!!!」

そう叫ぶと!

「オラアアア!!!」

「死ねえええええ!!!」

間髪いれず、襲い掛かってくる。

「・・・詠唱を防ぐだけでオレを止めれると思ったたら大間違いだ!」

そう言うと、今度は指先で譜術の陣形を描く、

「何だ!!!これは!!!」

1人の兵が叫ぶ。

「熱いの一発いくぞ? 獄炎 イグニート・バースト!」

ボゴオオオオ!!!!!!

「ぐわあああ!!」「がはあああ!!」

炎の柱が何人かを上へと吹き飛ばす!

「!!!」

リグレットもさすがに驚いていた。

「また驚きましたね・興味が尽きない、速攻譜術・・・コレほどですか。」

ジエイドも笑っていた。

嬉しい誤算だったのだろう、譜術を使用する際は詠唱が必要、そしてそれは強力な術ほどに時間がかかるもの、その常識を覆す威力・

「形勢はこちらに有りですね。早いとこ降伏をしてください。」

そうリグレットに告げる。

「ふっ・・・確かにあの男は大したものだが・・・こちらの男はそうでもないぞ?」

そう言っ て見た先には

「ぐーがー!!」

明らかにいつもよりキレの悪い動きをしているルークがいた。

キレが悪い理由は明らかだ・・・

(殺す・・・？また人を・・・？)

そう・・・そのことが頭によぎる・・・

(嫌だ・・・嫌だ!!怖い・・・怖い!!)

そしてルークは致命的なミスをする!

目を・・・閉じてしまったのだ。

そのとき!!

ズバアアア!!

「!!!」

「・・・ばか・・・」

「ティアさん!!!!」

ティアが・・・ルークを庇い負傷してしまったのだ。

「ちっ!!」

ジエイドが槍を投げつけ敵を撃退したが・・・

その代償で強敵のリグレットを解放してしまったのだ。

その上、ライガ達も暴れている・・・

こちらは1名・・・戦闘不能・・・

「まずい!!!!」

急いで向かおうとしたが、敵が多い!

そして、リグレットが銃を構えなおしたその時!

ズバアア!!!

頭上から誰かが降りてきてイオンを取り囲んでいた兵士をなぎ倒した。

「ガイ様 華麗に参上！」

・・・???

誰???

って思うのは不思議じゃない。

突然現れた民間人って訳じゃなさそうだけど・・・

その男はそのままイオンを保護し、

「うちの坊ちゃん^{ルーク}を捜しにきてみりゃ なんの騒ぎだこりゃあ？
とりあえず・・・みんな返してもらっせ」

そう言つとウインクをする。

それに気付いたリグレットは振り返ると・・・

「形勢・・・再び逆転ですね？」

ジェイドが隙を見てアリエッタを捕らえていた。

「そう言うことだね。」

そして、アルも戻ってきた。

向かってきた神託^{オラクル}の盾の兵全てを倒し、戻ってきた。

「リグレット……ごめんなさい……」

アリエッタはそのまま……リグレットに謝っていた。

「……兵も 殺られたか……」

「ちょっと……人聞きの悪いことを……皆無事だよ。ちよいと眠ってもらって起きても数週間はあちこち痛くて動けないかもしれないけど。」

そう苦笑しながらアルは言った。

「まあ それはともかく 武器を棄ててタルタロスへ戻ってもらいましょうか」

そう言うと、リグレットは観念したのか

「……しかたない」

武器を棄て、そして残った部下はそれぞれ倒れている兵を連れて……タルタロスへ入っていった。

#26 ティアの負傷とルークを理解者（後書き）

ありがとうございました！

#27 合流地点へ(前書き)

よろしく願います!!

#27 合流地点へ

敵の全員をタルタロスへ。

それを確認し、昇降口を閉める。

「これで暫くは全ての昇降口が開きません」

ジェイドがそう言った。

「ってことは 暫くは安全ってことだね。」

「ええ」

そう言つと、ティアのほうへ向かう。

「ルーク！のいて！」

そう言つとティアに治療術を施す。

「大丈夫なのですか？ティアは！？」

イオンが心配そうに聞く。

「・・・大丈夫 腕をきられただけみたいだ。 気絶してるけど直ぐに治るよ！ イオンは？怪我無い？」

ティアを治療しながら、イオンの方を向いた。

「僕は・・・大丈夫ですが・・・」

イオンの表情が暗くなる・・・

「どうかしましたか？イオン様？」

ジェイドが聞くと・・・

「追っ手を振り切ろうと逃げ込んだ森でアニスとはぐれてしまったのです。 それで、アニスも親書も行方が・・・ 無事でいてくれると言いのですが・・・」

イオンは心配そうに言った。

「彼女も優れた人形士ハベッターです。信じましょう。そしてアニスとはもしもの時の合流地点を決めています。そこへ向かいながら体勢を整えなおしましょう。」

ジェイドがそう言うと・・・

「そちらさんの乗組員たちは？まだ船の中にいるんじゃないのか？」

助けに来てくれた男がそう言う。

「・・・いえ 生き残りは期待できないと考えるのが妥当でし

よう。1人でも証人を残してはローレイ教団とマルクト帝国の間で紛争になりますから・・・」

・・・

皆黙っていた。

「・・・行きましょう 僕たちがここで捕まってしまったらもっとたくさんの方が・・・戦争で亡くなるのですから・・・」

イオンがそう静かに口を開く…

皆それに納得しこの場を後にした・・・

タルタロスの昇降口を封鎖し、多少は時間が稼げているのだが、

早めに離れた方がいいのは間違いないため、一行は速度を上げ、移動をしていた。

そのせいか・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

イオンは息切れをし・・・そして膝をついていた。

「ある程度は離れましたし、とりあえず・・・野営地で一休みしましょう。これ以上イオン様に負担をかけるわけにはいきませんし、そしてティアの怪我也気になります。」

開けた場所で、一行は暫く休憩する事になっていた。

「ふう……とりあえず追手は無いみたいだね……」

後方を確認してもとりあえずは一安心。

「ふう… すみません……」

イオンがそう言う。

「あんまり無茶できないし。何より、ティアさんが怪我をしてるからね。イオンが謝ることは無いと思うよ。」

アルが側まで来て話す。

「あ……ありがとうございます。」

「さあ、ティアさんの治療を再開しようか……」

そして 今度はティアの側まで行き、治療術を再開した。

「へえ……あなたは第七音素譜術士セブンソンスフォーニマーだったのか。」

横で見ていた男がそう呟く。

「ははは…… そう みたいだね。ちょっと事情があるんだけど……」

苦笑しながら治療を続ける。

「へ？それってどういう？」

「まあ もう何回もいろんな人に話してるし、内緒って訳でもない、また 改めてちゃんと説明するさ。それより・・・君はいつたい何者なのかな？ 坊ちゃんって言うってたけど・・・ルークのことかな？」

そう言つと、

「そついや自己紹介がまだだったな、いましてもいいんだが・・・
詳しい事は彼女が目を覚ましてからにしよう。とりあえず 名前はガイだ。よろしくな。」

そつ言いこちらを向いた。

「よろしくお願いします。」

「ガイ・・・来てくれたんだ・・・」

ルークは少し表情を暗くしながらもガイの登場には喜んでいた。

（色々あったから・・・仕方ないといつたら仕方ないけど・・・とりあえず 知人が来てくれたことは好ましいな・・・）

「う・・・」

話をしているうちに・・・ティアが目を覚ました。

「ティアさん！良かったですの！！」

ミュウが飛びつく。

「ミュウ・・・私は・・・」

ティアはまだ少し朦朧としていたが次第に意識がハッキリしているようだ。

「いやあ よかったですね。 治療術が使用できるアルがいてくれて助かりましたよ。」

ジェイドがそう言う・・・

「なーんか 素直にそういわれると何か裏があるんじゃないかって思っちゃうんだけど?」

ジェイドをじーっと見る。

「おかしいですね? 思ったことをそのままいっただけなんです・・・?」

ジェイドはサラっとかわす。

「ありがとう・・・アル、もう大丈夫。自分で治療も出来るし、」
そう言うとティア自身も怪我した箇所を手を当て、治療術を使用する。

「あ・・・あの・・・」

ルークが・・・ティアに話しかけた。

「あ！あなたは大丈夫なの？」

ティアが逆にルークの身を案じるように聞く。

「えっ？」

ルークは予想外の事に少し戸惑っていた。

「私は・・・あなたが民間人だってことを知っていたのに理解できていなかったみたいだわ・・・ごめんなさい・・・」

逆に怪我をしたティアが謝っていた。

「・・・なんで怪我したお前が誤るんだよ!？」

ルークがそう言う。

「私は軍人だもの民間人を守るのは義務・・・その為に負傷したのならそれは私が非力だったってことだから。」

傷跡を抑えながら・・・そう言う。

するとジェイドは・・・

「いやー お2人とも仲が良くて羨ましいですねー」

笑いながら？そう言った。

「んな！俺たちは別に！」 「そんなんじやありません！」

.....

「ははは！息もピッタリだね。」

アルもつられて笑う。

「ちょっとアル！」

すると今度はミュウが、

「ティアさんもご主人様もお顔真っ赤ですよ！」

そう言うのもちろんルークが。

「うつせえー！！」

まあ ミュウが一気に落ち込んだのは言うまでも無いだろう・・・

苦笑

「ははは！とりあえず ウチの坊ちゃんも元気になって、良かったよ。んじやあ 改めて自己紹介だ。」

「あーもー！！ガイまで！！！」

ルークはまだご立腹・・・ いや照れ隠しだね・・・ 苦笑

「おいおいルーク・・・ 自己紹介するって言うのに取ってんじやねえって・・・」

ガイも苦笑していた。

#27 合流地点へ(後書き)

ありがとうございましたあ！

#28 合流地点はカイツール(前書き)

よろしくお願ひします！

「????あれ?」

「何?」

ティアとアルは首を傾げていた。

「ああ・・・ガイは女嫌いなんだよ。」

ルークが補足してくれた。

「あ・・・なるほど、っと言うかあれじゃ・・・女嫌いというより・・・」

「女性恐怖症ですね。」

ジエイドとアルがもうちょっと症状が重そうだからそう付け加えた。

「私のことは女だって思わなくていいわ。」

更に一步近付くとガイも一步下がる・・・苦笑

「いつ いや!君がどーとか って訳じゃなくて そのっ!!!」
やれやれ・・・

「っというか、ティアさん・・・女と思わなくていいって・・・
それは無理でしょ?」

「何故かしら?」

きよとんとしてティアはそう言った。

「何故ってそんなに美人なんだし、どうやって男って思うのさ？」
普通にさらっとそう返す。

「なっ 何を！！／／／／」

ティアは真っ赤になっていた。

「おやおや ナンパですか？アル、やりますねえ」

ジェイドはそう言ったが・・・

「????なんで? 思ったことそのまんま言っただけなんだけど・・・」

(おやおや こちらは素ですか・・・ これはまた貴重な性格をしていますねえ・・・)

ジェイドは何も言わずただ苦笑をしていた。

?珍しいね 何も言わないなんて 苦笑

.....

(ルーク アルってあんな感じなのか?)

(いやいや 初めてみた。でも お前もあんな感じなんだぞ？ガイ
女嫌いの癖に家のメイドたちの接し方とか・・・)

(ええ！マジで！！)

「そこ・・・何こそ話してるのさ・・・」

ふう・・・つと息を吐きながら言う。

「ふふふ・・・」

イオンはただ笑っていた。

どうやらアルは そう言うことにはちょっと疎いようだ・・・
褒められたりしたら照れるって感情はあるのにねえ・・・

ティアは暫く顔が赤い状態のままだった・・・ 苦笑

まだ若干ティアは赤いし・・・ 周りもざわついていただけ・・・
とりあえずジエイドは早く先に進めたかったのか サラッとスルー
してみたんだ。

「ティアも大丈夫のようですし 早く出発した方がいいでしょう。」

ジェイドがそう言つと・・・

「アニスから連絡があつたのですか？」

イオンがジェイドにそう聞く、心なしか・・・嬉しそうだった。

はぐれた事が心配だつたのだらう・・・

「ええ、伝言がありました。」

そう言つて一枚の紙をイオンに渡した。

イオンはそれを受け取ると内容を読む。

「親愛なるジェイド大佐へ スツゴク怖い思いをしましたけど、第2地点へ何とか辿り着けました！ 例の大事なものはちゃんと持ってます！褒めて褒めて〜？ アニスのだーい好きな・・・わぁー告白しちゃったよ〜？ ルーク様はご無事ですか？？スツゴク心配しています！早くルーク様に会いたいです〜？ ついでにイオン様のこともよろしくー アニスより！」

.....
.....
.....

「たははは.....」

ルークは引きつった笑顔だね〜

「おいおい ルークさんよー モテモテじゃねーか！」

ガイが笑いながらそう言う。

「うるさいな！」

苦笑しか出ないね……

「はははは……メインのイオンをついでって…… なんと
言おうかなあ……」

アルもまた……苦笑していた。

「まあー そこはアニスですし？」 「アニスですから！」

イオンとジェイドはなにやら納得してる……

「（アニスってのは一体どんなコ何だ……？ まあ とりあえず
……） んで、その第2地点って言うのはどこなんだ？」

ガイはアニスのことはひとまずおいといて…… 苦笑

先の話をした。

「それは国境線のあるカイツールの軍港のことですよ。」

ジェイドがそう地名だけ説明すると、ガイはもう場所が大体理解
きたようだ。

「つとすると・・・フーブラス川を渡った先だな・・・」

・・・あれ？ ガイってルークの使用人・・・つまりキムラスカ人じゃないの？

ちよつと疑問に思つてると・・・ ジェイドも同じ感じなのか、

「おや・・・ ガイはキムラスカ人のわりに・・・マルクトに土地勘があるようですね・・・」

ちよつと疑いのまなざしが入ってないかなあ？ジェイドさん？

苦笑

「ん・・・？ あ ああ卓上旅行が趣味なんだ、それに カイツー
ルまで行けばヴァン謡将に会えるぜ？ルーク！」

とりあえず・・・ガイはそう説明した。

まだジェイドの疑念は消えてはいないようだが・・・

でもルークは師匠と会えるのが嬉しいのか。

「せんせい師匠と！？」

これまでに無いほどの歓喜の声をあげていた。

「兄さんが・・・」

ティアは逆に不安そうに・・・呟いた。

「ティアさん……」

その様子に、アルも心配だったのかつい声が出てしまっていた。

「私なら大丈夫よ。それと……前から思ってたけど、私にさんは
いないわよ？アル、って言うより私だけさん付けのような気がする
けど？」

直ぐに表情を元に戻したティアがそう言った。

「あつ いや……ほら！なんとなく……かな？」

「そう、ならもうさんはいないから。歳は同じくらいでしょっ？」

さん付けされるの嫌なのかな？まあいつか……

「わかったよ！ティア……」

やっぱりちょっと照れくさい…… 女性を呼び捨てにするのはね
え……

「おやおや、ルークだけではなく、アルもですか？ティア？」

ジエイドが再びニヤニヤ……

「ちよつと大佐！！」

「?????」

ティアは再び慌て、アルは????を頭に浮かべていた。

「まあ……アルですから……大変ですよ？ティア」

「もう、そんなんじゃないですって!」

「なんだよそれ……ジエイド……」

アルは……ちょっと鈍感なんだね……褒められるとかは分かってても、他人の好意とかは……

でも ティアが好意を持っているかどうかはまだ微妙だと思っけど。

「ははは！楽しそうなところなんだけど、そろそろ本当に行こうぜ。カイツールに向かってさ。」

ガイがそう言うと、皆とりあえず収まった。

長かったなあ……

#28 合流地点はカイツール(後書き)

ありがとうございました!!

#29 フープラス川での攻防（前書き）

・ ゲームでは例のおじょうちゃんが襲ってきたような……たしか……

でも それはありません…… 苦笑

では よろしく願います！

#29 フーブラス川での攻防

【フーブラス川】

川を歩いていた・・・

わあく　水が冷たい！キレイな水だなあくってハイキングだーって
思ったときがあっただけど・・・

「・・・何？このモンスターの数・・・」

そうなのです。

周囲を囲むかのように巨大蛙やら亀やら・・・

早速バトル開始。

ギャオオ！！

亀？が襲い掛かる！

「真空破斬！」

ズバン！

ガイが素早い剣術でまとめてなぎ倒すと、

「 … エクレールラム！」

ティアが光の十字を書き光の壁で攻撃する！

「これは楽できそうだな。」

横で見ていると・・・

「おい！アル！後ろだ！！！」

ルークがそう叫ぶ。

でも・・・

「大丈夫！ グランド・ウォール！」

バキイイイ！！！！

後ろから襲い掛かる蛙？と自分の間に地面がせりあがる！

そして・・・

ギャッツツツ！！

正面衝突

「はい、前方不注意だね。」

頭からぶつかってきてのびてる魔物にそう言い棄てた。

「アイツすげえな・・・やっぱ。」

ルークがそう呟く。

アルの譜術は何度も見てきているが、まるで隙が無く一瞬で行うところが凄いのだ。

ジェイドにしるティアにしる、詠唱を行うときは僅かながら隙が出来ると言っのに・・・

「ルーク？考え込んでいる暇があるんですか？」

ジェイドが譜術で攻撃しながらルークにくぎを刺す。

「つつ！わーってるよー!!」

ズバン!!!

そしてルークも戦闘に集中しだした。

んで・・・派手にドンパチやってあらかた片付いた。

本当にモンスター多いなあ・・・

・・・
・・・
・・・

「そう言えば・・・アニスって子はここを1人で通ったんだろ？」

ガイが、剣を鞘に収めながらそう言う。

「ええ、合流地点にはここから先に行かなければ辿りつけませんし。」

「みたいだね。」

ジェイドとアルが答えた。

「大丈夫なのか？その子・・・」

ガイが心配そうにそう言った。

「大丈夫ですよ・・・ アニス ですし。」 「はい。 アニス

ですから。「」そうだね。　アニス　ならね。　付き合い短いけど分かる気がするよ。」

3人口を揃える。

はははは……

「アニスって一体何者なんだあ……」

ガイは顔を引きつらせながら……苦笑していた。

「ははは……　あってみれば分かるよ。多分ね……」

「多分かよ！」

最後にはみんな、笑っていた。

いやあ　モンスター多いけど、このメンバーなら大丈夫だよね

前衛にルーク・ガイ　後衛兼前衛どっちでものジェイド・アル　後衛にティア。

5人も戦闘要員がいれば本当に楽。

何より皆強いよ　よほどの敵が無い限り大丈夫だね。

ガアアアアア！！

今度は背後から複数のゾンビが襲ってくる…

「危ないなあ……ファイア・ボルト！」

炎と雷の融合した譜術を発動させる！

ゴアアアアア　バリバリッ！

ギャアアアアア！

魔物を一掃させた。

「ひゅう　サンキュ　アル！」

ガイが迎撃体制を取ったのだが杞憂だったと判断し、刀を鞘に収めた。

「いやいや。ガイにはさっき助けられたしね、お互い様さ。」

アルは笑っていた。

「凄いですの！！　火と…雷なんてミュウ初めてみたですの！！」

ミュウが飛んできた。

「あはは！」

とりあえず、ミュウを抱きとめた。

「ほんとね… そんな譜術まで使えるなんて」

ティアもやつてくる。

「いや… だから… 照れるからやめてって… / /」

そんなアルを見ていたガイが…

「なあ？ ルーク アルって突っ込まれるのは弱いんだな？」

「はあ、みてーだな。」

ルークもやれやれといった様子だった。

「そういえば アル。」

イオンが話しかけてきた。

「ん？ 何？ イオン。」

足を止めて振り返る。

「以前話してくれたた幻聴は、大丈夫なのですか？ 時折顔を歪まして
いるように見えましたので…」

心配してくれてるみたいだった…

何か嬉しいな…

「ありがとう。イオン 心配してくれて。」

イオンにお礼を…

そしたらイオンは笑っていた。

「僕はお役に立てませんし。」

「そんな事ないさ、君のおかげで故郷…アクゼリユスを救えるかもしれないんだから、恩人には違いないよ。後幻聴の事だけ… うん まだチヨコチヨコ聞えてくるよ。」

アルは表情を若干歪ませる。

「お前はどついう風に聞えてくるんだ？」

ルークが聞いてきた。

同じ症状が出ているのだから当然興味はあるのだろう。

「ん？ ああ… 大した事じゃないけどね。時折… 戦闘の経験に合わせて色々指南してくれてる… みたいなんだ。頭の中に知らない詠唱文とか図形とか出て、その意味とかね。直接的な言葉はないよ。」

「なんだそりゃ… いーなー それ。俺なんか頭痛がするだけで意味がまったくねーってのに」

ルークはそう言って再び歩き始めた。

「しかし… それは本当に何なのですかね？ そう言う幻聴…の類は聞いた事のある症状ですが…それが譜術を教えてくれるとなると…不思議を通り越して不自然ですね。」

ジェイドも近付き話してきた。

当然だろう…

そのような事例は他に聴いたことないのだから。

「…ははは オレが思ってる事そのまんまだよジェイド… オレだってこんな不自然で得体の知れない力を使うなんて嫌だって思ってたけど… まあ仕方ないじゃん。皆の力にだってなれるし、」
そう告げた。

「そうですか…」「ふふふ」

ジェイドとティアは笑っていた。

「?????」

で 笑われる意味が分からないアルは？を頭に浮かべていた。

(やれやれ、本当に同じ記憶喪失者なのにえらい違いようですね…)

(まったく…)

ティアとジェイドの密談である。 苦笑

（そう言ってやんなって2人とも、 ルークの場合の記憶喪失って言うのは全部忘れて生まれただけの赤ん坊みたいな状態だったんだぜ？）

ガイも苦笑しながら混ざっていた…

#29 フープラス川での攻防（後書き）

ありがとうございました！

#30 国境の砦カイツール(前書き)

よろしくおねがいますー!!

ここで、例のだんていなお兄さんにあいます
では!!

#30 国境の砦カイツール

【国境の砦 カイツール】

ここである少女と門番が・・・もめていた。

少女は…アニスだ。

「だーからー 証明書も旅券も無くしちゃったんですう お願いします！通してくださいー！！」

必死に頼み込むが… 無茶でしょ。

国境なんだから… 苦笑

答えは当然。

「残念ですが、お通しできません！」

と一蹴。

「ふみゆう…」

アニスは頭と肩を落とし…離れていった…

そして…本性をむき出しにしながら…

「月夜ばかりと思うなよ…」

つとダークな表情をしながら門番を睨み付けた！

「アニス！ルークに聞えちやいますよ？」

そんな時、直ぐ側で声が聞えてきた。

アニスが振り返ってみると…

イオンたちがカイツールに到着していたのだ。

「きゃうわー！？ アニスの王子様ああ？ ルーク様！ご無事で何よりでしたあ？」

コロツと表情を変えてルークに飛びついた！！

スツゴい変わり身の早さ… 苦笑

それを見ていたガイは…

「げげッ… 女ってこええ…」

「ね？無事だつて言った理由大体分かったでしょ？」

「あっ… ああ 納得だわこりゃ…」

アルとガイが苦笑しあっていた。

「アニス、親書は無事ですね？」

ジエイドは変わらず・・・親書について尋ねていた。

まあ付き合いの長さかな？ 苦笑

「あつ 大佐あ！もちろんです！ここに有ります！」

トクナガを指差して答えた。

「ありがとうアニス、大変だったでしょう？」

イオンがねぎらいの言葉をかける。

「だよね。アニスお疲れ様。オラクル神託の盾を振り切ってあの川も越えて

… 凄い事だと思うよ。正直さ。」

アルもイオンに続いた。

「そんなに褒めても何もでないよ、アル！私はルーク様のものだもーん？それに イオン様もご無事でよかったですう！」

たははは…

アルとイオンは互いに苦笑いする…

「ところで… どうやって検問所を越えますか？私もルークも旅券

がありません。」

ティアが心配そうに言うが・・・

「心配要らないみたいだ：お迎えが着たみたいだぜ？」

ガイが、検問所の方を向いて答えた。

皆そちらに注目した。

その先には1人の男が歩いてきていた。

真っ先に反応したのはルーク！

「ヴァンせんせい師匠！！」

アニスを押しのけ、駆け出す！

流石にアニスかわいそう：でもないか！ 苦笑

しかし、ルークの前に立ったのはティアだった。

武器を構え・・・

「ヴァン！！！」

「ちよつと！！！」

突然の事だったのでアルも驚いていた。

ヴァンはゆっくりと歩き、ティアの前まで行き、

「ティア：武器を収めなさい、お前は誤解をしているのだ。」

そう静かに言った。

「誤解・・・？」

ティアはまだ信じきれず、武器を構えたままだった。

「ティアさん。」

アルがティアの武器をそつと触った。

「前にも言ったと思うけど… やっぱり兄妹で争うなんて間違っているとと思うよ。」

「……………」

ティアは黙っていた。

そこへジェイドが、

「ここで騒ぎを起こされては困ります。」

ジェイドがそつ言つと…

門番がヒソヒソ話をしているのが目に入る…

ティアは武器を静かに下ろした。

そして一先ず話をしたいという事で、宿屋の部屋を借りそこで話をする事になった。

「モースが戦争を望んでいる以上…僕はそれを見逃す事が出来なくて…」

イオンが…ダアトから離れた理由を告げた。

「なるほど…それでイオン様はダアトの教会から姿を消されたのか…」

ヴァンは納得したみたいだ。

「すみません、ヴァン… 僕の独断で迷惑をかけてしまって…」

イオンは続けて謝罪をした。

最高指導者…導師であるイオンが突然姿を消してしまえばかなりの騒ぎになるだろうからだ、

だが理由が理由…アルは仕方ないと思っていた。

「いえ、私のことは構わぬのですが、六神将が動いているとなると…」

そう言ったその時

「兄さんが！彼らを差し向けたんじゃないの！！どうして平和を望むイオン様の邪魔をするの！！」

ティアが割って入った。

「おい！師匠せんせいに向かってお前！」

ルークもやはり黙っていなかった。

それほどヴァンを信頼していたのだろう…

だが、ヴァンはまずルークをなだめた。

「よいのだルーク、そう思われても仕方ない。六神将は私の部下だが、彼らは大詠師派でもある…恐らく大詠師モースの命令で動いているのだろう。」

そう言ったが、やはりティアはまだ納得がいかないようだ。

「そんなはずはないわ！モース様は本当に平和を望んでいる。だからこそ 私に搜索を… ツ！！」

最後まで言わずに黙った。

「お前こそモースって奴の回し者じゃないのか？」

「ルーク… ティアには何度も救ってもらってる。そんな事ないとオレは思うぞ？付き合いの方はルークの方が長いんだから。」

「うるせー！」

ルークは…彼の中ではヴァンが絶対なのだろう、そのヴァンに敵意を向けている以上こういうことになるのは必然だと感じた、

「お前が大詠師の命令で探しているもの…第七譜石か…」

！！！！

皆が驚いた表情をしていた。

「第七譜石って確か…」

アルも大体は知っていたのだけど…

「はあ…？なんだそれ？」

………

ルークは知らないみたいだね…

「ありや…」 「箱入りすぎるってのもなあ…」

反応はそれぞれ様々…

「んだよ！人を馬鹿にしたみたいに！！」

ルークはそう言った扱いがキライみたいだ……怒ってたね
苦笑

「あのね。ルーク、第七譜石って言うのは… えっと、そう！2000年前だったかな？ユリアが詠んだ予言スコアのことだよ。」

アルは笑ってない、

彼と同じ境遇なのだから、笑えるはずも無い。

唯 場所がよかったから… 知識を得ることが出来たのだ。その違いだけなのだろう。

「はぁ… 同じ記憶喪失者なのになんでここまで差があるのかしら？」

ティアの発言で更にルークが怒ったのも無理はないだろう。

まあ それはおいといて、ルークの為のプチ講習会を行った。

主に第七譜石とそれをめぐった戦争…等等。

一通り聞いたところで、

「ふーん、それをティアが探しているのか？」

ルークがそう聞いたが、

ティアは何も言わなかった。

「まあいい… ともかく私はモース様とは関係ない。」

ヴァンがそう言うと、ルークは喜び、

「そうだよな！師匠せんせいはオレを迎えに来てくれただけだ！」

そう言っつて笑顔になった。

「ふむ。　　そういえばそちらの方は？他のメンバーは顔見知りが多いのだが…君のことは知らないな。」

ヴァンがアルの方を見ていた。

「あつ…そういえば、そうですね。　オレ…私はアルと言います。　アクゼリウスで事情があり、ジェイド大佐達と同行をしています。　よろしく願います。　ヴァン 謡将。」

「ああ、よろしく頼む。　君にもルークが世話になったようだ、礼を言う。」

アルは背筋を伸ばし綺麗にお辞儀をする。

そして、ヴァンもルークに対しての礼を言った。

この時皆（ルークとヴァンを除く）はいっせいにこう思っていた…

> 同じ記憶喪失者なのにどうしてこうルークとは違うんだ…??<

………　　苦笑

「???.?」

「何か馬鹿にされてる様なきがすんだけど…?」

ルークは若干そう感じていたようだ

当たってるけどね・・・

#30 国境の砦カイツール（後書き）

ありがとうございました！

#31 襲撃・妖獣のアリエッタ(前書き)

よろしくお願ひします!!

3 1 襲撃・妖獣のアリエッタ

???? side

ここはとある建物の2階・・・

「ほお…それは大変興味深い・・・だが・・・あなたは何故それを知りたいのですか・・・？・・・アツシュ・・・」

イスに腰をかけためがねをかけている男がそう言う。

「お前には関係のないことだ・・・やるのか やらないのか・・・
どっちだ・・・」

言葉は少ない・・・ ただの2択だった。

男は即決する。

「いいでしょう。貸し1つと言う事で引き受けますよ。ただ・・・
私は肉体労働はしたくありません・・・」

YESと言う返事のみでよかったようだ。

アツシユはもう一人の方へと向かう。

若い少女だ・・・

少女は迷っていた。

「でも・・・命令違反は・・・」

そう・・・これは命令されていない・・・違反となる事だったのだ。

だが・・・アツシユは、

「おまえにとって・・・仇を打つ機会だろ？」

そう言うと・・・少女は静かに頷いた。

そして・・・それぞれ別れていった。

部屋の外では・・・

もう1人・・・男が・・・

何か言うわけでもなく、ただ壁にもたれかかり、去ってゆくアツシユを見ていた。

旅券もヴァンが用意してくれていたおかげで入手でき、

比較的簡単にカイツールの検問所を通過できた。(あたりまえか・
・) 苦笑

そして、道中……

「あつちが ご主人様の国ですの??」

ミュウがワクワクといった感じでルークに聞く。

ルークは……

「ふわー！やっと帰れるぜ……」

大きな欠伸を1つ。

帰れる事への喜びをあらわにしていた、

「ええつと…… 確かルークの家があるところってバチカルだったよね?」

アルがルークに聞く、

「ん?ああ そーだ。」

ルークがそう答える。

「……ん……ちょっと言いづらい……」

「……船に乗ったりしないといけないんじゃない……？位置的にさ、」

苦笑しながら言う……

「せつかく帰ってきたー！って喜んでるところに水を差すようだけど……」

後からわかるよりはいいかなって……

「ええええ！マジかー！！」

ルークは笑顔から一転しちゃった……

「ああ、あるの言う通りだぜ？ルーク、軍港から海を渡らないとバチカルにはつかないよ。」

ガイがフォローを、これで信憑性が湧く、

「……まだそんなにあるのかよ……」

さらにテンションダウン！！

「まーまー　ここまできたら帰って来たも同然だって、元気出して
」！

アルがルークを励ましていた。

「それにしても・・・ 本当にお前は記憶喪失なのか？ 地理も大体頭に入ってるみたいなんだけど？」

「ガイがまあ・・・何回も他のメンバーに聞かれている事を聞いてくる・・・」

慣れちゃったよ。

「まーね・・・ 嘘ついても仕方ないじゃん・・・ 地理はある程度はわかるよ。細かな事までは流石にわからないけどさ。」

もーカンベンだね・・・

「ガイは何やら邪険するアルにちょっと不思議がっていた・・・」

「そんなに難しい事聞いたのかな？つと・・・」

「ガイ・・・」

「ティアがガイに話しかける・・・」

「うおっつとー！！！！なっ・・・なんだ！！！」

「ガイはかなり動揺しながら、ティアのほうを向く。」

「君は間違いなく女性恐怖症だね・・・ 苦笑」

「はぁ・・・あのね？さっきの質問・・・アルは何回も受けるからちよつと歯切れが悪いだけなのよ。・・・大体わかるでしょ？」

ティアも苦笑しながらそう言う。

うん・・・大体でもわかってくれると助かるよ・・・

もうこりこりだけどね・・・

そして、一行はカイツールの軍港へ向かっていった。

【カイツール軍港】

ここまで来ると直ぐそこが海だ。

「ミュウ、海も船も初めてですよ！楽しみですの！！！うれしいですの！！！！」

ルークの横を飛びながらはしゃぐミュウ！

横から見てたらほのぼのとしていいな〜って思っただけどね・・・

ルークは邪険してる・・・

ティアはこそツツと呟いていた。

可愛い・・・っと・・・苦笑

そんな時・・・事態は急変する！

ドゴオオン！！

港で爆発音が起こると共に火の手が上がる・・・

「あれは！！」

ヴァンが叫ぶと、皆一斉に、走る。

「ただ事じゃない・・・」

燃え上がる 建物を見てそう呟く・・・

皆・・・臨戦態勢で、港へ入っていった。

そこは・・・

ボロボロだった・・・

倒れた兵士・乗組員達・・・そして、燃え上がる港と船・・・

「くっ・・・先回りされていましたか！」

ジエイドが惨状を見るとそう判断した。

こんな過激な事をするのは・・・やはり。

「あいつらか・・・！！」

アルは息がある、兵士を体をおこす。

「しっかりしろ！・・・ん」

パアアア・・・

治癒術を使う・・・

「おい！しっかりしろ！一体誰が・・・」

ガイも倒れている兵士をおこし何があったのかと問い詰めていた。

「ま・・・魔物が・・・襲ってきて・・・」

兵士がそう呟くと・・・

グリフィンが飛んでくる・・・

「あれは・・・タルタロスでいた・・・」

ルークが顔を確認した。

「！ 本当だ！ 確か・・・」

そう・・・確か・・・

「根暗ツタ！！何でこんなことをするの！！」

そうそれ！！流石アニスだゝ・・・・・・・・

いやいや 違う違う！そんな名前つける親なんていて欲しくないぞ！！

1人乗り突込みをしていると・・・

「アリエツタ 根暗じゃないモン！アニスのイジワル！！」

そうだった！アリエツタだ！

「思い出した・・・あの時はライガといた女のコだ。」

治癒術を掛け終えると・・・

「ここは危ない！ 直ぐにほかの人を連れて、被害のない建物へ非難してて！」

そう言うと。流石に全開とまでは行かないが、歩いたりするのは問題ないまで快復した兵士が、礼を言うとそのまま、他の兵士に手を貸しはなれる。

「アリエツタ！ 誰の許しを得て こんなことをしている！」

ヴァンが叫ぶ・・・

流石主席総長・・・

アリエッタも少したじろいでいた。

「総長・・・！ごっ・・・ごめんなさい・・・ アッシュに頼まれて・・・」

そう言う・・・ 今度はヴァンが驚いていた。

アッシュって・・・確か・・・

（ルークにそっくりだったあの・・・）

思い出そうとしていると・・・

アリエッタが直ぐに行動に移る。

「船を整備できる整備士さんは アリエッタが連れて行きます！返して欲しければ！ルークとイオン様がコーラル城へ来い！・・・です。」

最後にですをつけるところがなんともなあ・・・って

「ちょっと！女のコが誘拐って！まって！..」

追いかけてよとしたが・・・

相手は空を翔るグリフィンだ・・・

あつという間に飛び去り・・・
見えなくなった・・・

#31 襲撃・妖獣のアリエッタ(後書き)

ありがとうございました！

#32 コーラル城・vs アリエッタ(前書き)

ちょっと長いです…

よろしくお願いします！

#32 コーラル城・vs アリエッタ

アリエッタが去った後…

壊れていた宿舎で一先ず、話し合うことになったのだが・・・ヴァンの言葉は・・・意外なものだった。

「助けないって!!」

ティアが真っ先に反応する・・・

助けないという事は見殺しにするということだ。

「イオン様とルークを危険に晒すわけにはいかん。」

ヴァンはそう言う・・・

「でもでも・・・船を修理できるのってさらわれた整備士さんだけなんですよ!」

アニスも反論するように言った。

「訓練船がもう直ぐ寄港する予定だ・・・それに乗って帰ればいい。」

「
ヴァンはやはり・・・ 要求には応じない構えだ。

「ですが・・・それではアリエッタの要求を無視する事になります
！」

イオンの性格ならば・・・ ほうっておくような事は出来ないだろ
う・・・

「見捨てるのは・・・ あんまりだと思っ、俺も・・・」

アルもイオンの意見に賛成！

まだ 意見は言っていないけど大体わかる！この性格なら ぜーった
いに助けるって！ 苦笑

「今は・・・戦争を回避する方が重要なのでは・・・？」

ヴァンは静かにそう言っ・・・

確かに・・・正論だ・・・

戦争が起きれば・・・ これとは比べ物にならないほど犠牲が出る
だろう・・・

優先などといいたくはないが・・・

イオンはうつむいてしまっ・・・

当然アルも言う言葉が見つからない・・・

自分自身も・・・戦争を回避して欲しいと願う者の1人なのだから・

「アリエッタのことは 私が処理する。船が来るまでココで待機してもらいたい。」

そう言い・・・ ヴァンは部屋を出て行った。

「攫われた人どうなるんですの？助けてあげないんですの??」

ミュウが悲しそうな顔でそう訴えるが・・・

「うっせーな！ ヴァンせんせい師匠が何とかするって言ったんだから 任せておけばいいんだよ！」

ルークがそう言う・・・

ヴァンヴァンの事になると・・・いつも見えていない視界がさらに狭まるようだ・・・盲目・・・ともいえる。

これは・・・大丈夫なんだろうか・・・確かに・・・隙がなくしつかりとした感じの人だったけど・・・

アルは少し不安が頭を過ぎっていた。ルークに対して…

ティアは…命を賭けて兄を討たんとしていた。

確かに 肉親同士の争いは悲しいことだけど… そんなこと、ティアは重々に分かっていると感じる。

もし… ^{ヴァン}彼には自分達が知らない何かを…隠しているとしたら…？

だが、今はそれを考察している時じゃない。

「導師イオン！お願いします！どうか導師様のお力で隊長を助けてください！今年の生誕^{スコア}予言でも大きな災いは取り除かれると言っわけで隊長は安心していました。」

「お願いします！隊長をどうか！」

攫われた整備士の部下だろう…その2人が、入ってきて、頭を下げる…助けてくださいと。

そう言われたらイオンなら…

「分かりました。」

そう答えるだろうと思っていた。

整備士の2人はその言葉に喜ぶ。

ジェイドは、

「よろしいのですか？」

確認を込めイオンに聞く。

「アリエッタと話して人質を解放してくれるよう説得してみます。」
イオンの意思は変わらない。

「もちろん、オレはイオンに賛成、同行するよ。」

「私も同行します。」

アルとティアは同行すると言う。

「アルはともかく冷血女が珍しい事言ってる」

ルークが胡散臭そうな目でティアを見ていた。

まだヴァンを襲ったことを根に思っているのだろうか？

「大きな災いは取り除かれると言う^{スコア}予言を受けた者を見殺しにしたら、^{スコア}予言を無視したことになるわ。それでは…ユリア様の教えに反してしまいわ。」

そんなルークの言い方には全く気にせず、ティアはそういった。

「オレは、教えとか予言とか…そんなことは特に気にしてないし、
どうでもいいよ。」

アルがそう言うとティアが、

「何を言ってるの！予言は…始祖ユリア様の教えなのよ？」

少し、怒りながらそう言う。

他の人もちよつと驚き気味だった。

「ん… オレはこの世界での生活は殆ど無いに等しいし、今ある知識も、仮初のような感じだからかな？あまり予言スコアに執着が無いんだ。ティアや皆と違ってね。唯…目の前で危険にさらされている…助ける命を放っておくことは出来ないな。もし、予言スコアでその人が死ぬって読まれてたら？見過ごすの？そんなのさらさら御免だったこと。」

「「！！！」」

この言葉にティアは驚いた表情を作っていたが、一番驚いていたのはガイだった。

なんでそこまで驚くのかは分からないけど…

「…そうですね… アルの言う通りなのかもしれません。予言スコアは未来への選択肢の一つなのですから。」

イオンはそういつていた。

「ははは… そんなふーにいう人になんてはじめて遭ったよ！」

アニスも驚いてはいたが… 笑っていた。

「ふむ… そうですね。貴方の考え…興味深いものです。」

ジエイドも… 同様だった。

「……………」

ガイは… 考え事をしているのか…黙っていた。

結局は皆、最終的にはイオンについていくと言う結論のようだ。

「オレも勿論同行するぜ。オレは… コーラル城って言うのが気に入ってな。」

ガイがそう言う。

「どついうことだよ？」

ルークがガイにそう聞く。

「7年前…誘拐されたお前が見つかった場所なんだよ…」

ガイが…ルークにそう言うこと…

「!?!?!」

ルークが驚愕の表情をつくる…

この後…ルークもコーラル城へ向かうと決めた。

【コーラル城】

ここは… 確かに立派な城なんだけど…

廃墟と化していて…まるで幽霊屋敷のようだった。

「みゆううう… なんだか怖そうなところですよ…」

ミュウの言つとおり！

おばけがでそーだ！ 苦笑

「コーラル城はファブレ公爵の別荘だ、前の戦争で戦線が迫ってきて、放棄したらしい… ルーク お前まで来なくてもよかつたのに…」

ガイがルークにそう呟く。

「いーだろ？ 実際見てみれば何か思い出すかもしれないじゃんか！」
ルークの目的はそれだった。

「確かにそれはあるかも、 オレにもそついう場所があつたらいいんだけどな…」

やや自虐気味だなあ…

「「アル…」」

「……………」

周囲に悪い空気を流してしまった…

「あ…ははは… ごめんごめん、そんなつもりじゃないよ。ジックリいくさ。今は守るべき者だっているし… 仲間みんなだっているからね。」

そう言って笑顔を作る。

その笑顔をみて…

「やはり… 強いです… アル。」

イオンは改めてそう呟いていた…

「……………」

ルークは…黙っていた。

「貴方も何か感じるものがあるんじゃない？ルーク。」

ティアが黙っていたルークにそういうと…

「うるせえ…」

唯それだけだった。

「さあ、皆さん そろそろ気を引き締めましょう、敵は何時現れるか分かりませんか？」

ジェイドがそう言つて…

「ああ…六神将つて言う連中か、全員きてんのかな？と言うかどんな連中やっくらなんだよ？」

ルークが聞いた。

「タルタロスであった人たちだね。身に纏う雰囲気か回りの人達と違つてた。」

「ええ、そうです。そのタルタロスであったのは、【魔弾のリグレット】、【妖獣のアリエッタ】、そして【黒獅子ラルゴ】 後は【烈風のシンク】と【死神デイスト】…」

ジェイドが話していく。

そして…最後の1人は…？

「俺達を襲つてきた奴は？姿は…見なかつただけど？」

そうルークが聞くと…

ジェイドは眼鏡をなおし答える。

「あれが…【鮮血のアッシュ】でしょう。」

「あの…赤い髪の男か…」

アルは実際にアッシュのことを見ていた。

その顔立ちはどう見ても…

「アル…」

ジェイドがアルの方を向き… 言わないでくれと言う様に、人差し指を口元につけた。

「ん…」

事情は分からないが… 何かあるのだろうと察し何も言わなかった。

そして一行はコーラル城内に足を踏み入れる。

暫く歩いていると…

動く石像やら… 蝙蝠やら… なんかフワフワ浮いてる奴やら…

結構な数のモンスター達のお出迎えだった。

「こいつ等をペットにでもしてたの？ファブレ公爵は…」

「んなわけないだろ！アル、馬鹿言っでないで手を動かしてくれよ
」

「ははは… そーだったよ。」

とりあえず、前衛はルークとガイに任せ、アニス・ジェイド・アル・ティアは後衛、譜術主体の戦法に入る。

「炸裂する力よ… エナジー・ブラスト！」

キュウイイーン！ ズガアアン！

ギャアアアア！！

石像が粉々に吹き飛ばす！

ツシャアアア！！！！

蝙蝠が頭上から攻撃してくるが…

「させないわ！セヴァートフェイト！」

3本のナイフを蝙蝠に突き刺し… その瞬間！攻撃のフィールドが発生し…

ズガアアアン！

ギヤアアアアアアアア！！

何匹か纏めてしとめる。

「さあて！ 私も負けてらんないよ！ アンタと私の術！どっちが、ネガティブかな？ ネガティブゲイト！」

魔空間を作り出し！それでフワフワ浮いてる奴を仕留めた！

叫ぶまもなく… 魔空間に包まれ…消滅する。

「やっぱ 5人もいると心強いよ！ さて、お前の相手はオレだ！ 結晶せよ！氷の礫！ アイス・ブロック！」

石像の回りに、氷の礫が現れ、瞬く間に石像に結集する。

ガッ！！

パキイイイン！！

そして、完全に凍りつき動かなくなった。

「ふう…とりあえず 片付いたな…」

「ったく…うぜーな、くそ。」

ルークもぶーぶー言いながら戦う。

これじゃ思い出す所じゃないだろうな…

「あーもー 何にも思い出せねーし、敵はつぜーし」

ルーク… やつぱり。 ってか ヤケになってる？ 苦笑

「まーまー こんなに熱烈な歓迎を受けてたら中々思い出せないさ普通。」

苦笑しながらも、とりあえずなだめた。

「ははは、アルのルークをなだめるその役目、堂に入ってきた感じがあるな。」

ガイが笑いながらそう言う。

「ふふふ… いやぁ そうですね。ルークの抑え役はやっぱり貴方しかいません。」

ジエイドも…

「何だよそれ… はぁ…」

アルはため息…

「はん！なんだよ！それ！」

ルークはいつもどおり！ 苦笑

わーわー 言ってると…

「まーまー！ルーク様？私も記憶を取り戻すお手伝いしますからあゝ元気出してください？」

そう言っつてアニスが飛びついた… 間違っつてガイに… 苦笑

で…いつも通りビビッつて終わりかと思っつたら…

「うっ！！ うわああああ！！やっ やめろー！！」

アニスを振り払い、頭を抱えた。

これまで以上の… 拒絶の反応だ。

「きゃあ！な…なあと…」

アニスも何が起きたか一瞬分からなかつたようだ。

倒れながら驚いていた。

「ガイ！」

ルークも流石に不安になり、ガイに声をかける。

「…あつ オレ…」

ガイはすぐに正気を取り戻しはした…

「尋常では有りませんね… どうしたんですか？」

流石に唯の女性恐怖症と片付けるには…

「ほら、アニスも大丈夫？」

アルはアニスを起こした。

「ありがとうー。 ガイ… 大丈夫なのかな？」

アニスも振りい払われたことより、ガイの心配をしていた。

「何かあったのですか…？ 唯の女性嫌いとは思えませんよ…？」

イオンも心配そうに見つめる。

「すまない…体が勝手に反応して… 何でかわからねんだ。ガキの頃はこうじゃなかったし…ただ…すっぱり抜けてる記憶があるから…それが原因かもな…。」

ガイは俯いた…

「お前も…記憶障害だったのか？」

ルークが心配そうに聞く。

「違う… と思う… 一瞬だけなんだ、抜けてるのは…」

「どうして…一瞬だとわかるの？」

ティアが聞いた。

そのガイの答えは衝撃的なものだった…

「わかるさ… その記憶ってのは、オレの家族が殺された時の記憶だから…」

！！！！！！

皆…表情が…固まっていた…

ミュウも悲しそうに…俯く。

「ガイ…」

友の悲しそうな顔を見て…ルークは近づいていった。

その…致命的ともいえる一瞬の油断！

ガアアアアア！！

突然グリフィンが現れた！

「うっ…うわあああ…！！」

「ルーク!!」

「ご主人様!!」

グリフィンはルークを掴むとそのまま飛んでいく!

「くそ!!ルーク!」

詠唱に入るが…

「駄目だ!ルークに当たる!やめろアル!」

「くそお!」

ガイはすぐさまグリフィンを追い、階段を駆け上がる。

その時!!

「…行かせない」

階段の上で待ち構えていたのは アリエッタだった。

「根暗ツタ!」

アニスはトクナガ(ぬいぐるみ)を取り出し…

「何!コレ!!」

突然巨大化した!

「人形士 パペッター…だったのか、しかし一体どういう音機関なんだ？」

ガイも驚いていた。

そして アニスはそのトクナガに乗った！

「ルーク様とついでに人質もかえしなさい！！」

飛び掛るが！

「アニス！危ない！！」

ガアアアアアア！

アニスの死角からモンスターが飛び出す！！

ドガアアア！

「きゃあああ！」

アニスは吹き飛ばされてしまった。

「1Jのー！」

ファイヤーボールを飛ばすが… かわされてしまった。

「普通のモンスターより、動きがすばやい…」

アリエッタの従えているモンスターは野性のモンスターよりも何枚も上手のようだ。

「いったーい！もー 酷いじゃない！！アリエッタ！！」

アニスは罵倒するがアリエッタも黙ってない！

「酷いのはアニスだもん！アリエッタのイオン様を盗っちゃった癖に！！！」

アリエッタの…？

「どづいづいと…？」

「い…いえ 違つんです！アリエッタ！フォンマスターガードイアン貴女を導師守護役から遠ざけたのは…そついう事ではなくて…」

イオンは悲しそうな顔で叫ぶ…

アルはアリエッタの！と言っていた意味は理解できていたようだった。

だが、アリエッタは更に…信じられないことを…

「その人たちも酷いんです… だってアリエッタのママを殺したもん！！！」

悲痛な叫びが…伝わる。

「ママ…？一体何のことだ？」

「ママはお家を燃やされて… チーグルの森に住み着いたの…」

チーグルの…森…？燃やされた？

「みゅっ…！」

ミュウは気付いたようだ…そう…アリエッタの母親とは…

「ママは子供達を…アリエッタの弟と妹を守るうとしてただけなのに…！」

！…！！

「まさか…ライガの… あの女王のことか！？」

「そんな…」

アルとティアは驚きながら言う。

「彼女は…ホド戦争で両親を失って…魔物に育てられたんです。」

イオンが… 悲しい事実を…教えてくれた。

「女王は…オレが…とどめを…」

アルは…罪悪感に襲われる。

「アル！しっかりして！！」

ティアが櫓を飛ばす。

「今は後悔してる時じゃないわ！」

そう言つと武器を構えなおす。

「ママの仇！！」

アリエッタが手を上げると…一斉にかなりの数の魔物たちが押し寄せてきた。

「やれやれ…」

ジエイドが腕から槍を出す。

「恨まれるのには慣れてます！」

ガイも剣を取り出し…

「俺達も…ここで殺られる訳にはいかないんでな！」

アルは…ティアに言われたが、暫く俯いていた。

「…誤つたつて、君は許してはくれないだろう。だけど…」

顔を上げる。

「何かを守ろうとした気持ちはこちらも同じだ！」

そういつて術式を展開させる！

#32 コーラル城・vs アリエッタ(後書き)

ありがとうございました！

#33 六神将の狙いは？(前書き)

よろしくお願いします！

#33 六神将の狙いは？

六神将 side

連れ去られたルークは…妙な機械に寝かされていた。

「なるほど…
フォニム音素振動数までも同じとはね…」

椅子に座っている男が呟く…

その声にルークが目を覚ました。

「これは…完璧な存在ですよ。」

笑いながら…機械を操作する。

「そんな事はどうでもいいよ。奴らがここに来るまでに情報を消さなきゃいけないんだ。」

…男がもう1人、目元が嘴の様なバンドをつけており、顔が分からない、緑髪の男だ。

「そーんなにこの情報が大事なら…アッシュを止めればよかった

んですよ…」

まるでピアノを弾くような手さばきで…機械を操っていく…

「ふん… あの馬鹿が勝手にやったんだ…ん？こっちの馬鹿もお目覚めみたいだね。」

男はルークが目を覚ましたことに気付いた。

Side out

暫く…数の暴力で劣勢に立たされてはいたが、

徐々に自力で勝るこちらが魔物を圧倒していった！

「魔人剣！」

ズバァン！

ガイが魔物を切り飛ばす！

これで階段にいるのはアリエッタのみ！

「ガイ！先に行きなさい！！！」

ジエイドが叫ぶ！

「おう！！！」

持ち前の俊足で一気に階段を駆け上がる！

「行かせない！！！」

アリエッタが立ちはだかるが。

「…聖なる槍よ！我が敵を封じよ！！！」

アリエッタの頭上に三本の光の槍が現れる。

「シャイニング・フォルト！」

ガキイン！！

「きゃああ！！！」

完全に動きを封じる。

「根暗ツタ！…さっきのお返しよ！…」

そこへアニスの一撃！！

ズガアアアン！！

「きゃあああああ！！！」

アリエツタは乗っていた魔物から落ち…倒れた。

「……………」

ジェイドは…倒れたアリエツタに槍を突き立てた。

「…ジェイド！」「待ってください！！」

アルがジェイドの槍を掴み、イオンが叫ぶ。

「あなた達ならそう言うと思ってましたよ」

ジェイドは笑いながら武器を収める。

ブラックジョーク過ぎるよ…

そして アリエッタとの戦いは終結した。

六神将 side

椅子に座っている男…

と言つか…椅子で飛んでる！！男が…何やら機械から取り出す。

「こいつの同調フオンスロットは開きましたよ。私は失礼します。
この情報を早く解析したいのでね… フフフフ…」

なんともまあ… 表現しにくい笑顔と笑い声だこと… 「おだま
りなさい！」

??まあ 空耳ってことで！ 苦笑

そのまま男は椅子で飛び去っていった。

「ぐっ… お前ら…一体…何を…」

ルークは…顔が僅かに動かせた為、そこだけを起こし、残った男に
聞く。

「…ふん 答える義務はないね！」

そう言うと男も先ほどの男同様、機械からデータを抜き取る。

そして、取り出したその時！

「！！む！！」

殺気に感ずいたのか後ろを振り向く！

「はあああ！！」

ガキイン！！

背後を取ったガイが一閃を入れるが…相手の動きが早く反応したためか、嘴の様な仮面を浮き飛ばしただけで終わった。

だがデータを奪う事に成功した！

「！！ お前は…」

ガイが弾き飛ばし、露になった男の顔を見て驚いていた。

「「ガイ！！」」

他のメンバーが一気に詰め寄る！

それを見た男は急いで顔を手で覆う…

「クソ…ヤツとの接触は禁じられている！」

そう言つと… 素早く逃げ去っていく！

「あつ 待て!!」

ガイは追いかけてよとしようとするが、

「今はルークのほうだ！ガイ!!」

すぐ傍まで来ていたアルが叫ぶ！

「そつだ！ルーク!!大丈夫か！」

ガイが、ルークを起こす！

「あ…ああ… 大丈夫だ…」

ルークは少しダルそうにしていたが、体のほうは何ともないようだった。

「ふう…良かった…でも 一応…」

アルが、ルークの頭に手を当てる。

「なんだよ？」

ルークが嫌そうにするが、

「すぐ終わるから我慢してくれ。

快方の力を此処に…ヒール…」

ルークの頭上から…鮮やかな緑色の光が降り注ぐ…

「あ……治療術か…」

「気分は…？」

アルが譜術を終え、ルークに聞いていた。

「あつ…ああ、大丈夫だ。」

ルークは少し照れくさかったのか歯切れが悪かった…

「はあ…とりあえず良かったよ…」

そこへアニスとティアが遅れて到着した。

「ルーク様…心配しました〜！」

「ルーク！大丈夫なの？」

ルークは体を起こしながら…

「ああ なんとかな、…なんだったんだ？あいつら…」

そう呟いていた。

「… これは…！」

そのルークが寝かされていた機械を見てジェイドが驚愕の表情をし

ていた。

「…珍しいね、ジエイドがそんな表情を見せるなんてさ。」

すぐ横でいたアルとガイがよってきた。

「…これが何か知ってるのか？」

アルに引き続き、ガイがジエイドに聞く。

ジエイドは…表情こそ元に戻ったが、顔を俯かせた。

「いえ… 確信が持てなければ… (いや… 確信できたとしても…)

」

ジエイドはまだ皆にはいえないようだった、

「…ところで、今のやつが残して言ったフォンディスクだ。何か手がかりになるかもしれない。」

そう言っつてジエイドに手渡す。

「…分かりました。解析してみましよう」

ジエイドは頷きながらそう答えた。

その後…

敵はいなくなつた為、

無事、監禁されていた整備士を救い出すことに成功した。

そして、一行は軍港へ戻ることにした…

#33 六神将の狙いは？(後書き)

ありがとうございました！

#34 vs 死神デイスト 「薔薇です!!」 (前書き)

…サブタイトルにけちをつけてきている人物は…もちろん…

でわ!!!

#34 VS 死神デイスト 「薔薇です!!」

【カイツール軍港】

軍港では、助かった整備士とその部下達が、手を取り合い喜び、そして、六神将のアリエッタは捕縛された。

「…無茶をされましたな、イオン様…ルークもだ どれだけ心配したと思っておる…」

ヴァンがイオンとルークにそう言う。

簡単なお説教…といった感じだ。

「すみません…ヴァン…」
「…ごめん…」
師匠せんせい…

イオンもルークも謝罪する。

流石にルークもヴァンからお叱りを受けたら素直に謝るようだ

厳しい表情を見せていたヴァンだったが…

すぐに、表情を元に戻し…ルークの肩に手を乗せる…

「無事でよかった。さあ…帰ろうか。」

そう言うとルークは笑顔に戻った。

そして…一行は連絡船へと乗り…バチカルへ…

【連絡船キャツベルト】

ジェイドはまず、ガイから渡されたフォンディスクを解析していた…

そして…あることに気がつく。

「やはり…そうでしたか… ルーク…貴方はいつか…私を殺したいほど憎むかもしれませんね…」

そう呟き…フォンディスクを取り出し… 仲間が待つ客室へと向かった。

ミュウは初めての海に大はしゃぎ…!

「ご主人様！見てくださいますの！ 回りは全部水だけですの！すごいのです…!」

んで… もちろんルークは…

「んあ！うぜーな…!はしゃぐんじゃねえ…!」

と、一蹴…

「うみゅっ…」

萎縮しちゃいました…

「ははは…ほら ミュウ。」

泣きそうな顔をしているミュウの頭を撫でてやる…

そうすると、くすぐったいのか気持ちいいのか…すぐに笑顔に戻るんだ。

んで…それを 見ていたティアが…

(…いいなあ…)

そう うらやましそうに見ていた。

「ジェイド、例のフォンディスク… 中身は？」

ガイが、ジェイドにそう聞く。

「彼らは… 同位体の研究をしているようです。そう…ローレライの音素振動数フォニムも記録されましたね。」

そうジェイドが言つと…

「だー！また わけわかんねえー」

っとルークがいつもどおりに… 苦笑

「ローレライはですね、第七音素の意識集合体、音素は一定以上集まると、自我を持つらしいんです。」

アニスが気を利かせて説明をしてくれた。

「でも… ローレライって仮説なんだよね？ 観測されてない…って書いてたような…」

アルがそう言う。

「ええ、そうです、まだ実際には観測されてませんよ。後、音素振動数って言うのは…全ての物質が発しているんですけど、指紋みたいに同じものはないんです。って同位体って言うのは音素振動数が全く同じ2つの固体のコト！でも 同位体は人為的に作らないと存在しません！」

なるほど…

「はあ…勉強になったよアニス！ありがとう。」

「はうわ！ そんなお礼を言われるほどのことじゃないよ〜！でも、アルは知ってたんじゃないの？」

「いや… 同位体のことは知らなかったんだ、勉強になったよ、そう言う。」

「では？肝心のルーク様は理解できましたかねえ…」

ジェイドがこれまた皮肉を込めて…

「だーうつせえな！！」

ルークを怒らせて楽しんでいた…

「ルーク、落ち着きなさい。一つ覚えられて良かったじゃない。」

ティアがなだめる…

「へん！」

まあ…簡単になだめられるんなら苦労はしないけどね… 苦笑

「あと… 確か昔研究されていたフォミクリーと言う技術なら…

同位体を作れるんですよね？」

ティアがそう言うと…

イオンが少し驚くような表情をする。

「？」

アルは、一瞬驚いたが… すぐ表情を元に戻したため、深く考えるのはやめた。

「フォミクリー… あれは 模造品…レプリカを作る技術です。音^{フォ}素振動数は変わってしまうから… 同位体はつくれませんよ。」

と…ジエイドが否定、

またまた 新たな単語が出てきたので…

「だー！ー！また意味わかんねー！！」

ルークパニック2回目… 苦笑

「はあ… こういうこと家庭教師に習わなかったの？記憶障害は7年前からでしょう？ アルは…ちよつと前なのよ？」

ティアまで…

「あの… こごとばかりオレを使うのやめない？ なーんか…とばっちりがくるからさ…」

そーだよ！ルークのことガイに続きなだめ役と定着されてるのに、こういう関係でルークを怒らせたら。

オレが言っても嫌味になるだけじゃん… 苦笑

「あ… いや…その…」

ティアは… あせっていた。

珍しい表情を見れたなあ… 苦笑

「…他に覚える事が山ほどあったんだよ。」

ルークからの返答は少し意外だった、そこまで怒ってなかったからである！

「何？覚えることって？」

ティアがそう聞くと…

「言葉とか… 親の顔とか… いろいろさ。」

そう言う…

ティアは… 顔を俯かせた…

「ごめんなさい…」

そして謝罪する。

「！どうしたんだよ！！急に！」

それにルークが驚いていた・

「私… 貴方の記憶障害のこと… 軽く見ていたわ…」

「別に そんなこと…」

ルークはティアの突然の謝罪に驚いていて、少し歯切れも悪かった。

その時！

「大変です！カイツール方面から！！正体不明の譜号反応が！！！」

連絡船に乗っていた兵士が慌てた様子で入ってくる。

「はぁ… 乗り物に乗るとどうしてこう…トラブルが多発するんだろっ…」

肩を落とし…アルは少し愚痴をこぼす。

「はっはっはータルタロスもそうでしたからねえ！」

ジエイドは…相変わらずだった。

「おいおい、気持ちはわからねえでもねえが、今は急いで様子を見る方が先だろ？」

ガイがそういうと、まあ… 本気だったわけでもないから、すぐに行動に移した。

甲板にて…

皆が甲板に到着したとほぼ同時に！

「はぁーっはっはっはっはっ！！」

高らかと… 特徴的な笑い声が木霊する…

「おお？」

ルークが空を見ると…

「何あれ？椅子が浮いてる？」

アルも？を浮かべながら見ていた。

んで ジェイドは露骨に嫌な顔…というかあきれたような顔をする。

「野蛮な猿共がお揃いですね…」

徐々に降りてきた…

「お前は！？」

ルークは見覚えがあるのか声を振り上げた。

「お前ではありません！とくとお聞きなさい… 美しき我が名を…

我こそは神託オラクルの盾六神将… 薔薇の…「おやあー… 鼻垂れデ
イストじゃないですか」…！！」

ジェイドが狙ってたかのように割ってはいる！

「薔薇！ 薔・薇！薔薇のディスト様です！！」

怒りながらそう叫ぶ…

「死神ディストでしょうー？」

アニスもそういう。

「違います!!!」

そしてまた怒る…

「はあ… なにあれ？ 六神将の中で一番子供みたい… まだあのアリエッタの方が大人なんじゃない？」

アルがあきれながら呟く…

「なーーーーんですって!!!!!!」

聞こえていたようだ… つか 地獄耳…

「なんで 聞こえるのかな？」

「さあな、 アニスは知り合いなのか？」

ルークがアニスに聞く。

「私は同じ神託オラクルの盾騎士団だから… でも 大佐は…」

ジェイドは何も言わない。

「んっふっふっふ… その陰険ジェイドはこの天才ティスト様のかつての友… 何処のジェイドですか？ そんな物好きは?!?!」

またまた…

「なんですってーーーー!!!」

そして怒る…

「ほらほら！怒るとまた鼻水が出ますよ？」

ジエイド…

「楽しんでない？」

「いやー そんなわけないじゃないですかー」

そういつてる間… ディストは自分の鼻に手をやってた… あれ？本当だったのかな？

「キーーーーー！！出ませんよ！！」

「反論が遅いよ…」

苦笑する…そしてルークも…若干表情が…

「まー それはおいときまして… さあ！大人しくフォンディスクをお渡しなさい！」

ディストがそういうと…

「このことですかー？」

ジエイドが何のためらいもなく取り出す…

いやいやちよっと 油断しすぎじゃ… 苦笑

「隙ありー！ー！ー！」

「ああ！ー！」「」「！ー！ー！」「」「」

椅子なのに動きはまさに疾風！

ジエイドからフォンデスクを掠め盗っていた！

「はっはっはー！ー！ー！」

そして勝ち誇るように笑っていた。

「全く… …ふん！」

アルが手を翳し… …凶形を描くと…

「はー！はっはっはっは！ ってあらー！ー！ー！」

フォンディスクはまるで生きているかのような動きをしながらこちらに… …というかアルの手の中に戻ってきた！

「ジエイド… …いくらなんでも油断しすぎだよ… …？」

そうあきれながら言つと…

「やれやれ… …貴方のせいで嫌がらせが減ったじゃないですか… …もう返してしまつてよかつたんですよ？」

「へ？」

アルがあっけらかんとしていると…

「きーさーまー！よくも！！っていつか！どうやったんですか！！」

デリストが叫ぶ！！

「あれ…？天才だったらこのくらい分かるんじゃないんですか？」

「なっ！！！！キーーーー！！！！」

アルも皮肉を込めて…って…

「アル…そうやってたら貴方も大佐と変わらないわよ？」

ティアがちよつと呆れて言ってた…

「あ… うつつちゃった？ジェイドの嫌がらせに…」

アルはちよつと苦笑し…

ジェイドは…手で口を押さえながら笑っていた… 苦笑

「むきーーーー！貴様ら！私をこばかにして！！ウルトラゴージャスな技を喰らって後悔しなさい！！いでよ！！カイザーデリストアーーーール！！！！」

デリストが叫ぶ！！

すると…空から…何かが…！

「いけない！！皆下がりなさい！！」

ジェイドが叫んだその瞬間！

甲板に穴を開ける勢いで所謂…ロボットが降って来た！

「何だ？こいつ…」

ルークが見ていると…そのロボットは徐々に動き出し…襲い掛か
ってきた！

「この…！」

ルークはすぐさま武器を持ち直し突っ込む！

「てやああ！！」

ガイも同様だ！

だが…

ガキイイイイン！！

2人の剣ははじき返されてしまった。

「くっ… 硬いぞ！コイツ！！」

当然相手は生身ではない… なら！

アル・ティア・アニスの三人は頷き合い、術を発動！！

「ナイトメア！ ネガティブゲイト！ シャドウ・エリア！」

闇の属性の譜術が直撃するが…！

ロボットの勢いは止まらない！

「何も効かないのですの！！」

ミュウが不安そうにそう言う…

それを聞いたディストは気分がいいのか…

「ひっひっひっひ…」

笑っていた…

「唯の馬鹿じゃなかったんだね…」

そうアルが呟くと…

「だあれが！馬鹿ですか！！この私に向かってええ！！」

…

「地獄耳だ…」

これだけドンパチ戦ってるのに…

彼の聴力も驚嘆に値するね…

そんなこんなをしているうちに… 結構危なくなっていた！

「つつつそ！こいつ！！」

ガキイン！

攻撃を行ってもはじかれてしまう…

ルークが弾かれ、そして隙が出来たところへ！

ドガアアアア！！

ロボットの一撃がルークを捕らえた！

「があ！！」

ルークは吹き飛び倒れる！

「ルーク！！くっ！！」

ガイが向かおうとしたが… すぐに邪魔されてしまう。

「ルーク！ 大丈夫か！？ ヒール…」

アルがすぐに治療術を施す…

「ああ大丈夫だ！ クソ… どーすんだよ！あんなモン！！」

ルークがそう言う… ジェイドは何かを思いついたのか…

笑みを浮かべていた。

「なら これならどうですか？ 荒れ狂う流れよ！ スプラッシュ
！」

凄まじい水撃が降り注ぐ！

ギッ！ ガガ…ガ…

初めて動きが鈍る…

「ナルホドね…」「機械は水に弱い…っということですか？」

ティアも弱点が発覚したことで、余裕を取り戻したようだ。

「おのれ…よくも…！」

デイストがわなわな震えながら見ていた…まあ 彼は直接戦う人じゃないようなので何も出来ないと思いますが… 苦笑

「水よりもつとキツイのをあげるね。機械にはさ…！」

そう言うとアルは図形を書き上げる！

「みんな！ちよつとぬれちゃったらゴメン！ 荒れよ！暴風！叫べ海よ！シーイングオーシャン！」

アルが手を翳すと…

「ん？ 何ですか？」

デイストが影が出てきたことに気付き… 後ろを見てみると…

「なああ…！ ぎゃわあああ…！」

波直撃！！

「船の両サイドから波が押し寄せ！それは海面を離れ　ロボットを
挟み込んだ！

ズガアアア！！！！

「つぶあ！！　あぶねーな！！」

ガイがアルに向かっていう！

「ごめん！！」

合掌！　苦笑…

でも…

ガ…ツギギギギ！　プスツ…　プス…

更にショートしたようにバチバチと接合部等から火花を散らす。

ジエイドは楽しそうだ…

「オレはほんとのコトいっただけだけどね…」

他の皆も苦笑いしていた…

そこへ…

「デイスト！ お前まで アツシユの命で動いているのか！」

ヴァンがやってきた、

「ふん………」

デイストはさっきまで大声で叫んでただけど… ヴァンが来たとたん無口に…

やっぱりさすがは総長といった所かな？

「やむおえん…」

そう呟くと…ヴァンは手を翳す。

すると…！

天より雷撃がカイザーデイストRに直撃！！

ズガアアアアン！！

水を浴びていたのも効果的だったのか一気に！爆発した！！

「やったぜ！！」

ルークは目の前で爆発した、敵を見て喜ぶ！

「わああああああああああ！！」

その爆風に…ディストも吹き飛ばされ…

ザッパーン！！

海へ墜落…

「あいつ…」「死んじゃったかな？」

何とも…かわいそーな結末だ…

「いや… 殺して死ぬような男ではありませんよ。ゴキブリ並みの生命力ですから。」

「そりゃ 安心…… なのか??」

そんな感じでこの戦闘はとりあえず終了した。

#34 vs 死神デイスト 「薔薇です!!」 (後書き)

ありがとうございました!

#35 2つの素敵で綺麗なもの(前書き)

よろしくお願いします！

#35 2つの素敵で綺麗なもの

その夜…

「ふう… 今日も色々あったな…」

船室のベッドで横になってたアルだ。

「ん… まだ 眠れないし… ちょっと出てみるか… 外にでも…」

そう呟き、船室の外へ…

暫くてきとつに歩いていた。

「ふう… アクゼリユスをでて… 結構立つけど… 皆元気かな… ? ガーランドさん達やレイさん… サラ…」

少し… 暗い雰囲気になる。

「うん… 思いつめても仕方ない。 皆を助けるには、これしか方法がないんだ。 今、自分に来ることをしないと… なる。」

そして… 空の見える場所で… 夜空を見上げていた。

「はあ… 綺麗な星… だな…」

そこに横になる…

「ねっころがって、星を見るのって悪くないかも、サラとした日向ぼっこも良かったけど。」

そう言って苦笑する。

「…？ あら？ あれは… アル？」

アルに近づいていく… それはティアだ。

「眠れないの？」

顔を覗き込むようにしながらそう言う。

「ははは… そんな感じだよ。でも びっくりしたね。いきなり星を見てたらティアの顔が出てきたんだもん。」

「あら… それはごめんなさい。邪魔しちゃったかしら？」

ティアが少し笑いながらそう言う。

「いや 全然、綺麗なものを見るんだ。邪魔だなんてないさ、星

もティアも両方とも素敵だからね。」

「ッ!!!／／／ もう！何を言うのー！」

ティアは顔が真っ赤！

この場に皆がいれば何を言われることやら… 苦笑

「??？」

顔が赤いティアを見てマタマタ不思議そうな顔を…

「はぁ… 貴方も褒められたりしたら照れるって言うでしょっ？」

「え…？ああ うん。」

「…それと同じよ？」

ティアは顔を赤くしたままそういう。

「あ… そっか… そうだよ… ゴメンゴメンー！」

「…褒めてくれたんだから 謝ることはないと思うけど… 貴方のこともこれからは もっと言うことにするわね？お返した。」

そう言って笑う…

「…それは やっぱりちょっと恥ずかしいね… うーん ジレンマだな… 他人のことは褒めれるところは褒めたいんだけど… 自分になったら… ちょっと… ねえ？」

「あははは…」

2人は暫く笑っていた。

「さあ、そろそろ寝ないと、アルもこんなところで寝ていたら風邪を引くわよ。」

「うん。そうだね… そろそろ戻るとするよ、じゃあテ…!!」

突然アルが頭を抑えだす！

「ど… どうしたの？アル！」

ティアが驚き、そして心配しながら話しかける。

「だいじょ…ぶ… ツツ！」

頭を抑える理由…

ようやく… ……を… 見つけた… やはり… 振動…か…

今回の… 幻聴は…いつもと違う…

これはあの時の… アクゼリユスのとき以来の…

「くっ… お前は…？」

もう…し… ……だ… フフフ… ……だが…時期では… ……ない… ……ま

だ…能…か。

途切れ途切れの声だ…

「つくそ…だから…分かるように言ってくれ！」

頭を抑えながら…そう叫んだ。

我が…よ…私は…の助けとなる。必ず…聖なる焰…と…を
解放するのだ…長かった…20…0年か…

「何…？」

やはり前と同じ…肝心な部分が抜けている。

「何を…開放するんだ…！？」

それは…む…心配が…まあ…よい。

「なんだ？」

今は…まだ早い。以前にも話したが…いずれ…わかる。必ず…

それを最後に…頭の声は…遠のいていった…

「…ル！ア…！」

誰かの声が…頭の中に響いてくる…

また…さっきの幻聴…か？

「アル！」

いや…違う…これは…！

「ティ…ア？」

ティアの顔が…見えてきた。

「アル！大丈夫！？しっかりして、」

ティアが体を抱き起こしてくれていた…？いや…これって…

「え…？あれ…？」

きよとんとしながら、眩く。

「大丈夫…そうね… 良かった… 急に頭を抑えたと思ったたら倒れるんだもの…」

そう言っつてティアは安堵の表情を見せる。

「あ… ありがとう… ティア…／／／」

どうやら膝枕をされているようだ…抱き起こされたと錯覚したのは…顔が近く…手をあてがわれているからだった… 苦笑

「ああ！もう大丈夫だから！」

恥ずかしいのか・・・起きよつとするが・・・

「無理しては駄目。」

おでこを手で押され・・・起き上がれない。

「恥ずかしい・・・ んだけど・・・」

声が小さい・・・

「何？ 大丈夫なの？」

やっぱり聞えてない見たい・・・

「ツ~~~~ノノ!!」

顔なんか直視できない！

そっぽを暫く向いていた・・・ 苦笑

#35 2つの素敵で綺麗なもの(後書き)

ありがとうございました！

#36 超振動の発動(前書き)

よろしくお願ひします！

#36 超振動の発動

ルーク side

アルが真っ赤になっていた（苦笑）時より前位に…

ルークの方も眠れないのか、船の甲板で夜風にあたっていた。

「はぁ… やっぱ外はめんどくさいな…」

そのため息を1つ…出していたその時！

キーン！！

「がっ！！！」

突然ルークが頭を抑え苦しみます。

「またか！！がっ！ ぐう… か 体が勝手に！」

ルークの両手が…勝手に…その時！

《ようやく捉えた…》

そう幻聴が聞える…

「だっ！誰だ！」

《我と同じ力… 見せてみよ…》

ルークが叫ぶが体は動かない！

「お前が操ってるのか！！」

そう叫んだその時。

ルークの両の手が光だし…

キュイツイイイン…

ズ

ガ

ンッ

まるで閃光が走ったかのような光線が迸った…

その光が当たったところはチリも残さず消滅した…

「な…なんだよ… これ…」

ルークは…その恐ろしい破壊力を目の当たりにし恐怖した…

「やっ やめろおおお!!！」

必死に叫ぶが…体は動かない。

その時幻聴ではない声が聞えた。

「ルーク！落ち着け 深呼吸をするんだ…」

その声の主の顔は見えない、操られているから振り向けない、だが、声の主は直ぐにルークはわかった。だからこそ…

「はっ はっ ……」

ルークは徐々に落ち着きを取り戻す。

「そうだ… そのままゆっくり意識を両手に持って行け…」

ルークは…意識を集中しつつ…かまえたままの両手を見る。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

すると…徐々に光が消え…体が動くようになった。

そして…

「ルーク…私の声を良く聞け… 力を抜いて…そのまま…」

声の主…それはルークが最も信頼する男…

ヴァンだった。

ヴァンは…手をルークに近付る…

そして ルークは気を失った…

.....

side out

「何か凄い音がしたけど!!」

アルがそう叫ぶ。

もう膝枕からは介抱されてたみたいだね

「ええ…あのカイザーなんとか…って言うのと戦ってた甲板の方が
らだわ。」

ティアもそちらを向き…そして2人は頷きあい、向かった。

そこにいたのは… ルークとヴァン。

「大丈夫！？スツゴい音したけど??」

アルがルークに駆け寄る。

「なっ！何だよ！お前ら 何でここに？」

ルークは突然現れた2人に驚いているようだ。

「驚くのはこっちだよ！ 凄い音がして…そっちに行ったらルークがいて・・・ 何があっただ？」

「なんでもねーって 大丈夫だ！」

ルークはそう言う… なにやらいつもと違う感じだけどとりあえず…

「はあ… とりあえず… 元気そうだ。良かったよ。」

それを確認すると アルは笑顔になる…

「何をしていたの…？兄さん…」

ティアは…やはりヴァンのほうを警戒していた。

「何も無い… 今もこれまでも…そして これからもだ、ティア お前の誤解は直ぐにわかるはずだ… それまで 待つて欲しい。」

「……………」

ティアは何も言わない…

唯…船室の方へ戻っていく兄ヴァンの姿をじっと見つめていた…

「きつと…何か誤解があるんだよ。オレはヴァンさんのことはよく知らないけどさ、」

アルもそばに来ている…

「これは…私の問題だから…」

ティアは…そう呟くと。

「私も戻るわね…」

そう言っただけで帰っていく。

後姿が…寂しそうに見えたのは気のせいじゃない…

「ティア…仕方ない…か、オレは知らないんだし…無力だな…」

アルがそう考える…

そうするときつとティアも心配する。

だから、いつもどおり笑顔でいよう、

そう考えていた。

その時ルークは… 自分の両手を見ながら…

「オレが… 英雄に…」

そう呟いていた…

その時！

キイイイン！

「ぐっ！またか！！」

再び…ルークに幻聴が襲う…

《…この波動は…なんだ…？ ……気配を感じる…》

「何だつてんだ！くそっ！でも！オレは師匠せんせいから…教わったんだ！
また…操られたり…しないぞ！」

そう言いルークは精神を集中させた…

「ルーク！？大丈夫か！」

アルはルークの異変に気付き側による。

「はあ…はあ…はあ…」

ルークは意識を集中させていた。

「…？」

「大丈夫だ。前から聞えてた幻聴が聞えてくるだけだ。」

そう言いアルの方を見た。

《…この男は……？》

その言葉を最後に…

ルークの幻聴は聞えなくなった…

ルークは…

そのまま、体をアルの方に向け…

「大丈夫っていったろ？」

そう言った…

「はあ…のようだね。心配して損したよ。」

「あんだと！」

2人はまあ……いつもどおりに戻っていった。

#36 超振動の発動（後書き）

ありがとうございました！

#37 光の王都バチカル（前書き）

よろしくお願いします！

37 光の王都バチカル

そして…

船旅も終わり…目的地へ到着した。

ここは…光の王都。

【バチカル】

一行は船を下りると…

出迎えが着ていた…

「このたびは、無事のご帰国おめでとうございます、キムラスカ・ランバルディア王国軍第一師団長 ゴールドバーグです。」

先頭に立つ男がそう挨拶をする…そして、もう1人。

「セシル少将であります。」

女性も挨拶をしていた…

ルークってこうしてみると…偉いんだね…態度は何処でも王様っばいけど… 苦笑

「…？なんだよ…」

気がつくともルークを凝視…っというかガン見していたアル君… 苦笑

「あっ…あはははは…」

そんなことを直接いえる空気じゃないのは良く分かるから… 笑って誤魔化す… 苦笑

「?? まあいいや、 」「ご苦労。皆はオレが城へ連れて行く。いいな。」

ルークは2人に向きなおしそう言った。

「承知しました。」

そして…

港からバチカル内部へ…

ロープウェイで上って行くのは圧巻だ…

凄い…真下を見ると家だらけ…

「すごい街！縦長だよ〜！」「凄いのです！チーゲルの森のな
んばいもあるのですの！〜！」

アニスとミュウも同じ気持ちだったようだ。

「あははは！確かにそうだね。アクゼリユスの何倍もありそうだな
こりゃ。」

ミュウ風に表現してみた。

「アルさんの家よりもなんばいもあるんですの？」

ぴゅ〜とよってくるのはミュウ。

「そうだね。カいっぱい言うのは…ちょっと申し訳ないけど…」

アルは苦笑いしながらミュウを撫でる。

ミュウはくすぐったそうな、気持ちよさそうな… そんな感じだっ
た。

うん…癒される…

なんでルークは邪険するのかなあ… 苦笑

そんな時…ルークは外を見ても…

「ちつとも帰ってきた気がしねーや…」

そう呟いていた…

「そうか…記憶を失ってから外にはでてなかったからなあ…」

ガイがそう言う。

そんな時ティアが、

「大丈夫、覚えていなくてもこれから知ればいいのよ。」

そう言った…

すると…アニスがいや々な顔をして…

「ティアってば な〜んかやさしくな〜い?」

そう言う…

「え………?」

ティアはきよとんとしていた。

「あつ これが所謂…ええつと… そうだ、母性本能をくすぐられ
たってやつ……でいいのかな?」

「ん〜100点ですねえアル。」

2人がそう言っていると…

「何でそうなるの！そんなことないわよ！」

ティアが慌てて否定していたね… 苦笑

ヴァンは…そんなティアをじっと見ていた…

そして…一行はバチカル城へ…

ついたんだけど…謁見の間への扉の騎士がいて、

「ただいま大詠師モースが謁見中です。暫くお待ちください。」

!!!!!!???

その一言で…ちょっと空気が変わる、

「大詠師…モースが…?」

ヴァンも同様だった。

「はあ、叔父上に変な事吹き込まれる前に入ろつぜ。」

ルークは騎士の前へ…

騎士は止めようとするけど…

どけっ！！

の一言であっさり解決…

「いやあ…素晴らしいですねえ。」

ジェイドが呟く…

「あ…ははは… 力技だね…」

「それを言うなら権力ちから技でしょう？」

「漢字の読みを変えただけじゃん…」

って苦笑しているアルさんといつもどおりの表情のジェイドさん…

苦笑

とりあえずその恩恵の元…謁見の間へ入っていった。

「…マルクト帝国は…首都グランコクマの防衛を強化しております。」

エンゲーブを補給拠点として「待てよおっさん!!」「ッ!!」

モースらしき人の発言に口を挟む!

「おおお… ルーク!よく無事に戻ってくれた…」

そう言ったのは…キムラスカ国王であるインゴベルト六世だ。

国王はもう1人…気になる人物が来ていることを知る。

「これはこれは…導師イオン。」

それは不在とされていた導師イオンだった。

イオンがいないがため、モースが来ていた状況だった為驚くのは無理もない。

「ご無沙汰しております陛下。」

イオンが挨拶をすると…

「おっあっ…ああ!お探ししておりましたぞ!」

モースは驚きながら話していた。

「モース、話しは後にしましょう。」

イオンはモースにそう言うと、

「陛下。こちらがピオニー九世陛下の名代…ジェイド・カーティス

大佐です。」

そう紹介すると…

ジェイドが一步前へ出て跪く。

「我が君主より…偉大なるインゴベルト六世陛下に親書を預かって参りました…」

そう言うと、アニスが新書を取り出し…陛下の側近に手渡した。

そこでルークが、

「叔父上！モースが言ってることは出鱈目だからな！」

ルークがそう言い放つ、

「なっ！何を言うか！！私はマルクトの脅威を陛下に…」「うるせえ
！！！」

ルークは更に前へ出て。

「戦争を起こそうとしているだろーが！！」

興奮しっぱなしだ…

ヴァンがルークの肩に手をかける…

「ルーク、おちつけ…」

そう言うとは…少しは落ち着いたみたいだ。

「こうして親書が届いたのだ…それを無視はせぬ…」

国王は新書を確認すると、そう言った。

「頼むぜ…叔父上。」

そして…安堵感が辺りを包みこぬような感覚が走る…

これで…きつと…

そして謁見も終わり…

皆 謁見の間より退出した。

「ルーク…ありがとう 貴方のおかげです…」

イオンがルークに礼を言う。

「オレからも…ありがとうルーク。これで…アクセリユスが助かる…ほんとにありがとう。」

アルもそう言った。

実際・・・涙が出そうだ。

だけどそれは、本当に救えた時にお預けだね。

「まーな！本気出せばこんなもんだ。」

ルークはそう言いながら歩いていた…その時にジェイドは…

「流石の七光りです！」

つと一言…

はあ〜〜…

「いちいち癪に障るやつだな!!」

ルークが…まあ当然だね・・・

「まっ…まあーまあー ジェイドって…こついうキャラじゃん…?」

なだめるのはアル… 構図は相変わらず…だね… 苦笑

「これは失礼… 実際助かりました！」

ジェイドも…今回はかりは本当にそう思っていたみたいだ… 苦笑

そしてルークは。

「これで…戦争は起きなくなるのか？」

そう言つた、

「これから検討が始まるだろう…」

ヴァンが答えた。

「そうか…それじゃあオレは母上のところへ行つて来る。心配しているだろうからな。」

そう言つた…

(そつか… ルークは文字通り飛ばされたんだつた… そりゃ心配するよね…)

つとアルが思つてると…

「アニスちゃんルーク様のお家見てみたあゝいですか？」

ルークに引つ付くのはアニス。

「なら 私たちも…」

ジエイドもそう言つた。

「はあ…普通の家だぞ？」

ルークがそう言つた。反対はしてないみたいだ。

「…普通の家…ねえ…」

アニスがそう呟いていた…

#37 光の王都バチカル（後書き）

ありがとうございました！

#38 ルーク邸・婚約者ナタリア（前書き）

よろしくお願いします！

はい、弓の名手が登場します

使ってませんでした… 苦笑

#38 ルーク邸・婚約者ナタリア

【ルーク邸】

ルークの家はバチカル城の直ぐ横に位置している…

直ぐに到着した…

「さっ！ここだ！」

ガイが案内をした…

「きゃうわ〜すっ〜い…」

「確かに…」

まあ…オレも普通って言う言葉はあまり使わないよ？

だって、この世界の事…そこまで知ってるわけじゃないじゃん？

でも…これが普通かどうかは…わかる！！

凄くでかいし…

ルークにはとりあえず、普通の意味を調べて100回書き取りだ！

「…アル？頭で考えてるみたいだけど… 声に出てるわよ？」

ティアがため息をだしながら…そう言った。

「え？」

ルークがじとじとっつと…

それ以外は笑っていたなあ… 不覚… 苦笑

ガチャ…

デカイ扉を開けると…

「ルーク…」

男が立っていた…

「父上、ただいま帰りました…」

その男がルークの父親、ファブレ公爵だ。

「ルーク… グランツ謡将も無事で何よりだ。」

「ご心配をおかけしました…」

ヴァンも頭を下げる…

「ガイもご苦労だったな。」

そう言うと…

ガイも同様に頭を下げた。

「使者の方々もどうかごゆるりと…」

そう言うと…先ほど会ったセシル少将がやってくる。

「公爵様、国王がお待ちです。」

「ああ…」

そう言うと…バチカル城のほうへ…

その際…ティアになにやら耳打ちしていた…

ティアは…顔を俯かせながら謝罪を…

恐らくは…ふき飛ばされた原因であるティアを責めたんだろう…

1人息子にそんなことをしたのだ… 故意ではなくとも…そう簡単に納得できるものじゃない…

「ティア…」

アルはそんなティアを見ていたが…

かける言葉が見つからなかった。

そんな時…

「ルーーーークーーーー!!」

女性の声が聞えてきた。

「くくくん?」「くくく」「げっ!!」

1人だけ反応が違うのは…ルークだ…

皆がそちらを見ると…

ドレスを着た金髪の女性が駆け寄ってきた…

「まあ!なんですか?その態度は!私がどんなに心配していたか!」

「ご立腹だね…」

すると…

「やつ やあ ナタリア姫 ルーク様は照れているんですよ!」

「ガイがフォローに入るが…」

「逆効果!」

特にガイにとっては…

「ガイ!貴方も貴方ですわ!」

「無理です!!」

そう叫んだ…

「あまり…力いっぱいそう言うもんじゃないと思うよ?女性に対してさ…」

アルがやれやれといった感じだ…

「仕方ないだろー!!」

ガイはまだ震えていた。

女性陣の反応は違った。

「結婚?」「なにいつてんだろ」

ティアは普通だけど… アニスは…

「ナタリア姫はルーク様の婚約者なんだよ!」

そう言つと…

「えっ」「ええ”!!」「みゅあっ!!」

ミュウが…変な声で鳴いたのは…

アニスが抱いていて…

そう聞いた途端 抱いていた手に力が入ったためだ… 苦笑

「ルーク!!」

ルークは照れているのか… 変な顔をしていたが…呼ばれて、

「なっ!なんだ!!」

慌てて返事をしていた。

「一刻も早くおば様のところへ!」

「母上がどうかしたのか!？」

ルークも心配なのだろう、慌てて聞き返す。

「貴方がいなくなった後…病で倒れておられるのよ…私はそのお見舞いできていましたの… 早くお顔を見せて差し上げて!」

そう言うと、ルークは慌てて。一言だけ言いその場から走って向かった。

それを聞き… 再びティアが顔を暗くする…

「ティア…」

アルがティアの方を触る。

「気になるんだったらさ… ティアも会ってきて直接謝ればいいん

じゃないかな？ ルークも…ずっとティアと旅してたから、悪いようには言わないと思うし… 何より、ティアは悪気があって、ルークを巻き込んだわけじゃないんだからさ。謝れば…許してもらえよきつと、」

そう言う…

「アル…」

「アルの言うとおりでと思うぜ？奥様は心配性だから、本人が直接謝れば… きつと心配が1つなくなると思うしさ。」

ガイもそう言った。

「そうね…」

ティアもルーク同様、走って向かった。

「相変わらず、アルはやさしいねえ。」

ガイがそう言う。

「あはは… あんなに暗い顔されちゃ仕方ないよ。ずっと…ここに
来る前から気にしていただろっしさ。」

笑いながらそう言う。

「そうですね…」

イオンも感じていたようだ。

だから…これで良いと思っていた。

#38 ルーク邸・婚約者ナタリア（後書き）

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7030u/>

Tales Of The Abyss ~ Another story ~

2012年1月12日01時03分発行